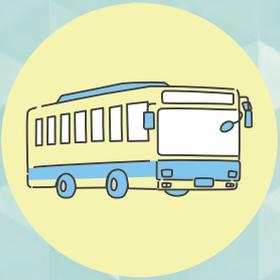




令和6年度



フィールドワーク 報告書



このたび、新潟大学医学部医学科の1年生が、初めて県内全域にわたる計34の自治体を訪れ、地域を体験する機会を得ることができました。学生たちは新潟の各地域という実際の「場」に触れ、そこで暮らすとはどういうことか、そこで医療を受けるとはどういうことかについて、住民の視点に立って考える貴重な学びの機会を得ることができました。関係各位の温かいご支援とご協力、特に新潟県のご支援に心より感謝申し上げます。

学生たちはまだ医学の専門的な学修を始めたばかりですが、これから彼らが学んでいく医学・医療は、地域に暮らす住民、そして広くは国民のためのものであるという原点を、今回の経験を通じて感じ取ってくれたことと思います。患者さん一人ひとりの人生は、それぞれの生活の場、地域の文化や歴史に根ざしており、そうした背景を理解することなしに医師として適切な医療を提供することはできません。本フィールドワークは、そのような視座を育む第一歩として、非常に意義深いものとなりました。

本報告書は、今回のフィールドワークの概要と学生たちの学びの内容、そしてこの体験を通じて得られた気づきや課題をまとめたものです。ご多用のところ恐縮ではございますが、ご一読のうえ、忌憚のないご意見やご助言を頂ければ幸いです。このような地域との交流を深めることは、医学生の成長につながり、やがては県内外の医療に寄与するものと確信しております。本実習は今後も継続してまいりますので、今後の教育活動の一助としてご活用いただけましたら幸いです。

末筆ながら、事前インタビューにご協力いただいた皆様、現地で学生を温かく迎えご支援くださった住民の皆様、そして受け入れに多大なるご尽力を賜りましたすべての関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

概要

1. 趣旨・目的

令和6年度より、本学医学部医学科1年生を対象に、新潟県内35の地域を4人1組で訪問させる「新潟を知る！フィールドワーク」を実施した。

本実習の目的は、これから6年間学ぶ場である、新潟において、1. 地域を知ること、2. 地域の課題と解決法を考えること、3. 協同学習をして、発表することである。実際にその土地を訪問し、地元の方との交流を通じて、新潟県の理解を深めることで、新潟への愛着が醸成されることも副次的に期待する。

2. スケジュール

- 10月 行先とグループ決定
- 10月～11月 事前インタビュー実施
- 11月～1月 各班毎にフィールドワーク実施
- 2月3日 発表会

3. 地区

- | | | | | |
|----------|--------|-----------|-----------|--------|
| ① 新潟市東区 | ⑧ 阿賀野市 | ⑮ 聖籠町 | ⑳ 長岡市（寺泊） | ㉑ 南魚沼市 |
| ② 新潟市江南区 | ⑨ 阿賀町 | ⑯ 弥彦村 | ㉒ 小千谷市 | ㉒ 湯沢町 |
| ③ 新潟市北区 | ⑩ 佐渡市 | ⑰ 三条市 | ㉓ 柏崎市 | ㉓ 津南町 |
| ④ 新潟市西蒲区 | ⑪ 村上市 | ⑱ 燕市 | ㉔ 見附市 | ㉔ 十日町市 |
| ⑤ 新潟市南区 | ⑫ 新発田市 | ⑲ 加茂市 | ㉕ 出雲崎町 | ㉕ 上越市 |
| ⑥ 新潟市秋葉区 | ⑬ 関川村 | ㉚ 田上町 | ㉖ 刈羽村 | ㉖ 妙高市 |
| ⑦ 五泉市 | ⑭ 胎内市 | ㉛ 長岡市（長岡） | ㉗ 魚沼市 | ㉗ 糸魚川市 |

4. 対象者

新潟大学医学部医学科1年生140名

フィールドワーク報告（1～35班）

1. 新潟市東区

行った場所：東区

実施日：12/20

班員：小澤征矢 大滝峻央 鯨岡陽 瀧川愛那

フィールドワークを行うにあたって新潟市東区について事前に調べた。新潟市東区は日本海に面しており、新潟空港や新潟西港などがあり空と海の玄関口として機能している地域である。新潟空港は1936年から本格的に旅客運送が開始され、以降国内各地や国外へと路線を広げていき、現在は年間約100万人が利用している。また新潟市東区の特徴として工場の数がとても多く、商工業が盛んであることが挙げられる。明治時代後期に新潟鉄工所ができて以降多数の労働者をかかえる街として発展し、1929年に市の都市計画で山の下が工業地帯に指定されたことにより、工場建設が加速していった。そして住宅地も多く形成されているため、子育て施設や遊び場、レジャー施設が充実しており、住民にとって住みやすい街となっている。

東区の保健師の方々のインタビューでは、様々な事を知ることができた。はじめに、東区の便利な所と不便な所を伺った。主要道路のバス路線が充実していることや、大きなスーパーマーケットが多く、車があると過ごしやすい利点がある一方、住宅街のバスの路線は限られていて高齢者などには移動が大変であり、車がないと生活が難しいということでも仰っていた。次に東区の環境問題について伺った。東区は工場地帯であることから昔は工場の煙で学校の校舎が黒くなるほどに健康被害も出ていて、その関係で今も耳鼻科が多くあるそうだ。しかし、現在では煙による健康被害は規制により少なくなっている。最後に水俣病に関してお聞きした。東区の阿賀野川流域では過去に水俣病が流行していて、現在でも後遺症に苦しむ方々がいる。患者宅に保健師や看護師が毎年訪問して話を聞いていると知り、地域全体で寄り添う体制がある。

新潟市東区での遠足では、街の特徴や地域の様子について多くのことが分かった。新潟市東区は、伝統的な建物と近代的な住宅が混在する街である。屋根瓦の家々が多い一方で、近代的な住宅や店舗も点在している。また、工業地帯であるため煙や特有の匂いが街を覆っているが、その中でも水がきれいに保たれ、ソーラーパネルの設置など環境にも配慮されている。医療施設や車関連の店舗も充実しており、歯科医院や多種多様なクリニックが目立つ。特に、高齢者向けの施設やサービスが多く、スポーツセンター周辺にも健康を意識した店舗が立ち並んでいる。地域住民は、平日でもスポーツ施設を活発に利用しており、キャラクターを使った健康推進活動も行われている。また、木戸病院周辺では福祉施設からの送迎車が頻繁に見られ、地域全体が健康支援の拠点となっている。さらに、空港周辺には新潟のお土産や空港関連グッズを扱う店舗や、新潟の観光をアピールする置物や映像が流れており、新潟県の窓としても良い働きをしているようだ。

今回のフィールドワークを通して東区の良さや課題が顕著に表れたのは、交通の便についてである。東区は空港などにより区外へのアクセスは良い一方、電車やバスの路線に限りがあり、区内の移動は不便に感じられた。旅程を立てる上でもバスが少なく、徒歩に多くの時間を費やした。そのため地域住民はより一層不便に思っていると考えられる。特に、足の不自由な方は家にいることを余儀なくされてしまうので、バスの路線を拡大し、医療が要介護者の増加を防止することが必要だと思った。また、工場の健康被害も重大な問題である。工場を無くせば人々の生活が不便になり、移転すれば移転先の地域で健康被害が生じるので根本的な解決に繋がらない。よって、現在行われている規制を継続するとともに、有害物質の厳重な管理や騒音対策、定期健康診断が必要だと思われる。新潟水俣病問題などから、管理・規制不足の恐ろしさを若い世代に伝えていくことも重要だ。

2. 新潟市江南区

行った場所：新潟市江南区

日付：12月11日

メンバー：古濱憲、塚越光太、藤野麗、牧野寛至

事前に調べたこと：新潟県全体として高齢化や医師の偏在といった問題がある。住民バスや区バスの運行を行っている。江南区の子どもの割合が新潟市で1番高い。

インタビューで聞いたこと：住民性が良く、優しいおばあちゃんが多い。農村が栄えていたり、亀田製菓などの大きな工場も栄えていて、住民とのつながりが強い。買い物もしやすく、生活の利便性が高い。

医師が少なく、年齢層も高めで、訪問診療も少ない。高齢者の多くは車の運転が大変なため、訪問診療の整備が必要。

交通の便を良くする取り組みを行っていて、コロナ前と同じくらいの収支率に戻ってきた。公共団体や施設と協力して、バリアフリー化も行っている。

浸水被害もあったが、河川や土地の改良を行い、対策した。また、いちご、梨、トウモロコシ等、その土地を生かした農業の発展を行っている。

新潟市全体の取り組みとして、妊娠・子育てほっとステーションを開設し、妊娠期から子育て期まで切れ目のない支援を提供している。

行ってみてわかったこと：農村が栄えていた。優しいおばあちゃんが多く、バス停でバスを待っていた時に、「河川蒸気」というお菓子をくれた。

その自治体の良さ：住民性が良く、優しいおばあちゃんが多い。亀田製菓などの大きな工場も栄えていて住民とのつながりが強い。高速道路や国道もあり、交通の便が整っている。

課題：医師が少なく、年齢層も高い。高齢者の多くは車の運転が大変なため、訪問診療の整備が必要。複数の診療が必要な場合、江南区では対応しきれない。

解決策：若い医療従事者を確保するために江南区の魅力を積極的にアピールする。訪問診療の拡充の支援を行う。交通の便の整備を今よりもさらに行い、江南区のまわりの地域にも行きやすくして、まわりの地域とも協力する。

3. 新潟市北区

行先：新潟市北区

日付：2025年1月18日

班員：庄司桜 久古谷航明 藤下和花 成沢志温

〈事前に調べたこと・インタビューで聞いたこと〉

北区は新潟市中心部から見て最北部の行政区である。地理的には新潟市の東端に位置し、区域のほとんどはなんと東区のさらに東側にある。平成の大合併前から新潟市域であった北地区（松浜、濁川、南浜地域）と、同合併時に編入された旧豊栄市域で主に構成され、区役所は旧豊栄市域に置かれている。なお区域にはこの他、新潟市石山地区事務所管内であった細山の一部、旧横越町域であった横越・小杉の各一部、及び十二前も含まれている。また松浜町は阿賀野川を挟んで東西にあるが、このうち左岸側は東区中地区（下山地域）に属している。面積は107.85平方キロメートル、人口は約7万人である。

イメージカラーは田園や海岸に広がる松林、福島潟のオニバスなど、豊かな自然を意味する「ネイチャーグリーン」となっている。またインタビューでは北区の医療事情としてコロナ禍における救急搬送のシステムなどについて教えてもらった。

〈行ってみてわかったこと・自治体の良さ〉

行ってみて感じたことは北区は自然豊かで心落ち着く田舎だということだ。道ゆく人はおじいさんおばあさんが多く、優しい感じの人が多かったが、高齢化を感じた。静かな田舎だったが競馬場だけは熱気に溢れていた。競馬新聞を握った多くの人々が固唾を飲んでモニターを見ていた。中央競馬の競馬場は北区の経済にとってかなり重要なのではないかと感じた。また、ばかうけ工場も小さい子供がたくさんいて、北区の名物として大きな役割を果たしていると思った。

住民の声が聞きたくて道端でインタビューをしたのだが、通りすがりのおじいさんは競馬をするために家から健康のために10キロメートル歩いてきたと言っていた。競馬場はこのように住民の健康にも重要な役割を果たし

ているのだと感じた。

新潟市北区の良さは緑が豊かで静かな生活ができる所だ。トマトやさつまいもなど農業が盛んで、都会の喧騒が苦手な人にはぴったりの土地となっている。また新潟市中央区へのアクセスも悪くなく、便利な土地であると言える。

〈課題・解決策〉

新潟市北区の課題は自然豊かであるといった点では住みやすいかもしれないが、スーパーやコンビニ、ドラッグストアなどの生活必需品を買う場所が少なく、自動車がないと不便である。また積雪の際、中央区に比べて除雪が遅い、行き届かないなどの点で交通は不便かもしれない。そうした交通の不便や、会社・学校の少なさ、娯楽の不足などにより若年層が定住しないことも課題である。

課題の解決策としては、まずスーパーやコンビニなどをつくり、生活必需品の購入をしやすくする。除雪を増やす。若者が定住できるよう、農業を活かした仕事を増やす、テレワークなどを推進するなどが考えられる。

4. 新潟市西蒲区

行った場所：新潟市西蒲区巻

日付：1月8日

メンバー：田畑光理 佐山蓮 佐藤萌 東澤寛喜

事前調査：新潟市の行政区の中で最大面積

巻町は2005年に市町村合併で新潟市になった

インタビュー内容：

- ① 長く住んでいないと分からない魅力
地域交流が密であること
- ② 地域住民の健康を守ることに於いて面積が大きいからこそその困難
居住地や農地など面積以外の要素の影響が大きい
- ③ 西蒲区高齢者見守りキーホルダー事業の普及率や効果
約1,100人が利用しているがうまく活用された例はたったの1件
本人が申請をしている時点でしっかりしている方という場合が多い
あくまでも手段という位置づけで周りがキーホルダーの存在を知っていることが重要

良さ、課題、解決策：

西蒲区の良さは人が優しいことだと感じました。僕含め、班員の2人が西蒲区の出身ですが、最近は巻町の人と関わるのが少なくなっていたので、巻町の人たちの暖かさが特に印象に残りました。課題としては区内の移動手段が少ないことに加えて、高齢者数が多いことだと思います。車を持っていないと移動が非常に困難です。車の運転が困難な高齢の方は外出して活動することができなくなっていると思います。解決策は公共交通手段を充実させることだと思います。医療の観点では在宅医療に積極的に取り組むことだと思います。

5. 新潟市南区

行った場所：新潟市南区

日付：12月11日（水）

メンバー：廣田海斗 田中胡名 榎水寿真 田中廉人

事前に調べた医療関係のこととして南区では全国平均に比べて医師の「人口十万人あたりの人員数」が半分以下であることや、在宅医療に区全体として力を入れていることなどがわかった。また人口に関して南区は新潟市の中で最小ということや歴史が深く今でも祭りや芸能などの文化が多く残っていることなども印象深かった。他にも名産として数多くの種類の果物があり、果樹園も多く存在することもわかった。この時期には新潟県の名産であり「幻の洋梨」とも呼ばれるルレクチェの旬ということも調べることが出来た。

インタビューでは主に南区の医療問題について答えていただいた。「医師の人数が少ない分、チーム医療としての意思決定が遅れてしまうと思われるためそれはどう対処しているのか」という質問には介護施設と医療機関が連携しており医師の先生の指示により素早く問題を解決できる体制を整えているという回答を頂いた。また包括支援センターという高齢者の方がいつまでも住み慣れた南区で生活することができるように家族の問題や福祉的な問題などを解決するところがあり、一人暮らしの高齢者の方にとっても住みやすいようにしている。他にも南区は鉄道がなく、住民の方の主な移動手段は車かバスであるがバスも本数が少ないという問題があることを教えていただいた。最後にはオススメの果物を聞き、やはりルレクチェがオススメであると教えていただいたのでフィールドワークの際には必ず食べるということを決めた。

実際行ってみてわかったこととしてやはり高齢者の方が多いという印象を受けた。平日の昼頃とはいえ、歩いていてもバスに乗っていても役所でもあまり若い人がいるという感じはしなかった。また役所では多くの健康に関する講座や相談会、予防接種のチラシがあり、やはり高齢者の方の割合が多い分健康というものに関して力を入れているということを感じた。また個人的に驚いたことは大通りに面している土地に思いっきりビニールハウスや畑があったりして、普段住んでいる中央区とは違うということである。その他にも川沿いを歩いているとバス停の間隔がとても短く設置されているということに気づき、これも車を持たない住民の方への配慮なのではないかと考察した。白根グレープガーデンという果樹園では、もう都会では見ることのほとんど無い様々な果物の試食があったり、オシャレなカフェが併設されていて私はなんて素敵な場所だと感動した。しかし平日の昼ということも相まってお客さんはあまりおらず大変勿体なくて残念であった。班全員で買ったルレクチェは大変美味しかった。

南区の良いところとして文化や名産を大事にしていることが挙げられる。我々が訪れた役所でも階段に白根大風合戦の風が貼ってあったり、南区のものに関するガチャガチャがあったりした。またホームページでもその文化や歴史を事細かく記載していて、南区を知ってもらおうという区の方の熱量が伝わってくるほどのものであった。名産のルレクチェや試食で頂いた葡萄は大変美味しく、私自身実家への土産として南区産のルレクチェを配送したほどである。

南区の問題としてやはり交通の便が悪いということが挙げられると思う。前述の通り鉄道は無く、頼みのバスも本数が少ないという事態。私たちも移動にかなりの時間を費やしたし、まだ雪が降っていなかったから良かったものの雪の寒さの中の徒歩には限界があると思う。しかしバスの本数を増やそうとしても日本全体としてもバスの運転手は不足していて人材を確保するのは大変で、また新しくバスを買うとしてもその維持費や高騰するガソリン代を考えるとなかなか難しい問題なのだと思う。また田んぼが多いため仕方がない部分もあるが、あまり整備されていない狭い道も多くそういう面では住みにくいのではないかと考えた。

6. 新潟市秋葉区

FW実行日：2024年12月18日（水）

班員：松田康成 佐藤冬威 古沢朱斎 山田百花

訪問場所：JR新津駅 新津油田跡地 AKIHA麵屋粹翔

事前に調査したこと：

- ・秋葉区ホームページより秋葉区成立の経緯や観光地等の見どころ。
- ・秋葉区は平成中期、新津市と小須戸（こすど）町とが合併してできた比較的新しい区であること。
- ・新津は古くは清和源氏の流れをくむ新津氏の拠点であり、戦国時代は上杉家に仕え、幕末には旧幕府側に組みしていたこと。
- ・サツキ、ボケ、アザレアや寒梅等の花が有名であること。
- ・新潟は石油の産地として知られており、中でも新津油田は全国有数の石油産出地であったこと。
- ・「白痴」「墮落論」で知られる坂口安吾ゆかりの地であること。
- ・「笑わない男」で有名になったラグビー稲垣選手の出身地であること。
- ・白玉の滝 という滝で滝行ができるというのが興味深かった。

- ・新津美術館という美術館があること。
- ・新潟県立の植物園があること。
- ・古くは明治後期から鉄道が通っており新津駅という駅があったこと。
- ・新潟はラーメン大県であるが秋葉区も例に漏れず美味しそうなラーメン屋が多くあったこと。
- ・新潟薬科大学の新津キャンパスがあり地域連携、まちづくりを推進していること。
- ・花夢里にいつ という道の駅があるということ。
- ・その他班員各々が秋葉区紹介サイトやブログ等で秋葉区の魅力、見どころを調べた。

インタビューでお伺いしたこと：

- ①（質問）秋葉区は市内で西蒲区に次いで二番目に高齢化率が高いですが、これに対し区が行なっている積極的なアプローチがあれば教えてください。
- （回答）・モデルハウスづくりといったケアシステムの構築を進め、高齢者のケアをする。
- ・町単位で地域に出向き、健康、病気予防についての講演やラジオ体操などのイベントを行うことで正しい知識を共有し、住民の健康維持に努める。
 - ・住民の健康面での課題となっている糖尿病や認知症等の病気の相談に乗るため、相談会や健康ミニ教室をひらき、健康相談事業を進めている。
 - ・人口は減っているが、高齢化率は高いまま。アキハスムプロジェクトを実施し、他県からの移住者を増やしている。
- ②（質問）私たちの班は新潟のことをあまり知らず、秋葉区にも訪れた事がない班員が多いのですが、秋葉区の魅力を知ることのできる、観光におすすめの場所を教えてください。
- （回答）・弥生時代の遺跡（古津八幡山遺跡）やAkiha健康レストラン
- ③（質問）2007年に新潟市が政令指定都市となって秋葉区が誕生しましたが、どのような経緯があったのでしょうか。また新潟市から新潟市秋葉区となったことで、その地域の医療体制に変化はありましたか。
- （回答）・平成の大合併で、全国的な動きとして市町村の合併が進んだ事が背景にあった。
- ・合併前は病院が3つのみであったのが、合併後は（区内として）病院が増えた。

訪問後の感想：

訪問日（12月18日）、秋葉区では雪が（比較的強く？）降っており、山の方に行くにつれ一面真っ白の景色が見られました。天候の影響もあってか人通りは少なく、下校中の小学生を数名見かけた程度でした。また、かねて新津美術館を訪れたいと考えていましたが、班員全員の都合のつく日（訪問日）は休館であったため断念しました。

JR新津駅は中程度の大きさの駅で、西口入り口の壁にかかっている時計が印象的でした。駅の前には花壇がありましたが訪問当日には花を見ることは叶いませんでした。駅周辺には小規模の商店街が見られ、また、道路上雪が積もっていない部分には、新潟県随所でよくあるような赤く焦げたような色が見られました。

新津油田方面に向かうにつれ雪が深まったようでした。山や森林部と住宅地との境界の地域では坂が多く、道路より2、3段上に民家がみられ、細道では車の走行が困難に思われました。人通りはほぼ無く、人が離れて長く経ったであろう空き家が散見されました。新津油田跡地では、住宅に囲まれた場所に小型ビル程度の高さのタワーと水車のようなものがあり当時の石油産出の光景を思い起こさせました。この施設はポンピングという工程に使用されたものだそうで、他にも住宅地の所々に石油産業の名残を見る事ができました。

その後AKIHA麺屋粹翔を訪れました。太麺の味噌ラーメンで、ネギが多くのっているのが印象的でした。メニュー表にはギャグの効いたものもありお店の雰囲気の良いさが伺え、お客さんは、サラリーマンや現場仕事の方、家族連れなど様々で、地域の多くの人に愛されている事を実感しました。

秋葉区の魅力や、秋葉区の抱える課題について：

新潟市秋葉区は市の南側に位置し、面積約95km²、人口7万5千人を抱える区であり、平成の大合併に伴い新潟市と旧小須戸町が合併してできた比較的新しい区です。人口10万人あたり一般診療所の数は53.28個で、医師数は約161人であり、共に全国平均を大きく下回っています。住民の年齢層は70から75歳以上が最も多い層となっており、人口も減少傾向にあるようです。

秋葉区に限らず新潟市全体で、少子高齢化の問題に直面しています。中でも秋葉区は、令和2年3月末時点での高齢化率（65歳以上人口の比率）が市内で二番目に高く、実際に現地を訪れた際も若い年齢の方は見かけることは少なく感じられました。新津駅にはJR信越本線を含め3線が通っており新潟駅まで18分程度で行けるようですが、住宅地から駅まで少し離れていたりスーパーが近くに無かったりと、車の必要性が高いようであるため、雪の積もる冬場などは外出に多少の困難を伴うと考えられます。

それでも、ウオロクなど大型のスーパーや道の駅、美術館や総合体育館など充実した設備があり、若年層や子育て世代の方々の移住先におすすめできる地域であるといえます。

#アキハスムプロジェクトではフェイスブックやX、Twitterを通じて秋葉区の魅力を発信しています。オンライン移住相談会や移住者座談会など、移住を考えている方々へのサポート、各種イベントも開催されています。また、地域子育て支援センターではフリースペースの開放や育児講座、育児相談など、子育て世代を支える様々な取り組みが行われ、季節の行事や絵本の読み聞かせ等のイベントで人々の交流の機会が作られています。

一方、増加傾向にある高齢者の方々を支援するため、ケアシステムの構築、例えば健康ミニ教室など健康相談事業を実施したり、配食サービスを展開するなどしています。ケアハウスや生活支援ハウスが設置されており、高齢者個々人の生活状況に応じて幅広く対応可能となっています。

秋葉区は、水と緑のまち、石油の里、鉄道のまち、花のまち、文化のまち、などと呼ばれ多くの人に親しまれています。大きな公園や植物園など自然が豊かに存在する傍ら、弥生時代の遺跡や石油産業跡地、鉄道資料館など、歴史を身近に感じられる機会が多くあります。新潟駅へのアクセスもよく、移住先におすすめしたい、魅力のたくさん詰まったまちです。

インタビューを受けてくださった秋葉区健康福祉課地域保険福祉担当 小松様、貴重なお時間をいただきありがとうございました。重ねてお礼申し上げます。

7. 五泉市

訪れた場所：五泉市

日付：12月7日

メンバー：田中秀摩、橋本梨佳子、石原郁也、柿崎大維希

事前に中田製作所（ラーメン）といった飲食店やエスマートといったスーパー、村松公園など五泉市にある観光スポットや特産品を調べました。

篠川主先生へのインタビューではまず①大学病院と地域の病院の違いを聞かせて頂きました。高度な医療の拠点となる大学病院に対して地域の病院は地域の医療の始まりとしての役割があり、高度な医療が必要な場合は大学にお願いし状態が落ち着けばまたこちらで診るなど連携がなされています。②地域医療の面白さは患者さんと関わる時間が増え患者さんのみならずご家族との交流もありお子さんやお孫さんを診たり代々主治医となることも大きなやりがいになるとのことでした。長いスパンで診ることができるからこそ先の結果を見ることもできて、同時にプレッシャーにもなるとのことでした。③地域の病院で働く際の心構えですが、人間性についてのご意見がメインでした。優しく労力を惜しまず感情の起伏のコントロールができる医師であって欲しいとのことでした。④五泉市の生活において不便なことについては地域での生活は大変という先入観に反して今では通信手段や交通の発達もあり不便さの大部分が是正されているようです。子供の教育といった面でもzoom等の活用でハンデにはならないのではとおっしゃっていました。むしろ保育園への入りやすさなど利点の大きさをあげられていました。⑤緩和ケアで大切にされていることは患者さんのみならずご家族のケアも大事にするとのことでした。

実際に訪れてみます物価が新潟市とほとんど変わらないことが分かりました。ベアーズというスーパーで色々な商品とその価格を見て回りました。またこれは予想通りではありましたがバスの本数も少ないので車はやはり必須のようです。資料館で村松との合併により今の五泉市があること、村松がかつて大戦中に軍都としての役割を果たしていたことも分かりました。ゆったりと時の流れる特有の空気を肌で感じることができました。

五泉市の良さは何と言っても恵まれた自然であり、これを活かした特産品がたくさんあります。チューリップ、レンコン、苺、メロン、ブドウ等が挙げられますが特に里芋は人気ブランド「帛乙女」で知られ、国の指定

産地となっています。また良質で豊富な水資源に恵まれ絹織物の産地として知られておりニットが有名です。五泉市の課題は日本の地方に共通する問題ではありますが医者の数が足りていないことであり、解決法としては篠川先生が述べられていたように生活面でのQOLが都市部に比べ劣るものではなく、むしろ恩恵の方が目立つといったことを周知させていくことが挙げられると思います。

8. 阿賀野市

実施日：12月7日（土）

行った場所：旦飯野神社、瓢湖、水原代官所

メンバー：大崎青葉 小林良賢 佐々木小夜子 高木慎一郎

・事前学習

阿賀野市は、新潟平野のほぼ中央に位置し、南側に大河阿賀野川が流れ、東側に標高1,000メートル級の山々が連なる五頭連峰を背にして形成された扇状地に6,500ヘクタール余りの水田が広がる穀倉地帯である。また、新潟市から南東へ約20キロメートル、北東は新発田市、北西は新潟市、南西は五泉市、南東は阿賀町にそれぞれ接している。磐越自動車道と国道49号が南北に、国道460号と290号・JR羽越本線が東西に走り、大都市に近い自然環境豊かな地域であると言える。産業としてはヨーグルトやアイスクリームなどの乳製品の他、安田瓦が特産品として有名である。近年は人口減少が著しく、医療の供給が減少し、介護需要が増大することが予想されている。

・インタビュー

あがの市民病院の医師の方にインタビューを行った。新潟大学および他大学の地域枠が今後地域医療に貢献する他、医師も魅力を発信しなければならいと主張されていた。また、当直など懸念点はあるものの、あがの市民病院で労働過多は起こっていないようである。阿賀野市は地域の健康づくりに熱心であり、市民も健康意識が高いと述べられていた。これには病院が頻繁に健康相談や講演会を実施していることが背景にあるようだ。安田や笹神地区では開業医の閉院が相次いでいるが阿賀野市が比較的コンパクトなことから、現時点で医療のひっ迫を実感することはないようである。もっとも、地域医療における多職種連携の重要性は強調されていた。

・行ってみてわかったこと、自治体の様子

実際に行ってみると、想像以上に人が少なく、市内の交通の便も良くないことが分かった。バスの本数が少ないため、当日はタクシーを利用した。スーパーの数が少ないことから、自家用車を持っていないと、生活が著しく不便になることが予想できる。

もっとも、悪い点ばかりではなく、五頭連峰と阿賀野川に囲まれた自然豊かな風景や、ヨーグルトやアイスクリームなど良質な乳製品は大きな魅力である。また、政令指定都市である新潟市に車で30分と、通勤・通学がしやすいことは特筆に値する。

目下の最重要課題は、やはり止まらない人口減少だろう。医療状況のひっ迫、地域経済の縮小、地域公共交通の衰退といった課題の原因は、最終的に人口減少に収束する。これは、多くの地方都市が抱える問題であり、明確な解決策はまだ提示されていないが、子育て環境を充実させることは人口減少に歯止めをかける上で必須と言っても良い。具体的には、保育所の数を増やし、子供が遊べる公園や広場を作ることが挙げられる。

総じて、県外出身者は新潟市以外の地域に行く機会はほとんどなかったため、貴重な体験だったようである。今後も、新潟県の地域医療に積極的に目を向けていきたい。

9. 阿賀町

フィールドワーク先：新潟県東蒲原郡阿賀町

行程日：2024/12/12

参加学生：田村公佑、松山佳織、岡野柊亜、飯塚光政

1. 事前に阿賀町の①地理的特徴②人口分布③医療圏を重点的に調べた。

① 地理的特徴

阿賀町は、新潟県東部に位置しており、平成の市町村合併で津川町、鹿瀬町、三川村、上川村の4自治体が合併してできた経緯がある。そのため1番人口の集中している津川地区を中心とし、津川から見て阿賀野川下流の新潟市方向にある三川地区、上流方向にある鹿瀬地区、常浪川上流方向にある上川地区のおおまかに4つの地域区分がある。阿賀町を東西に縦断している阿賀野川を上流方向に行くと福島県の会津地域があり、歴史的には新潟と会津を結ぶ舟交通の要所であった。現在も比較的交通量の多いいわき新潟線や国道459号などが通っており阿賀町は新潟福島の陸上輸送の重要な一部になっている。

② 人口分布

1番人口が集中しているのが山間部の多い阿賀町で阿賀野川と常浪川の合流地で開けた土地の津川地区で、3,738人（H31時点）である。

次に人口が多いのが三川地区であり2,977人（H31時点）で、これは新潟県の中心部との距離的な近さが起因していることが窺える。

上川地区の人口は2,322人（H31時点）で、上二つの地域と比べ人口が少ないことが窺える。この原因としては会津への通り道である阿賀野川流域から外れていることが考えられる。

鹿瀬地区は津川地域からの近さのせいか人口1,846人（H31時点）と一回り少ない数字になっている。

どの地域を見ても高齢化率が45%を超えており、これは昭和期に阿賀町で多かった一次産業に大きく影響を与えている。

③ 医療圏

阿賀町医療圏では一次のかかりつけとして常時開いている県立津川病院（可動病床数42床）、地域の定期検診や内科外来などでも使われる三川、上川、鹿瀬の各診療所、津川地区の歯科医院2軒、渡辺医院によって構成されている。

重症患者や大規模病院での検査診察が必要な人は、自家用車や阿賀町が運営する新潟市の主要医療機関までの阿賀町バスで新潟市まで赴く。

2. インタビューを行なって①地域の子育て支援策②医療人材不足について伺うことができたのでよかった。

① 子育て支援策については18歳（高校卒業）までの児童の医療費が全額無償であったり、妊産婦医療費助成などの子育て支援策が充実しており、阿賀町全体で子育てをサポートしていく姿勢が伺えた。

② 医療人材不足が大きな課題となっており、県立津川病院では常勤医が6人（内科5人、外科1人）と少なく、内科外科以外の医療科では新潟大学病院やがんセンターからの非常勤医師の派遣で成立している。また、津川地域以外の高齢世帯では訪問看護の利用率も高く、こういったところに高齢化の影響が大きく出ていることがわかった。

3. 実際に阿賀町を訪れて、今回訪問した津川、三川エリアの所感を述べたい。

三川エリアに関してはしっかりと確認することができなかったが、磐越西線、国道49号沿いに町が形成されており、訪問介護の施設や歯科医院が見られ街に必要な衛生環境は成立できているように見えた。しかし介護施設の人材の状況はわからなかったので機会があれば知りたい。

津川エリアでは主に県立津川病院とその周囲の介護施設などを見た。一部最近改築されたような施設も見受けられる一方で、津川病院は建物の老朽化が見受けられた。

一方で阿賀町全体での医療圏としての機能自体は津川地区に集約して、遠方の住民の方には町の運営する無料送迎や訪問診療看護を通して治療を受けてもらうという形でうまく機能しているように見えた。

4. フィールドワーク全体を通して感じた課題について

今回、フィールドワークを通して感じた1番大きな課題は常勤医の不足であるように思えた。この問題に関して、大前提として県立津川病院は阿賀町全体で唯一の夜間対応のできる病院であるから廃院することが不可能である。その上で、現在は常勤医6名と新潟市内からの派遣医師で病院の機能は成立しているが、今後10年後を考えた時にこの形態のままうまくいく保証はないように感じたのが実のところである。そもそも新潟県全体で医師不足が叫ばれており、同時に全国的に見ても現在労働環境の諸問題から大学病院に残る医師が少ない現在、数年

後病院の利用者数がピークに達したときに今と同じように市内から医師が派遣されてくる保証はないと言える。この問題に対する町ができる課題解決方法としては、常勤で働ける医療関係者を増やしていくのが良いと考えられる。阿賀町での医療機関の機能形態は確立しており素晴らしいものがあるので、あとは持続可能性を備える必要がある。

10. 佐渡市

場所：佐渡

日付：2024年12月12日

メンバー：小林倭大、関根隼、岸琢也、大田朋佳、菅野匠一

・事前に調べたこと

佐渡では農産物が盛んであり、金山が世界遺産に登録されてから観光客が増えている。現在佐渡が直面している課題としては少子高齢化の進行や、年々一次産業と医療に従事する方の数が減少していることが挙げられる。佐渡に移住する人を増やす取り組みとしてはまず佐渡の魅力を多くの人に知ってもらう必要があると考える。

・インタビューで聞いたこと

インタビューで佐渡に住む方は佐渡に愛着をもっており、課題の解決に向けて積極的に取り組んでいることを学んだ。二つのインタビューでは佐渡に住む方が全ての人に温かく、佐渡が生活しやすいと感じていられることが共通していた。離島であるため互いにサポートし合う姿勢があり、人間関係が濃いこと、離島でありながらはっきりと四季が感じられることが魅力である。日常生活には不便を感じておらず、時には島にいることを忘れると話してくださった。

・実際に行って感じたこと

実際に佐渡を訪れることで佐渡の魅力を感じることができた。街の後ろには壮大な山が見え、船を降りた直後であったが島であることを忘れるほどであった。船を降りてすぐにバス停、レンタカーへの案内があり、迷わず移動できた。案内係の方から話しかけてくださり、丁寧に道を教えてくださったことが印象に残っている。また、掲示板などの標識には日本語に加えて英語、中国語、時には韓国語が書かれており、ピクトグラムも添えられていた。観光に来た方が掲示板の内容を理解しやすいように工夫されているのが感じられた。

インタビューで聞いていた通りに、徒歩で移動できる範囲は限られていたが歩道は整備されていて歩きやすかった。移動中に景色が山から海に変わり、場所によっては山と海の両方を見ることができ、自然が豊かで心が落ち着いた。昼食をとったお店では店員さんが温かく対応してくれた。食材は佐渡産のものを使っていると教えてくださり、美味しくいただいた。店内には佐渡を紹介する本、マガジンが置いてあり、地域への愛を感じた。壁には佐渡の背景の写真やスケッチが飾られていた。店内ではお客さんが店員さんと楽しく話す声が聞こえ、アットホームな雰囲気であった。実際に行くことで感じられた魅力があるので、すでに取り組まれているウェブサイトで情報発信に加えて佐渡をSNSで広めること、訪れた人からの情報発信を促すことが佐渡の魅力をより多くの人に知ってもらう機会を作ることができる。

11. 村上市

行った場所：村上市

日付：12月7日（土）

メンバー：伏見拓真、藤原七海、服部和葉、中山響

事前に調べたこと：
・村上市への旅行者の多くは移動手段が自家用車であり、公共交通機関があまり充実していない。
・市民協働街の街づくりを行っている。
・少子高齢化が進んでいて、人口の30%以上が65歳以上の高齢者である。

インタビューで聞いたこと：①大合併により面積が大きい。新潟県全体の10%を占めていて、中心部の村上地区

と南部の荒川地区に医療施設や商業施設が集中している。1人1台車を持つことが生活のために必須である。高齢者になると判断力が低下し、運転が困難になるので、訪問診療や認知症予防教室を開いたりしている。

②公共交通機関については車が多く、便が少なくなっている。高齢者の送迎などの負担が大きく、他の地区への呼びかけを要請されている。

③緊急事態に備えて地域防災計画というものがあり、初動マニュアルに従って行われている。実際にやってみて直した方がいいものは都度アップデートされている。

行ってみてわかったこと：

- ・事前に調べたりインタビューでも聞いたように、少子高齢化が進んでいて、若い人よりも高齢者とすれ違うことが多かった。
- ・全体的に町の人通りが少なく、閑散としていた。
- ・城下町は昔ながらの景観が残されていた。
- ・コミュニティーセンターで地元の方が村上市について教えてくれた。

村上市の良さ、課題など：

- ・村上牛や魚介類がとてもおいしかった。
- ・温泉がとても気持ちよく、快適だった。
- ・公共交通機関をもう少し増やせば、観光の際に便利になると思った。

12. 新発田市

メンバー：石川幸平 小屋峻亮 三浦陸 關谷真都

日にち：11/18

行き先：新発田

・事前に調べたこと

新発田市は臨海部から山間部までを含み、新潟県で10番目に広い市である。新発田城と城下町や月岡温泉などもあり、自然と歴史を特徴とした観光が盛んである。また、飯豊連峰を源流とした加治川などを水源とした稲作も盛んである。

・インタビューで聞いたこと

新発田市で開業している松沢医院様にインタビューを行わせていただいた。新発田市の広さを踏まえた市内の医療供給についての質問では、中心部から離れた山間部の赤谷地区などは、高齢化が進み病院がなくなってしまったことに加え、バスなどの交通インフラも十分でないため通院が問題になっていることがわかった。

先生が開業された当時、周辺に病院が少なかったため遠い場合は山形などからも患者さんが来院することもあったという。松沢医院に来院する患者数は当時に比べ減少傾向にあるが、少子高齢化だけでなく病院数の増加による分散も一因として考えられるという。少子高齢化以外にも視点が必要なことに気づけた。一方で、近年は医師の高齢化により夜間救急の受け持ちが困難になりつつあるといい、新発田市にも高齢化の影響が出てきていることがわかった。

・行ってみてわかったこと

新発田駅周辺は新発田の歴史を尊重した街づくりを行っていた。新発田駅の外観や近くの交番は漆喰づくりのようになっており、その歴史を観光資源として活用しようとする試みが感じられた。駅前には昔ながらの雁木づくりの商店街となっていた。人通りは少なくシャッターが閉まっている店も多く見られた。フィールドワークを行った日が平日であり、荒天だったことも一因であるとは考えられるものの、以前より活気が失われてきていることがうかがえた。一方で、新発田駅から徒歩5分ほどの場所にある県立新発田病院は平日の昼でも駐車場が満車であり、医療の需要の高さを感じられた。道中では街路樹の冬囲いや消雪パイプの点検が見られ、積雪地域ならではの雰囲気を感じられた。新発田城では案内を行っていた市の職員の方へインタビューを行った。人口の減少によって活気が失われていることを危惧しており、通院などで受診をした際に昔よりも若手の医師が少なく、今後の新発田の医療に不安を感じるという。新潟の医学生として、新発田市の医療に貢献したいと思う。

13. 関川村

行き先：関川村

日付：12/15（日）

メンバー：平川優太、濱田夏実、松田武洲、津端莉々子

事前に調べたこと

- ・関川村は平成の市町村合併に参加せず、村としての独立を保っている
- ・子育て支援やUターン促進に力を入れている

インタビューで聞いたこと

- ・平成の市町村合併への不参加を決めた経緯
- ・関川村の医療の現状（他市町村との医療面の連携、交通手段）
- ・少子高齢化の現状（村の出生数は年間10を切っている、高校、大学がなく若者は村外に出てしまう）子育て支援やUターン促進における工夫

フィールドワークのテーマ：「小さくてもキラリと光る村」を目指す、関川村の工夫とは何か。

行ってみてわかったこと

- ・渡邊邸や旧齋藤医院など昔ながらの建物、街並みが残っていた。
- ・道の駅周辺は運動施設、入浴場、歴史資料館などの施設が隣接していて、観光客やその周辺に住む人にとって過ごしやすい環境が整っていた。
- ・渡邊邸の職員の方や歴史とみちの館で出会った集落支援員の宮島さんなど、積極的に手助けしようとしてくれる優しい人たちばかりだった。

その自治体の良さ、課題、解決策について

良さ

- ・関川村移住定住サポーター（集落支援員）として活動している職員さんに熱心な活動家がいること。農村文化交流センターでの食堂開催や関川る～むなどの取り組みにより、子供や高齢の方が集まるような村民同士の交流がある。

課題

- ・学校（高校、大学、専門学校）や病院など村内の施設が不足し、若者中心に村外に人が流出してしまうこと。
- ・大したもん蛇まつりなど村のイベントの担い手が不足していること。

解決策

- ・関川村で夏に開催される大したもん蛇まつりなど、その村ならではの行事を受け継ぎ、その村でしか味わえない思い出を村民に作ることで地元愛を強くさせる。
- ・子育て支援やUターン促進を利用し村に帰ってきてもらう。
- ・車でのアクセスを活かし、村上市や胎内市など村外とのつながりを持ち続ける。
- ・豊かな自然を活かし、通信制高校や民泊、老後の地方移住の場として村外の人を呼び込む。

14. 胎内市

14班・胎内市

メンバー：石岡さくら 大久保怜旺 富樫蒼空 藤谷直輝

実施日：1/15

・事前に調べたこと

新潟県胎内市は日本海と飯豊連峰に囲まれ、四季折々の自然が美しい街です。観光地には胎内温泉や胎内スキー場、春から秋まで様々な花を楽しむ胎内フラワーパークなどがある。特産品は胎内発祥という米粉を使ったグルメや地酒が有名。また、子育て支援や高齢者福祉に力を入れており、福祉関連活動の拡充を進めている。

・インタビューで分かったこと

胎内市の職員の方へのインタビューを通して、胎内市での暮らしの良さや課題について多くのことがわかった。子育て支援では、市内の施設や店舗で割引などの特典が受けられる「子育てきらきらカード」が導入されており、子育て世帯の経済的負担の軽減につながっている。医療体制では、総合病院が市内には中条中央病院しかない。そのため専門的な治療が必要な場合には市外の医療機関に紹介されている。公共交通では、予約制のりあい自動車「のれんす号」が導入されており、高齢者など車の運転ができない地域住民の交通手段として重要な役割を果たしている。

・実際に訪問し分かったこと

中条駅は比較的綺麗で新しく、壁に中学の作品や、胎内市の特産品が当たるゲーム機などが置いてあり、楽しくなるような街づくりの工夫が感じられた。また、平安時代の頃に活躍したとされる女性武者の像も立っており歴史を感じた。駅からの移動手段はのれんす号という乗り合いタクシーと普通のタクシーが使われている。ただ、どちらも人数は限られており、必ず乗れる訳では無いということは問題に感じた。胎内スキー場はローカルな雰囲気漂う過ごしやすいスキー場だった。近くの胎内ロイヤルパークホテルも立派で、温泉やご飯屋さんの雰囲気は惹かれるものがあった。街の道路には消雪パイプが通っており雪国の街だと感じた。中条中央病院にも融雪の水を流すホースがあった。中条中央病院は胎内市の医療の中心ということで人の出入りが多かった。一方で、移動手段が限られたこの街で大きな病院がここだけだということは医療に対して不安を持つ方が多いのではないかと思った。より住みやすい地域となるためには、街の交通手段を増やす、または訪問診療などに力を入れるなどの改善が必要なのではないかと感じた。

15. 聖籠町

場所：聖籠町

日付：12月4日

メンバー：小野山雅音、長澤陽哉、橋本葉奈、福田礼駕

事前に調べたこと

- ・ 聖籠町は工業が盛んである。
- ・ 聖籠町は果樹栽培（さくらんぼ、ぶどう、梨など）が盛んである。
- ・ 聖籠町の高齢化率は新潟県内で最も低い。
- ・ 行政は子育て世帯への取り組みを多く行っている。
- ・ 医療機関はあまり充実していない。

インタビューで聞いたこと

- ・ 港が近く、かつて人が多く住んでいた地域に工業団地が形成されたため、聖籠町では工業が盛んになった。
- ・ 乗用車は生活必需品である。
- ・ 果樹園や釣りの名所が観光資源としてある。
- ・ 働く世代が多く、出生率が高いため高齢化率は低い。
- ・ 保育園の無償化や子供の医療費の整備などを行ってきた。
- ・ 新発田市や新潟市まで行って医療機関を受診する人も多い。
- ・ 子供が多い地域にも関わらず小児科がない。
- ・ 人と人とのつながりが濃い。
- ・ 3つの小学校区で環境、暮らし、言葉、町民性が異なる。

行ってみてわかったこと

- ・ 全体的に土地は平坦。
- ・ 土地利用に余裕があるのか、駐車場の広い大型の建物が多い。
- ・ 住民は皆温かく、優しい。
- ・ 車社会で、公共交通機関が少ない。

聖籠町の良さ、課題、解決策

実際に町で働く人々と話をすることで、地域住民の町への深い愛を感じると同時に、乗用車を持つことのできない学生などの若者や高齢者の生活はどのようになるのかという疑問が浮かんだ。公共交通機関があまり充実していないことは、生活において買い物や通院が困難になってしまうという課題がある。これを解決するために、交通インフラの整備が必要に感じるが、すぐに実行するのは困難であるため、まずはバスの本数を増やすべきだと感じた。また、医療においては、地域包括ケアがより重要になってくるだろう。聖籠町の良さとしては、地域住民一人一人がつながりを大切にしていることだと感じた。聖籠町の良さを尋ねると、皆が口を揃えて人の温かさ、優しさと答える地元愛が聖籠町の良さを物語っているように思った。

16. 弥彦村

実施日時：2024年12月15日（日）

参加メンバー：伊澤萌々子 細貝咲良 木村優太 平川功人

行った場所：弥彦駅 彌彦神社 おもてなし広場 弥彦公園 弥彦競輪場

(1) 事前に調べたこと

弥彦村の基本的な情報について調べたところ、彌彦神社の鳥居前町であり、観光産業が盛んであるほか、弥彦競輪場への集客もあることがわかった。彌彦神社を中心とした観光産業に力を入れており、古くからの伝統を生かしつつ新しい施設も数多く取り入れた町づくりが行われているのではないかと予想した。

(2) インタビューから聞いたこと

燕・三条保健所管内での合同インタビューであったため、弥彦村だけの情報は少なかったが、管内では悪性新生物や心疾患、老衰によって亡くなる方が多いことがわかった。生活習慣病の予防のための対策や、病院同士の連携が進められていて、健康課題への取り組みとして運動を推進するプロジェクトが行われている。

(3) 行ってみてわかったこと

観光客に向けて、地図や観光案内所の設置がされていたり、モデルコースや食事処の情報などがまとめられていたり、観光業に力を入れていることがわかった。神社へ向かう道沿いにも様々なお店や屋台、複合施設などがあり、街歩きを楽しめる工夫がされていた。観光客が多く、駐車場や休憩できる場所が設けられていた。新潟駅から弥彦駅までの電車は時間帯によってかなり少ないため、計画を立ててから観光に行くのが良いと感じた。

(4) 弥彦村の良さ

彌彦神社を中心に、伝統を受け継ぎ、それを発信することで次世代に繋げていく取り組みがされている点がとても良いと感じた。また、地域が一体となって観光業を盛り上げようとしており、新しい施設の整備が活発に行われている点が素晴らしいと感じた。駅や観光案内所ではスタッフの方に親切に対応していただき、そうした施設のスタッフもたくさんいる点は観光客にとって嬉しい点だと思う。

(5) 弥彦村の課題・解決策

電車を利用する観光客にとって、それぞれの名所間の移動は天候によっては大変だと感じた。観光客だけでなく、地域住民も気軽に使えるような、循環バスのような公共交通機関がさらに整備されると良いのではないと思う。

17. 三条市

・行った場所：三条市

・日付：2024年12月22日

・メンバー：柳沼侑里、上田真永、南あかり、中山諒亮

・事前に調べたこと

三条市の人口・年齢別人口、健康に関する状況と課題、産業について調べた。

三条市は高齢化が進んでいる。平均寿命と健康寿命の差が広がっていることが課題になっている。産業として

金属加工業が有名である。

燕三条地域を中心とした新潟県央地域では、以前まで救急医療が脆弱だったため、基幹病院の設立などの医療再編が行われた。

・インタビューで聞いたこと

燕三条地域として他班と合同で三条保健所の方にインタビューを行った。

三条保健所管内では脳卒中や心疾患に対する連携図の作成などを行い、医療機関の役割分担・地域全体でひとつの病院といったことを意識して連携している。

基幹病院の設立を中心とした医療再編を経て、救急医療の9割を県央で診れるようになった。軽症などを診ることが多い地域密着型病院と高度治療可能な基幹病院の二つの柱が要である。

管内では高齢者が増加しており、死亡原因においても一位ががんである。生活習慣病治療ではメタボ改善が重要。健康寿命を延ばすことが課題。

三条市ではスーパーと協力して減塩された食材の販売を行っている。また、企業に協力して働きざかりの人材の健康改善も重要視している。

・行ってみてわかったこと

どこに行っても金属加工業に関するものが目に入った。人より圧倒的に車の数が多い。

現地の方にインタビューを行った。三条市では電車の本数が少なく、移動手段は車・バイク・自転車が基本。消雪パイプがあるものの、冬季に雪で立ち往生などの混乱が生じることもある。かかりつけのクリニックに基本的には通う。地場産業の影響で開業医も多い。金属加工業に関して修行しに来てそのまま就職するような人もいる。

・フィールドワークを通じて知った課題・解決策

三条市および新潟県央地域では高齢化が進んでいる。そのため、生活習慣病などへの地域全体での対策が重要である。また、かかりつけ医と高度治療可能な病院の使い分けの周知も重要である。

18. 燕市

行き先：玉川堂 燕市産業資料館

実施日：12月12日（木）

メンバー：小林碧 高田恒世 中島大成 澤口玲七

事前に調べたこと

- ・燕市の人口 約7万5千人
- ・燕市の名物 金属用食器 ステンレス製品 背脂ラーメン 鎚起銅器
- ・燕市の健康意識改善や身体活動推進の取り組み

三条保健所へのインタビューで聞いたこと

- ・全ての医療が各医療圏のみで完結することなく協力し合っている。
- ・バスなどの環境整備などの高齢者支援が行われている。
- ・金属加工や薬品に関する疾患などが確認されている。
- ・小さな病院が乱立していた県央地域に地域密着型の県央基幹病院ができた。
- ・三条保健所管内ではがんによる死亡が最も多い。
- ・燕市では住民の調査から、満腹になるまで食べる人やラーメンの汁などを1/3以上飲む人が多いことが分かっている。健康づくりマイストーリー運動ではインセンティブなどが与えられている。

行ってみて分かったこと

玉川堂

- ・鎚起銅器の作り方や実際の作業工程
- ・模様の付け方などの細部のこだわり

燕市産業史料館

- ・ 鋳起銅器や金属洋食器などの発達の歴史
- ・ 様々なカトラリーの展示
- ・ ノーベル賞授賞式で使用された金属用食器の展示

燕市の良さ

自然豊かであり一面に広がる田んぼや弥彦山を一瞥することができる。また県央地域では三条燕インターチェンジや燕三条駅が位置しており交通網が発達している。

燕市の課題と解決策

燕市の課題は人口減少であると感じた。実際に燕市内を歩いていると、商店街がシャッター街に近いような状態であることが分かった。他にも空き家などが目立っているように感じた。解決策としては県央基幹病院建設に伴って周辺の再開発などを行うことで人口減少に歯止めを効かせて、新たに燕市に流入する人を増やすことではないかと考えた。

19. 加茂市

実施日：2024年12月19日

北谷春樹・西澤拓馬・古木麻華・水沼竜太郎

事前に調べたこと

- 加茂市民は歩数など運動量が全国平均より低い。
- 新潟県全体としての医療の特徴として、工場内作業中や農作業中の怪我が多い。
- 加茂市運動促進計画を行っている。

インタビューで聞いたこと

- 脳出血性脳卒中が全国平均に比べ多い。
- 第三次産業や市外の業務に携わる住民が多いため、車移動が多くなり運動量が少ない。

行ってみてわかったこと

- ・ 平日かつ悪天候の昼間とはいえ街を歩く人の数がとても少なかった。
- ・ 地域住民が集まって交流できるような場所を見つけることができなかった。
- ・ 病院やその看板の数が新潟市内と比べて圧倒的に少なかった。

自治体の良さ、課題、解決策について

- ・ かもんバスという市内を循環する交通網により気軽に出かけられる。
- ・ 街を出歩く人が少なく、どこか寂しい印象を感じてしまった。
- ・ 食べ歩きができるグルメなど街を訪れ、歩き回りたくなるような名産品の開発が必要とされる。
- ・ 今回はスキー場付近まで足を伸ばせなかったため詳しいことはわからないが、スキーをしに来る観光客が多いなら、その観光客を市街地に連れてくるような導線や魅力的なスポットが必要とされる。

20. 田上町

行った日付：1/18/2025

班員：班長 白石哲史、北川貴章、長谷川修造、山口絵実里

1. 事前に調べたこと

人口 10618人（高齢化率 38.7%）（令和6年度）

出生率1.14

観光名所：椿寿荘、湯っ多里温泉、護摩堂山、湯田上温泉

医療機関数：3軒（歯科は5軒ある）

医師数：4人 ただし医療施設従事者は3人 全国平均に比べ少ない

特産品：梅（越の梅）、ルレクチェ、いちご（越後姫）、たけのこ

強み：ベッドタウンで出産支援と子育て支援の充実

産業別就業人口：第一次産業 5.9%
第二次産業 32.2%
第三次産業 61.8%
分類不能 0.1%

年齢構成：年少人口（0～14歳） 9.1%
生産年齢人口（15～64歳） 53.3%
老年人口（65歳以上） 37.7%

2. インタビューで聞いたこと

田上町 糖尿病の人が多い 保健所とタイアップして食事や生活習慣の調査
今調査中

3. 行ってみてわかったこと

病院を見かけなかった
歯医者は見かける
新潟市より雪が多かった
坂が多かった→車がないと生活が大変そうだと感じた

4. その自治体の良さ、課題、解決策について

インタビューで田上町は糖尿病の患者が多く、保健所とタイアップして食事や生活習慣の調査を現在進行形でおこなっていると聞いた。この調査の結果やその後の地域での呼びかけを通じて糖尿病患者が減る可能性がある。

新潟市、長岡市にどちらも電車で30、40分ほどで行くことができるため、都市に通学通勤することができる。

21. 長岡市

実習先：長岡

実習日：2025年1月8日

氏名：普川瑞生 市川葵 大平明典 笹川蒼天

医学入門の授業の一環として、新潟県長岡市についてその地域理解を深めるべく1) 事前学習2) オンラインインタビュー3) フィールドワーク を実施した。この実習を通して、今後医療を学び実践する地域についての知見を深めることができた。

1) 事前学習

長岡花火が有名な長岡市は新潟県で2番目に人口が多い市であり、コシヒカリをはじめとした産業が活発な長い歴史を持つ地域であった。一方、他の地域と同様に高齢化や医師不足が問題となっており、移住の促進や子育て支援、オンライン診療に力を入れて取り組んでいた。また、長岡市の医療の特徴として医師不足でありながらも救急車におけるたらい回しゼロを掲げている点が挙げられた。

2) 長岡市健康増進課へのオンラインインタビュー

事前学習を基に、長岡市の高齢化率の地域差や医療、子育てに関するインタビューを行った。長岡市の中でも商業施設や公共交通機関による利便性に差があること、災害で転居する人がいることを学んだ。また、その地域差は医療の届きにくさとも関連しているという。子育て支援としては予防接種のアプリ通知など不安を抱える母子をサポートする体制が整っていることが分かった。長岡市の魅力についても伺い、長岡市への理解を深めることができた。

3) フィールドワーク

現地での公共交通機関の利用は、駅に自動改札機がない場合がある点を我々に意識させた。昼食は青島食堂を訪れたが、深い積雪にもかかわらず多くの住民が来店するさまを目の当たりにし、ソウルフードの魅力を感じた。

吉野川ミュージアムでは地域で展開されてきた酒造の歴史や方法について学ぶことができた。長岡市とともに発展してきた産業への理解を深めることができた。悠久山公園では郷土資料館を訪れ、長岡を代表する偉人やこの地域に多大な影響を与えた争いの歴史などについて学んだ。長岡花火についての展示もあり、長岡花火へ込められた深い思いを知ることができた。また、地元の方に勧められ、山本五十六記念館も訪れた。ここでは山本五十六に関連した第二次世界大戦と長岡の関係について、深く学ぶことができた。このフィールドワーク実習によって地域に住む人々の様子や実情、歴史についての理解が大いに深まった。このフィールドワークで深めた地域的背景の理解を、今後の実習などの機会を意識し、生かしていけるよう地域への視点を持ちながら学んでいきたい。

22. 長岡市

場所：長岡市

日付：12月8日

メンバー：吉田光汰 井野颯大 小林優斗 秋山果歩

1. 事前に調べたこと

・移住促進を行っている

→条件付きで補助金が貰えたり、固定資産税が免除されたりする。

空き家購入時、家財等の処分費、ハウスクリーニング等の清掃費、物件のリフォームにかかる費用の一部を補助

・子育て支援を行っている

→子供の数による児童手当、予防接種が無料、高校卒業まで通院費が1回530円、薬局は無料、児童館や児童クラブ、子育てに関するお悩み相談室など

2. インタビューを通して

・市街地と山間部で医療格差が存在する。また、格差をなくすための取り組みを行っている。

例 山古志地域 診療所への巡回バスがあり、診療所の予約とバスの予約をセットですることができる。

小国地域 崇徳会

栃尾地域 長岡中央病院が栃尾診療所を運営

・交通の便が良くないところではオンライン診療を行っているが、問題点も多い。

→利用するのは主に高齢者が多く、電子機器があまり自由に使えない。講習会を開きたいが、人員や経費などを考えるとどう思うようにいかない。

3. 実際に行ってみて

私たちは、長岡市の中でもかなり端の方にある寺泊地域に行ってきた。電車を利用し寺泊駅で降りたが、寺泊駅には改札がなく、また、とても寒かった。よく見てみるとストーブが1つだけ置かれていて、人は私たち以外には誰もいなかった。バスは1時間に1本、方面によっては3時間に1本しかなくて驚いた。交通の不便さを実感した。また、寺泊には主な病院が国民健康保険寺泊診療所しかなかった。他の病院に行くには、隣町の分水に行くしかない。先ほど述べたように、交通の便が不便なので車が必須だが、寺泊は高齢者の割合が高く、そこには免許返納などの問題が関わってくる。そのような問題をどう解決するかがこれからの課題のように感じた。

23. 小千谷市

メンバー：○福井陸、原都和、本間空、新井杏奈

日付：12月22日

小千谷市の人口は3.47万人で、111の市町村の中で、16番目に人口が多い。世帯数は1.21万世帯で面積は155.12平方キロメートルの市で新潟県の中部に位置する。新潟市まで車では1時間ほどで着き、新幹線を用いて電車を使っても1時間ほどで到着する。長岡市までは車で約30分、電車では15分ほどである。小千谷市は錦鯉の発祥の

地であり、現在ではその養殖が盛んにおこなわれている。毎年9月の第2土曜日とその前日に片貝祭りが開催され、その祭りで行われる片貝花火はとても人気で15000発の花火が打ち上げられる。また、国の重要無形文化財に指定され、ユネスコの無形文化遺産にも登録されている小千谷縮がある。これは小千谷市周辺を生産地とするカラムシを使った麻織物で撚りが強い緯糸で織った布を湯もみする事で「しぼ」を出したのが特徴である。小千谷市の良さは、市内がコンパクトであるため地域の繋がりが強く伝統を大切にすることである。課題としては少子高齢化、出生率低下による人口減少のため地域の活力低下が挙げられる。解決策としては、子供や妊婦の医療費軽減や「ホントカ。」など街に賑わいをもたらす施設やイベントを興して、若者に戻ってきてもらうことが考えられる。コロナ禍の感染拡大の予防策として、住民の健康診断を推進した。当時は感染者数がテレビなどで報道されていたが、報道に囚われず1日1日を過ごしていけば大丈夫だということを住民に伝えられるよう努めていた。もともと健康意識が高い地域であるため、コロナ禍によって特設病院を受診する人が減るということとはほとんどなかった。以前2つあった病院が統合して1つになったことにより、中心街に人が集まらなくなるという問題も生じた。また同時に市立図書館の老朽化という問題も発生したため、図書館等複合施設として本庁図書館をリニューアルオープンすることとした。2024年9月末にオープンし、毎週イベントが行われている。5万人ほどが来場し、賑わいを取り戻している。市のホームページでは子どもの医療費無償化、妊産婦さんの診療代の補助の制限撤廃など積極的に出生数を増やす取り組みが見受けられた。しかし、出生数増加には結びついていない。原因として、これらの取り組みが市民に伝わっていないことがあげられる。また、出生数は若い人の人数に起因するため市外に出た若者が小千谷に戻ってきてくれるような取り組みも必要だと考えている。私達が小千谷市に行ってみて分かったことは小千谷市内を歩いている方が少なく、車が主な交通手段であることがわかった。信濃川の左岸地域が右岸地域より発達していた。また、錦鯉の養殖に力を入れており、小千谷市の主要な産業の1つであることが分かった。最後に地域の活力を取り戻すために建てられた「ホントカ。」を実際に訪れたところ、老若男女問わず多くの方が訪れており、小千谷市の活力を戻す機能を果たしていることが分かった。

24. 柏崎市

行先：柏崎市

日付：2024年11月24日

班員：今川達登 周雪蓉 冨塚仁太 西泰史

事前に調べたこと、インタビューで分かったこと

まずは、柏崎の農業について、特産品や農業支援の取り組みについて学んだ。班では特産品として、つららなすや銘柄米「米山プリンセス」があることを事前に調べていたが、市役所の方からは、そのほかにも柏崎産の「越後バナナ」やおけさ柿「新道柿」があることを教えていただいた。また農業支援として、米農家の土壌改良の支援や、1ターン、Uターンの支援、伝統野菜の生産拡大などが行われていることがわかった。次に、イベントについては、ぎおん柏崎まつり、越後三大花火に数えられる海の大花火大会がある。市役所の方からは、特に花火大会に関する様々な取り組みを聞くことができた。「軒先パーキング」といい、希望する市民が家の駐車場を花火客に貸し出すことで混雑を分散させるとともに臨時収入を生んでいることや、花火大会の様子をYouTubeで生中継していること、花火カレンダーが毎年つくられていることなどである。イベントの他にも、紅葉の時期などメディアに取り上げてもらうことで観光地を宣伝しているとのことであった。

行って分かった柏崎市

○良さ

まち歩きをしてみて、人と人とのつながりや市民の方のあたたかみを感じられた。我々が訪れた紅葉スポットの松雲山荘では、ガイドさんが懇切丁寧に説明して下さり、時代背景やゆかりのある人物の説明、園内を散策する際の見どころまで教えていただいた。売店の店員さんに集合写真を撮っていただけなかった際には、写真が上手だという別の店員さんをわざわざ呼んで来て下さった。昼食に立ち寄ったラーメン屋さんでは、チェーン店ではあまり無い店員さんと常連客の会話が聞かれた。また、まち歩きが楽しくなる仕掛けがあると感じた。マンホール蓋の風景や市の花をかたどったカラフルなデザイン、イラストのついた歩道のタイル、「ま

ちしるべ」(文化遺産の標識)など、あちこちに興味深いものがちりばめられていた。

柏崎駅付近で見かけた日石歩道橋について調べて分かったこととして、震災(中越沖地震)以降の復興のなかで今ある施設の開発や整備が行われていた。ラウンジで自習する学生が多いた文化会館アルフォーレも、復興の一環で建設されたそうである。我々が訪れた閻魔堂には、中越沖地震が起こった当時の写真やその後の復興の軌跡が展示されており、災害からの復興の過程を垣間見ることができた。震災後にさまざまな防災機能が整備された駅前公園など、公園も多く設けられており、子育てや市民の憩いの場として活用されていた。

○課題と解決策

なによりも、少子高齢化がすすんでいることが最大の課題である。2024年、柏崎市では65歳以上が人口に占める割合が約35.9%であった。2050年には、人口のおよそ半分が高齢者になるとの予測がある。高齢化により社会体制だけでなく、医療も変革を迫られるだろう。オンライン診療をメインとしたり、診療所をネットワークで結んだりするなど、市民全員に効果的に医療を提供するための工夫が求められる。また、独居の高齢者も増える中で、暮らしを支えるサービスが必要になると考えられる。通院の送迎や買い物の手伝い、家事の補助といった、行政では手が回らないところを担うサービスを拡充すべきだと考えられる。また、柏崎市がすでにブルボン本社で知られているように、企業を誘致することで人を集め、雇用を創出し、まちを活性化することも一つの方法になると考える。今ある文化遺産をとおして地域の知名度を上げるため、紅葉の有名な松雲山荘など、観光地の広報により一層力を入れることも効果的だろう。

25. 見附市

●場所：見附

●日付：12月8日

●メンバー：阿部有妙 関泰生 西川修平 山崎壮太

●事前に調べたこと

・人口、年齢構成、特産品、地理的な特徴、交通アクセス、医療問題(少子高齢化、地域医療)、福祉サービス

●インタビュー

1. 見附市では「ネウボラみつけ」という子どもに対する支援を行っていますが、見附市内での少子化の現状と子どもたちやその親を町としてサポートすることの重要性をどのように考えているか。

・まず出生率だけで見たら見附市は高い。核家族化、家族で子育てというところをサポートしている。

2. 見附市では地域医療体制の充実に向けて診療所の誘致に取り組んでいるとHPにありますが、どの診療科にどういったニーズがあるのか、また、市民からの声としてどのようなものが上がっているか。

3. 新潟県全体としては医師数の不足や偏在が問題となっていると思いますが、見附市内ではそういったことは感じるか。

・2と3は合わせて答えていただいて、医師の偏在指数が低いのは事実。隣の市(長岡市とか)まで行かないと治療を受けるのが難しいということもある。

4. 多くあるであろう見附市の魅力や特色について、見附市外に住んでいる人々に向けて1つPRするとすれば、どのようなことをPRしたいと思うか。

・健康都市をPR。

5. 見附市は全国的に見ても高齢化が進んでいる地域だと思いますが、それに対する取り組みは何をしていますか。

・健康施策例えばハッピー・リタイアメント・プロジェクト

6. 市民の健康増進を目的とした「健幸ポイント」制度の詳細と、その導入による具体的な効果や課題について教えてください。

・「健幸ポイント」制度は、市民の健康づくりを促進するための取り組みであり、ウォーキングや健康運動教室への参加、健康診断の受診など、日常の健康増進活動に応じてポイントが付与され、これらのポイントは、見附市内で利用可能な地域商品券や、市内の学校やコミュニティ活動、NPO法人への寄付として活用できる。

この取り組みにより、市民の健康意識が高まり、医療費の削減に寄与しているが、市民全体として、この制度に関心を向けている割合が3割程度と低く、若い層の参加者が少ないのが課題となっている。

7. 見附市における高齢者福祉サービスの現状や、直面している課題についてお聞かせください。

・高齢者が住み慣れた地域で安心して生活を続けられるよう、緊急時の安否確認サービスや緊急通報装置の設置、介護予防教室、健幸カラオケ教室など、さまざまな福祉サービスを提供している。しかし、介護予防教室などの参加者は、高齢になっても働いているなど外出の機会が多いことや、団体活動への参加に抵抗を感じる男性が多いことから、男性の参加率が低いという課題がある。

8. 障がい者の方々への支援策や、就労支援、生活支援の具体的な取り組みについて教えてください。

・スマートウェルネスみつけ

9. 「みつけ健幸フェスタ」について詳しく教えてください。また健康づくり施策の4本柱に基づいたさまざまなブースを設置しているとありますが、その中でも特に力を入れている部分はありますか

・市民の健康づくりの取り組みの周知と実際に行う市民の増加を目的として、毎年健康づくり施策の4本柱に基づいた様々なブースを用意している。また、4本柱全てに力を入れている。

10. 健康フェスタに関連してこれから新しく行いたいと考えているイベントがあれば教えてください

・Eスポーツを高齢者にやらせよう。実際やってみたら面白そうとのこと。

●行ってみてわかったこと

・豊かな自然環境、風景が美しい、自然と触れ合うことができる、

●自治体の良さ、課題、解決策

・市の抱える問題について、スマートウェルネスみつけを掲げて、歩いて暮らせるまちづくりや公共交通の整備を進めている。

26. 出雲崎町

出雲崎町 12月21日 田中京 伊藤拓 山口空良 深井絵莉

○事前に調べたこと：

2022年に登録された新潟県の伝統工芸品である紙風船が有名である。長屋や獄門跡のような歴史的な建造物が多く残っている。“良寛記念館から見る日本海と佐渡”がいにがた景勝百選1位に選ばれた。良寛生誕の地、芭蕉詠嘆の地である。平成初期よりも現在の方が就業人口の減り幅が少ない。

○インタビューで聞いたこと：

・個人的な感想でよいので出雲崎を今後どう良くしていきたいか教えてください

出雲崎町では少子高齢化により多死時代に入ってきている。自分らしく最後まで生きていける地域にしたい。それを支えるための社会地盤や地域力を上げる活動をしていきたい。

・なぜ長屋や獄門跡のような歴史的なものがたくさん残っているのか

出雲崎町は、江戸時代に佐渡の金を送られてくる場所として、新潟県で初めての代官所が立てられ宿場町として栄え、文化の中心地でもあったため。

・出雲崎では急な発症の場合はどうしているのか

出雲崎、柏崎、長岡、見附、小千谷で定住自立圏を作っている。その五つの地域内で、平日夜間の診療所や小児救急医療を提供している。

・平成初期よりも現在の方が就業人口の減り幅が減っているが、工夫したのか。

女性や高齢者の就業人口が増えたことがある理由の一つでもある。近隣の長岡市の新しい工業団地で働くことが増えている。

・町内の高齢者はどのような交通手段を利用しているのか。

有償ボランティア団体、タクシーの助成金が用意されている。また、デマンド交通を利用することで、100円でどこでも行ける。ボランティアが盛んで、電球交換や、話し相手になるだけのボランティアもある。

○行ってみて分かったこと

- ・出雲崎町には板張りの外壁の家が多い。板張り壁は古い家屋でみられるため、出雲崎町には古い家が多いことが分かる。
- ・スーパーやコンビニを見かけなかった。調べてみると、小さな食料品店はあったがスーパーはなくコンビニも1つしかなかった。
- ・畑、田んぼ、漁港はあったが、飲食店や会社は少なく、長岡市などの近隣の市に出て働いている人が多いことが予想される。
- ・総合病院はなく、小さな医院はあったが、やっているのか分からないような状態であった。
- ・幼稚園は1つ見かけたが、小学校、中学校、高校は見かけなかったため、地図を見ると、幼稚園は2つ、小学校、中学校、高校は1つずつあることが分かった。
- ・長岡駅からバスに乗って出雲崎町まで行ったが、長岡駅行きのバスの本数が2時間に1本しかなく、電車も通勤通学の時間帯は1時間に1本あるが、それ以外の時間帯電車がいない状態であった。

○出雲崎町の良さ

昔ながらの家屋が立ち並び風情のある町である。良寛記念館や天領出雲崎時代館などで、良寛、紙風船、北前船、石油生産などの出雲崎の歴史を継承している。

○課題

人口減少が進んでいることが課題であると考えられる。これは住みやすさに原因がある。スーパーやコンビニがほとんどなく、総合病院もなく、電車やバスも少ない。高齢者が住みやすいように工夫はされているが、新しく若者が移住してくるような工夫は見られなかった。

○解決策

人口減少を止めるためには、新しく移住者を迎え入れることが必要である。住みやすい町にすることが解決につながる考えられるが、人口が少なく利用者が少ない状況でスーパーを作ったり、バスや電車を増設したりすることは難しいだろう。そのため、空き家を活用し、安い家賃で住める家を提供したり、子育て支援を充実させたりすることで移住者を増やしていくことで、人口を増加させることができると考える。

27. 刈羽村

場所：刈羽村

日付：2024年12月8日

メンバー：菅原千寛、谷澤航希、中尾慶人、森葵

1. 事前に調べたこと

刈羽村の福祉サービスについて調べたところ、高齢者支援サービスが充実している様子が窺えた。例えば、在宅老人福祉サービスの提供を行っている点などである。また、刈羽村の児童数は令和3年以降減少傾向にあることや、若い世代の糖代謝異常が増加傾向にあることなどもわかった。

2. インタビューで聞いたこと

a) 高齢者にサービスを提供する上で課題と感じていること

行政上どこまでの人を支援するのが課題。対象者を幅広くすると大変なため、どこかで線引きをする必要がある。線引きをする際に村民に理解を得られるよう線引きをしなくてはならない。

b) 支援を受けるときに申請が必要だが、身寄りのない人や家族が近くに住んでいない人、家族間で関係の悪い人、特に認知機能の悪い人はどのように申請するのか

主にケアマネージャーが出向いて行っている。役場の職員が出向いて行う場合もある。村民が約4300人のため成り立っている。

c) クリニックは往診している

刈羽消化器内科クリニックの先生が往診しているが、全ては不可能なため、小規模多機能型居宅介護事業所などでまとまって診ている。医療機関と福祉事業所との連帯が重要。

- d) 刈羽村には内科クリニックしかないが内科以外を受診する人はどうしているか
柏崎市と刈羽村で一つの医療機関のため、救急は柏崎市へ搬送される。また、役場から車で10分圏内に医療機関が3つある。しかし、最近は往診をする医師が減っていることが課題。
- e) 少子化を防ぐための対策や制度
新しいものは特にやっていないが、今までやっていたのは、新生児聴覚検査の助成やチャイルドシート補助金など。若い人のマッチングや新しい家を買う時の補助金、妊婦訪問、産後の訪問なども実施している。
- f) 若い世代の糖代謝異常に対して行っている予防医療や健康増進活動
糖代謝異常の重症度が高い人への訪問を、重症度が低い人へも拡大し、健康管理の意識を改善する。
- g) 地域住民の福祉に関するニーズや課題に対する改善策や今後の展望
高齢者に高血圧の人が多。また、腎機能の値が低下している人が増加してきた。今後透析が必要な人が増えていく懸念があるが、村内に透析できる施設がなく離れたところに通う必要が出てくるため、なるべく予防するよう働きかけている。
- h) 交通支援で行政は何かしているか
通院費の支援を行なっている。障害者手帳3級以上は4万円分の支給、高齢者には2万円分の支給をしているが、これでは足りないという声も上がっている。
- i) 刈羽村でここだけは絶対に行きたほうが良い場所
一つ目はとうりんぼ。眺めがよく、ご飯を食べるところもあるということだった。一休庵という蕎麦屋さんや診療所も訪れてほしいということであった。

3. 行ってみてわかったこと

刈羽村は村自体がコンパクトであり、役場、公共施設、スーパー、図書館、体育館、学校などが一つの地域にほぼ集中しており、その周辺に住民が居住している様子であった。生活に必要なものはPLANT-5というスーパーでほぼ手に入りそうだと感じたが、村内の移動には車が必要であるとも感じた。

また、公共施設が綺麗で豪華であった。ジムにはトレーニング器具が充実しており、体育館は村民が利用するには十分広く綺麗な様子であった。刈羽村生涯学習センターラピカでは毎日イベントや教室が開催されており、村民のための催しが充実していると感じた。

4. その他

刈羽村の良さはコンパクトな村であり、生活に必要なものは村内だけで手にいれることができそうな点であった。また、車があれば新潟市へは約1時間、柏崎市へは約20分でいくことができ、周りの都市へのアクセスがしやすいと感じた。

一方で課題に感じたこともいくつかあった。一つ目は公共交通機関が少ない点である。電車の運行が少なく、車がないと移動しづらいと感じた。これに対して考えられる解決策は、タクシーチケットの配布やコミュニティバスの運行日の増加などが挙げられる。二つ目は娯楽施設がないことである。これに対する解決策は、自然を活かしたアクティビティの提供や、PLANT-5などの複合商業施設に娯楽施設を導入することなどが挙げられる。三つ目は村内に高校がない点である。最も近い高校は柏崎市内にあり、村内から通学するのに約1時間かかってしまう上に、高校がないことで若者世代が村外に流出する可能性が高くなり、少子化につながる恐れがある。これに対する解決策は、刈羽村立刈羽高等学校を設立することや、高校への通学用バスの運行を行う、オンライン教育を活用するなどが挙げられる。

28. 魚沼市

事前に調べたこと

1. 観光：魚沼市は自然豊かな観光地が多く、四季折々の美しい景観を楽しめる。特に奥只見湖の遊覧船は人気があり、紅葉シーズンには多くの観光客が訪れる。また、冬には豪雪地帯ならではのスキーやスノーボードが楽しめる。権現堂山や浅草岳などの登山スポットもあり、アウトドア好きに魅力的なエリアとなっている。

2. 名産品：魚沼市といえば、日本有数のブランド米「魚沼産コシヒカリ」が特に有名。米を使った地元の料理や、日本酒の醸造も盛んで、「八海山」などの銘酒が生産されている。その他、地元で採れる新鮮な山菜や、川魚を使った郷土料理も楽しめる。
3. 活動：春から秋にかけては登山やハイキングが人気で、冬はスキーやスノーボードが楽しめる。地域の祭りとしては、「堀之内十五夜祭り」などがあり、伝統文化に触れることもできる。また、農業体験や酒蔵見学など、地域の特色を活かした体験型アクティビティも用意されている。
4. 交通：魚沼市へは、JR上越線やほくほく線を利用でき、新幹線を使う場合は越後湯沢駅で乗り換えるのが一般的。車を利用する場合は関越自動車道の小出ICが最寄りとなる。市内の公共交通は限られており、観光にはレンタカーやタクシーの利用が便利。また、冬季は積雪が多いため、移動には注意が必要。

インタビューで聞いたこと

インタビューでは地域の魅力や医療に関する質問について、小出病院の事務長様および看護副部長様にご回答していただいた。

初めに、魚沼市で働いていて感じる魚沼の魅力や地元らしさについてお話を伺った。事前調査でも名産品として挙げられた魚沼産コシヒカリや日本酒が魅力であり、それらを生産する上で豊かで良質な雪解け水は欠かせないため、雪に地元らしさを感じるとのことだった。

次に病院や地域医療に関する質問をいくつかお聞きした。

病院食でこだわっている点としては、ぜんまいを使った料理やお正月ののっぺ汁などの季節や伝統が感じられる食事に加え、寒天を使った食べやすい料理があり、安全な食事で患者さんを楽しませようとする思いが伝わってきた。

病院間の連携については月に1回、市全体で行う開業医との懇親会があること、「うおぬま・米（まい）ねっと」と呼ばれる魚沼医療圏内の病院、診療所、薬局などがIT技術を活用して患者さんの診療情報を共有するシステムがあることをお聞きした。うおぬま・米（まい）ねっとには魚沼医療圏人口約15万人のうち約5万人が加入していて、地域の医療機関を繋ぐ重要な役割を担っていることが分かった。

小出病院を受診する患者さんは65歳以上が7割以上を占め、高齢化の影響を受けているようだった。

最後に訪問看護、訪問診療についてお話を伺った。令和5年における訪問看護利用者数は7874人、訪問診療利用者数は871人で、市の中心部である小出、堀之内地区と山間部の守門、入広瀬地区で訪問看護・診療の需要は同じくらいあるとのことだった。市の中心部ではデイサービスなどの施設が多い一方で高齢者数も多いのに対し、山間部では人口は少ないが施設の数も少なく、老老介護が多く見られるという背景があり、今後も市全体で訪問看護・診療の需要は増加していくと見込まれる。

その自治体の良さ、課題、解決策について

●良さ

魚沼市は八海山をはじめとする美しい山々や奥只見湖など、自然環境が豊かである。それらの自然を活用した観光産業も発展しており、多くの観光客が訪れる。さらに、関越自動車道や上越新幹線が利用でき、東京方面からのアクセスが比較的良い。

魚沼産コシヒカリは高級ブランド米として全国的に知名度が高い。お米を活用したケーキやアイスなども数多く販売しており、幅広い世代に人気がある。地元の山菜やきのこ、日本酒も高品質であり、へぎそばなども伝統的な郷土料理として観光客から人気を集めている。

●課題

魚沼市の人口は30年間で1万人近く減少し、65歳以上の割合も年々増加していることから、人口減少と高齢化が最も大きな課題であると考えられる。バス等の公共交通機関が少なくなっているのも、利用者・運転手の減少によるものであると考えられる。また、魚沼が誇る魚沼産コシヒカリも農業の担い手不足により生産者の減少が懸念される。

観光産業では、秋の紅葉、冬のスキーシーズンは多くの観光客が見込まれるが、他の季節の観光客はそれほど多くなく、通年での観光客の確保が課題である。

●解決策

魚沼市からの人口流出を減らすには、地域住民がより住みやすく、働きやすく、定住しやすい町を作ることが重要である。働きやすさの点では、魚沼市に住んでいても魚沼市外と繋がりやすいようにリモートワークができるようなスペースを確保したり、地元の強みである米や日本酒を生かした地元企業の創出を支援したりすることなどが考えられる。

観光産業面では、春、夏シーズンも観光客を確保するために魚沼産コシヒカリ、日本酒を活用したイベントやSNS等での発信が課題解決に繋がるのではないかと思う。

魚沼に実際に行ってみてわかったこと

魚沼に実際に行ってみて地元の人々の生活様式や、現地の雰囲気について詳しく観察することができた。人の数はやはり新潟市と比べると少なかった。大きなスーパーマーケットや薬局などは大通りに面した場所に多くあり、少し離れるとそれらはあまりみられなかった。新潟市内では家の近くにスーパーがあることも少なくはないが、魚沼の人は車で大きなスーパーまで買い物に来ている人が多かった。スーパーには地元で育てられたお米や野菜が多く並んでいた。地元で育てた農作物が売られているのは魅力の一つであると感じた。風景に関してはやはり米所ということもあり田んぼが多かった。魚沼の中心地は家が密集していたが遠くには田んぼがあたり一面に広がっていた。空気も美味しく感じられ、豊かな自然と美味しいお米が魚沼に住む人々の幸せと健康を支えているのだなと感じた。家も普通の家とは違い、冬の寒さに耐えられるような工夫がされている家が多々あった。雪の重みに耐えられるように窓が分厚い強化ガラスで二重にされていたり、屋根の勾配を急にすることで雪が大量に積もることを防いだりなどの工夫が見られた。地元の人々は温かな人が多く、道の駅で話しかけた地元の人々は優しく魚沼について教えてくれた。行ってみる前は魚沼は田舎であるというイメージが強かったが、実際に行ってみることで生き生きとしている地元の雰囲気を感じることができたり、豊かな自然を感じることができた。

29. 南魚沼市

行った場所：南魚沼市

日付：1月8日

メンバー：竹内康之介、佐野周太郎、田中愛菜、風間桃子

事前に調べたこと：

- ・魚沼基幹病院ができたことで高度医療が充実した
- ・心臓外科医が不在
- ・医師不足解消のため地域枠を設置して医師が県内の医療に従事するようにしている
- ・高齢化に伴い訪問看護の重要性が高い
- ・豪雪地帯で家と病院との往復が困難

インタビューで聞いたこと：

- ・南魚沼市は救急医療が市内で完結している
- ・市民病院では心臓外科が一人いて、循環器内科医として働いている
- ・緊急時は受け入れ態勢のある病院に搬送
- ・市民病院には年間研修医30名専門医15名を受け入れていてキャリアを積んでもらっている
- ・指導医の確保も必要なため自治医大と協力している
- ・北里大学の地域枠と協力型臨床研修を行っている
- ・お金を渡して研究体制を整えながら上級医師の確保をしている
- ・訪問看護は24時間体制
- ・魚沼基幹病院の隣の病院を無料診療所に変えて24時間体制にしており、地域包括医療センターとして機能している
- ・病院と家をつなぐ送迎バスは実施されていないが、市内で14路線のバスすべてが南魚沼市市民病院か魚沼基幹病院を経由するようになっている

- ・どの地域にもバス停があるので通院できるようにしている
- ・運転手不足、乗客減少でデマンド交通の実施が難しい

行ってみてわかったこと：

- ・雪が多い
- ・車利用が多い
- ・電車の本数が少ない
- ・道路は除雪されていた
- ・除雪車を見かける
- ・交通ICが使えない

その自治体の良さ：

- ・雪を生かした産業（スキー・スノボ、お米など）
- ・地元の食材とコシヒカリを使ったまじ丼を販売することで地産地消を促している
- ・地元の人が優しい

課題：

- ・車がないと不便
- ・駅と駅の距離が離れていたり、駅から遠い地域の住民が多かったりするため移動が大変
- ・運転ができない高齢者は病院や買い物に行くのが難しい

解決策について：

- ・人材確保→バスの本数や路線増加
- ・南魚沼市内の住人を増やす
- ・地域集会が行われている場所に医師が訪問して診療する

30. 湯沢町

2024/12/21

伊藤康太郎 稲葉俊博 佐藤覇也 山際咲彩

事前に調べたこと

老年人口が大きく増加している。また、豪雪地帯であり、温泉もあることから観光地として有名である。

インタビューで聞いたこと

冬場の観光シーズンにおける医療体制の強化体制の有無
地域住民の健康維持や予防医療、介護予防に向けた取り組みについて
高齢化が進行する湯沢町で今後懸念される疾患は何かあるか

行ってみてわかったこと

冬場ということもあり、駅前やその周辺にはスキーをしに来た観光客や外国人観光客を多く見かけた。スキー場は開業していたものの、街中にはあまり雪はなかった。

その自治体の良さ

冬には毎年、ウィンタースポーツや観光からの安定した収入源が確保できる。また、新幹線を利用することで1時間程度あれば東京に行くことが可能である。

課題

スキー場を訪れる観光客に焦点をあてた観光業が盛んな湯沢町では、雪の降らないシーズンにおける収入が期待できない。降雪量次第で町の経済状況が左右されてしまう。

解決策について

バス本数の拡充など地域住民が年中快適に暮らせるよう、冬場の観光客に多くの金銭を使ってもらえるような環境にする。

31. 津南町

地域：津南町

日付：12月8日

メンバー：大井悠生、加藤颯空、焦艶琪、村山結莉

津南町にフィールドワークに行くことが決まり、地形や気候、生活などに関することを各自がインターネットを使って調べた。それらの情報をもとに、町立津南病院の事務長様にインタビューを行った。津南町は新潟県内でも有数の豪雪地で、同時に高齢化率が高い町であることから、雪や高齢者に関する質問が多く挙がった。高齢化に伴って各家庭の除雪が困難になっていること、雪によって高齢者の足となっているバスの遅延が発生することなど、両者に関連する問題も知ることができた。また、過疎化に伴って山間部の移動手段が確保しにくくなっていたり、町の面積の広さから訪問診療が難しい地域があったり、子育て世帯の減少や若者の流出が止まらなかったりとさまざまな問題があることを知った。

当日は、駅の裏手の山を登ったところにある「川の展望台」で写真撮影をし、続いて街中を散策し物産館で昼食と買い物をした後、「しなの荘」で温泉に入り、「なじょもん」で縄文時代の遺産を見学した。移動には新幹線・電車・バスを利用した。12月の初旬であったが、当日は朝から雪が降り続き、1日で徒歩移動が困難なほどの積雪量(30~50cm)となった。新潟出身の1名を除く3名は、スニーカーを履いてきたり、Suicaを使おうとしたり(津南駅を含め多くの駅でSuicaは使用できない)と、新潟の「普通」に不慣れな様子であったが、それも訪れたからこそ得られる学びだと感じた。景色の良いスポットとしておすすめされた「川の展望台」で記念撮影をする予定であったが、除雪が途中までしかされておらず、目的の場所まで辿り着くことができなかった。その後の散策やバス移動でも、雪によって20分以上の遅延が生じていたり、歩道が除雪されておらず歩きにくかったりと積雪時の移動の難しさを実感した。そもそもバスの本数が少なく、中心街から離れるとさらにその傾向が顕著になり、土日は0本であるなど自家用車以外での移動はほぼ不可能であるとわかった。一方で雪が降らない地域の出身者にとっては「積雪」それ自体や「消雪パイプ」などが珍しかったようである。

津南町はお米や豚肉、野菜、水が美味しく、人も優しく、温泉や雪、大地の芸術祭の芸術作品などの観光資源にも恵まれた町であった。しかし、交通の便が非常に悪く、特に冬場は住民も観光客も移動に困難が伴う。雪を含めた自然や共生している人々、食べ物、それらを生かした芸術作品という魅力があるにも関わらず、生活や観光における交通の便が悪いためポテンシャルに対して移住者や観光客が集まっておらず、高齢者の移動も困難になっていると考えられる。そこで、観光資源の集約化や、観光スポットと駅やバス停、スーパー、病院、学校などをつなぐ生活と観光両用の乗合タクシーが運行されることでこの課題を一部解決できるのではないかと考えた。

32. 十日町

訪問先：十日町

訪問日時：1/12(日)

メンバー：関塚大 林悠誠 山口菜璃 吉水悠

① 事前に調べたこと

- ・ 少子高齢化が進んでいる
- ・ 豪雪地帯である
- ・ 医師不足である
- ・ そば、着物が有名

といった、とにかく住みづらい地域に年配の方が多く住んでいる所であるという印象を、事前調査で持ちました。

② インタビューで聞いたこと

- ・ 高校生までは普通にいますが、大学から外に出てしまう
- ・ 雪かきでけがをして半身不随になるような人もいます

- ・急病だと間に合わないためドクターヘリが飛んでくるようなところも
- ・昔は東京に出稼ぎに行っていた人もいる
- ・お金は基本夏に稼いで、冬は雪かきなど雪とのたたかいがメインになる
- ・公共交通機関が充実しておらず車移動がメインであるため、高齢者もいろいろ対策をして免許更新に行っている
- ・松之山温泉上側地域の米、野菜、山菜はとてもおいしい（雪解け水、日光少ない）
- ・トンネルができて移動が楽になった？

③ 行ってみてわかったこと

- ・命綱もつけずに3階の屋根に上って雪かきをしている人がたくさん（しかも高齢者）
- ・1階がコンクリートで2階3階が普通の家、という建て方の家がたくさんある。
- ・スコップやシャベルだけでなく、さすまと糸ノコのような、屋根に上らなくてもある程度雪かきができるアイテムがある。
- ・観光客を対象とした宣伝にかなり力を入れている様子である。

②③からわかる通り、おおかた事前調査通り、住みづらい豪雪地帯で年配の方々が農業と雪と共存している場所だった。福祉サービスのインフラも十分に普及していない。しかし昔に比べてまだマシになったということを経験の方から聞いて驚いた。自然に対する工夫や、伝統を生かした観光業で頑張っているが、現状活気があるとは言えないような地域である、と正直感じた。

④ 自治体の良さ、課題、解決策について

- ・歓迎してくれる人の温かさ、人のつながり、自然豊かである。
- ・子供が少ないからこそ、早くからタブレットの導入など、教育体制をよくできる面もある。
- ・広さ、自然、高齢者と、公共交通機関の発達が見られるが、採算が取れずに、バスはどんどん減っている。

首都圏に比べて発展が遅れていることは否めない。人がいないのに、人手を必要とする運営や戦い方を続けているからであるとも思う。オンラインによる授業、オンラインによる産業の発展、AIや機械による農業や雪かきなどの力仕事の軽減、オンライン診療やネットを駆使した地域のつながりの強化など、先端技術の導入による伸びしろがまだまだあると思う。昔はそれこそ出稼ぎに出たりするなどしかなかったが、インターネットが発達した今、やり方次第で情報格差は埋められるはずである。

33. 上越市

メンバー：田中優祐 中澤義貴 山本晃煌 藤戸声

日にち：1月11日

行き先：上越市

・事前に調べたこと

上越市は越後平野が広がっている市であり、海と山が存在する自然豊かな地域である。日本海側に面しており、山も存在することから冬は大量の雪が降る。そのため、雁木通りや消雪パイプなど雪と共に暮らしていることがわかった。特産物においても同様に雪下野菜など、雪を有効活用したものが生産されていることがわかった。

・インタビューで得たこと

① 農業について

上越市は、新潟全体で栽培されている米に加えて茶豆や大豆、雪下野菜など様々な農作物を栽培している。また、上越市には岩の原葡萄園と呼ばれるワイン工場が存在しており、赤ワインの生産も盛んである。しかしながら、上越市の第一次産業従事者の高齢化が深刻化しており、現在の農業を維持していくことが難しくなっている。そのため、現在は市外から農業従事者を募ったり、AIを駆使した全自動の農業機械を導入したりしている。

② 観光について

新潟には高田城や春日山城跡などの歴史的建造物に加えて、うみがたりなど新しく作られた観光地も存在している。そういった観光資源を活用して一年を通して観光客を入れ込む「通年観光」を目指している。そのために現在はビッグデータを利用して客層をチェックしたり、PR動画を作成したりするなど様々な活動をしている。

③ 上越市の暮らしについて

上越市では健康に関するイベントを行っていないことがわかった。イベントは不特定多数を集めることができるが、来てくれた人にしか効果がなく、市で行うイベントに参加する人はそもそも健康に関する知識に精通している場合が多いためである。

④ 気候について

上越市は冬季期間の降雪量が非常に多いため、雪対策が日常的に行われている。除雪は雪が降った日の深夜に行ない、道路状況ができるだけ良くなるようにしている。また、大雪が降った際は近隣の方と同時に屋根の雪を下ろす一斉雪下ろしが行われている。

・行ってみてわかったこと

高田駅周辺は上越市の伝統的な建築物である雁木が至る所に見られた。しかしながらそこを通る人は少なく、車の通行量が比較的多かったことから、上越市の主な交通手段は車であることが伺えた。高田駅につながるメインストリートはヒートロードを搭載していたり、大きな雁木状の屋根がついていたりするなど近代的な街づくりが行われていたが、少し離れると昔ながらの建物が連なっており、建物と建物の間隔が非常に狭く、火が発生した時の対策などが難しそうだなと感じた。本町通りには地域交流センターが至る所に存在しており、上越市で暮らす人々の生活をより良くするための工夫が多くみられた。

34. 妙高市

行った場所：道の駅あらい 豚汁たちばな ロッテあらいリゾート 苗名滝 妙高温泉

日付：2024年12月7日

メンバー：伊藤壮祐 井手健太 古川さくら 松本健太郎

事前に調べたこと：妙高市は、新潟県の南西部に位置する市で、美しい自然環境と温泉、スキー場などの観光資源に恵まれた地域だ。長野県との県境にあり、上越市や長野市にも近く、北陸新幹線の「上越妙高駅」開業により交通アクセスも向上している。

インタビューで聞いたこと：特別養護老人ホーム、老人保健施設などこれまで計画的に整備しており現在は充足している。一時待機者が問題になったが、現在の妙高市では申請すればすぐに入れる。高齢者の働き方が変わってきていて現役の方が多いので、介護認定率は横ばいの19.1%。施設を必要とする方の量が今落ち着いている。

行ってみて分かったこと：自然に囲まれてすべての季節においても飽きることがない

その自治体の良さ：妙高市は、日本有数の温泉地であり、妙高山や赤倉温泉、関温泉などの観光資源がある。四季折々の美しい景観やスキーリゾートも魅力的で、国内外から観光客が訪れる。

課題：妙高市の人口は年々減少しており、特に若年層の流出が課題となっている。高齢化率も上昇しており、労働力不足や地域経済の縮小につながっている。

解決策：移住促進と子育て支援の充実をはかり移住者向けの住宅補助や就職支援を強化し、若年層の定住を促す。保育所・学校教育の充実、子育て支援金の拡充を行い、子育て世代の流出を防ぐ。ワーケーションやテレワーク環境の整備を進め、都市部の人々が働きながら暮らせる環境を作る。

35. 糸魚川市

日付：2024年12月1日

班員：木村遼介（リーダー）、小野蓮生、山崎航一朗、仁科奏音

1. 事前に調べたこと

人口は約38000人で毎年約700人ずつ減少している。

市の木：ブナ、市の花：ササユリ、市の鳥：カワセミ、市の石：ヒスイ

森林資源やヒスイ・石灰石等の鉱物資源や水資源が豊富な反面、地すべり、風水害、波浪等の自然災害が発生しやすく、豪雪地帯であるため生活に大きな影響がある。

糸魚川市HP『令和6年度 統計いといがわ』

https://www.city.itoigawa.lg.jp/secure/5449/R6_toukeiitoigawa.pdf

2. インタビューで聞いたこと

- ・富山側の人々は富山の病院に通う人が多い。
- ・長野県との関わりはほぼない。
- ・緊急患者の8～9割は糸魚川で、それ以外は富山や上越の病院に行く。
- ・これから救急にオンライン診療を導入したい。
- ・新潟県は糸魚川総合病院に年間2.5億円支援している。
- ・医学生への奨学金制度で貸与期間の1.5倍糸魚川の病院で働くことを条件に学生機関に月額30万円もらえる。
- ・大雪で除雪が間に合わないと救急車が細い道に入れなかったり、病院のスタッフが通勤できないため病院に泊まり込みしなくてはならない。

3. 行って見てわかったこと

バスや電車などの本数が少なく、交通機関があまり充実していない印象であった。そのため、車を所持していない人はスーパーや病院への移動が困難なのではないかと感じた。また糸魚川駅の近くにあった「糸魚川市駅北広場 キターレ」という施設では、「つくる・つながる・はぐくむ」というコンセプトの元、地域住民が楽しく交流している様子が見られた。キターレには糸魚川市駅北大火の記録を映像や展示物とともにコーナー、打ち合わせや子どもの遊び場等多目的に利用できるホール、お店を始めたい人のスタートアップとしての活用のほか、仲間同士の一時的利用ができるダイニングスペースなどがあり、地域住民の交流を活発にすると同時に、糸魚川の歴史や魅力を発信する取り組みが行われているように感じた。

4. 糸魚川の自治体の良さ・課題・解決策

糸魚川市は、フォッサマグナの糸魚川―静岡構造線上にあり、地質学的に非常に価値のある地域であり、特有の地層や鉱物を見ることができる。日本海・姫川・北アルプスと海・川・山があるため、豊富に質の高い食材を取ることが出来る。稲作・野菜・果物・大豆などの農業も盛んに行われている。実際に、糸魚川で食べたご飯はとてもおいしかった。糸魚川市の課題としては、高齢化が挙げられる。2番目の課題項目と重複するが、医療面では、市民の高齢化に伴う患者数の増加や、医師自体の高齢化も問題となっている。地域を活性化するには、若年層の人口を増やす必要がある。そのためには、北海道白糠町のように、豊富な食材を活かして、ふるさと納税などで財源を増やし、それを子育てで支援などに充てることで、自然の中で子育てをしたいと考える若い人を呼び込むことができるかも知れない。

発表会

医学入門「フィールドワーク発表会」

日時：令和6年2月3日13時30分～16時50分

場所：(オリエンテーション) 医療人育成センター4階ホール

(発表会) 総合研究棟3階小グループ学習室1～14

内容：学生は訪問先が重ならないように14のグループに分かれ、1グループ10名の学生が各訪問先について発表する。

プログラム：

13：30～ 発表オリエンテーション

医療人育成センターホール

14：00～ 発表（各地区発表8分＋質疑応答2分）総合研究棟3階小グループ学習室

16：00～ 振り返り

16：40～ 一年間の医学入門講義についてのアンケート

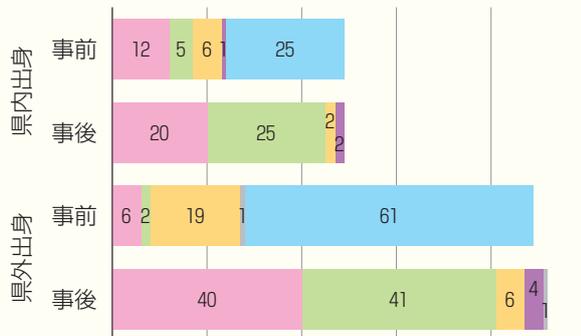


アンケート調査結果

フィールドワーク 事前・事後の比較

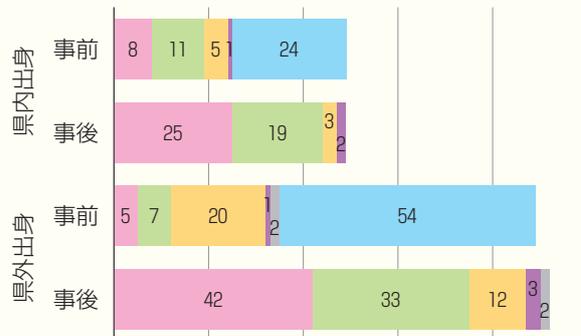
そのまちを歩くのは気持ちよい

■ とっても ■ まあまあ ■ どちらともいえない
■ あんまり ■ 全然 ■ わからない



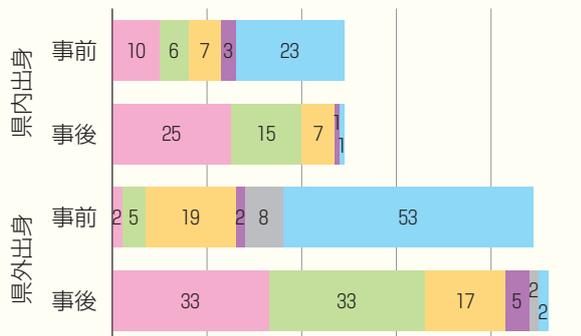
雰囲気や土地柄が気に入っている

■ とっても ■ まあまあ ■ どちらともいえない
■ あんまり ■ 全然 ■ わからない



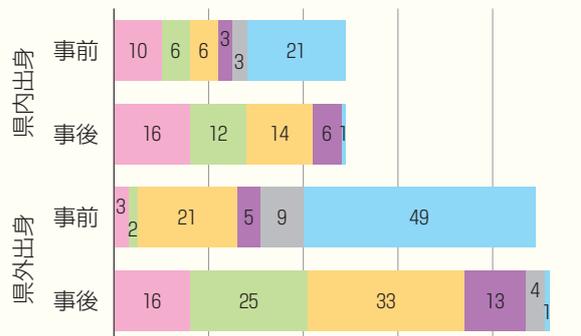
このまちの人々に親しみを感じる

■ とっても ■ まあまあ ■ どちらともいえない
■ あんまり ■ 全然 ■ わからない



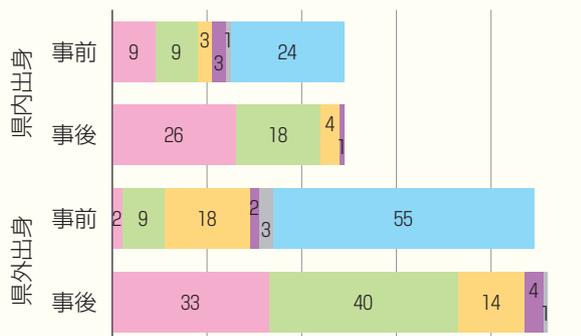
ここのまちは自分にとって大切な場所だと思う

■ とっても ■ まあまあ ■ どちらともいえない
■ あんまり ■ 全然 ■ わからない



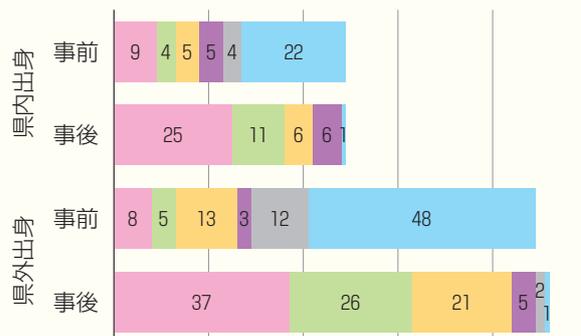
このまちではリラックスできる

■ とっても ■ まあまあ ■ どちらともいえない
■ あんまり ■ 全然 ■ わからない



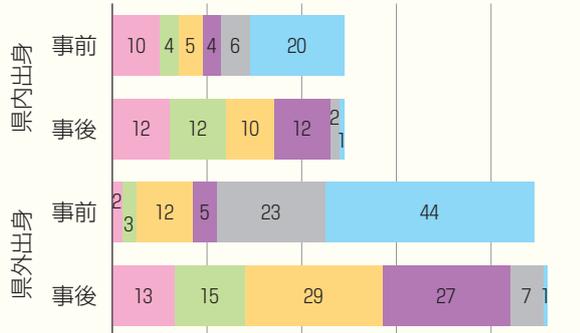
そのまちでお気に入りの場所がある

■ とっても ■ まあまあ ■ どちらともいえない
■ あんまり ■ 全然 ■ わからない



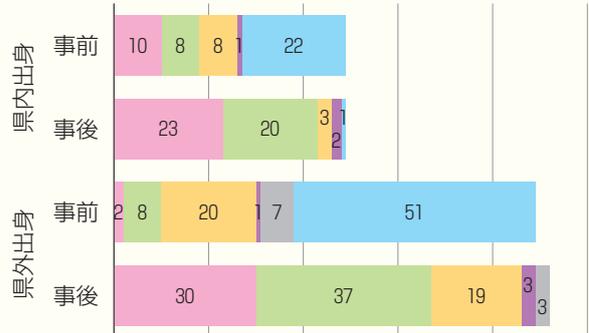
自分のまちという感じがする

■ とっても ■ まあまあ ■ どちらともいえない
■ あんまり ■ 全然 ■ わからない



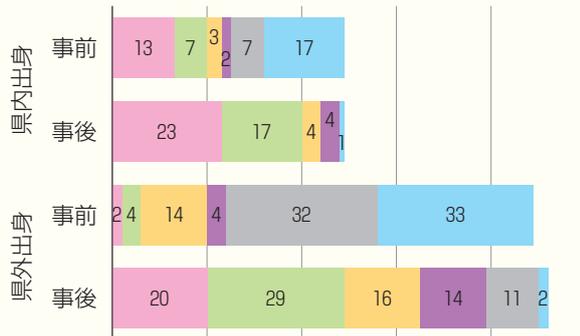
このまちが好きだ

■ とっても ■ まあまあ ■ どちらともいえない
■ あんまり ■ 全然 ■ わからない



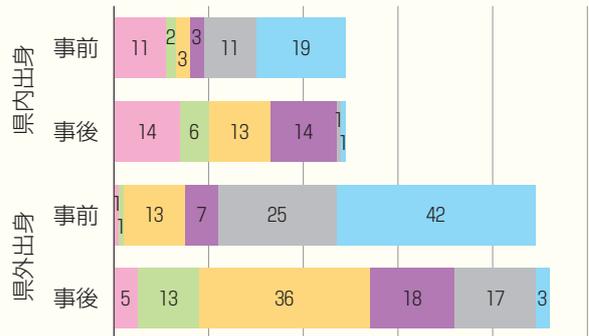
まちに思い出がある

■ とっても ■ まあまあ ■ どちらともいえない
■ あんまり ■ 全然 ■ わからない



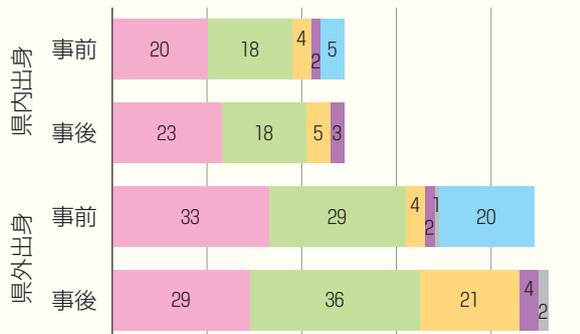
まちに自分の居場所がある

■ とっても ■ まあまあ ■ どちらともいえない
■ あんまり ■ 全然 ■ わからない



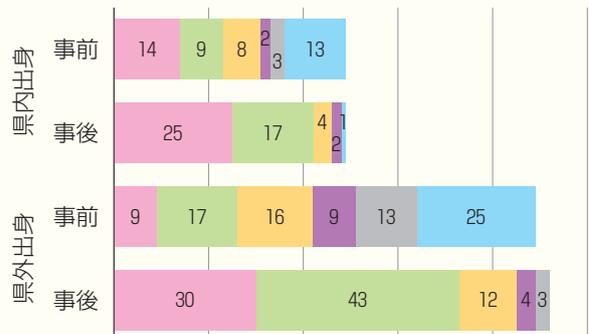
このまちについてもっと知りたい

■ とっても ■ まあまあ ■ どちらともいえない
■ あんまり ■ 全然 ■ わからない



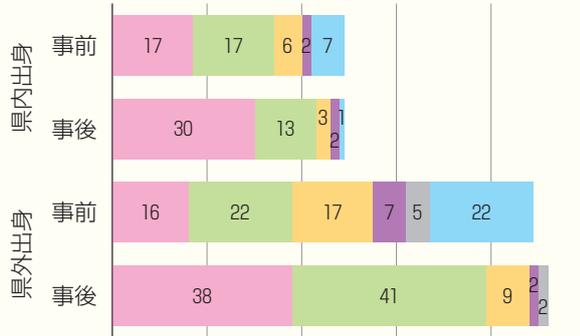
このまちがテレビや新聞などにできると気になる

■ とっても ■ まあまあ ■ どちらともいえない
■ あんまり ■ 全然 ■ わからない



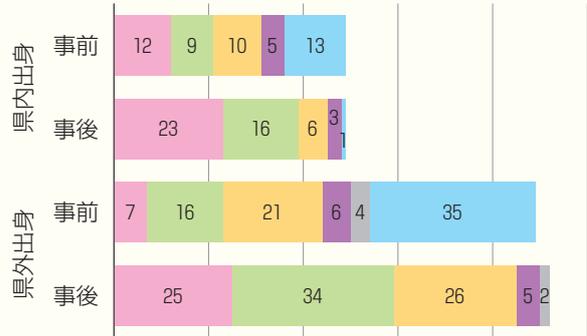
このまちに何かあれば応援したい

■ とっても ■ まあまあ ■ どちらともいえない
■ あんまり ■ 全然 ■ わからない



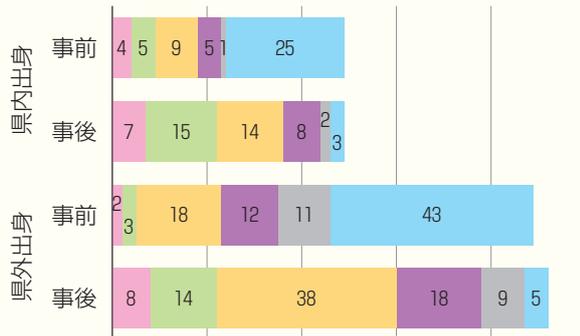
このまちとのつながりを持ち続けたい

■ とっても ■ まあまあ ■ どちらともいえない
■ あんまり ■ 全然 ■ わからない

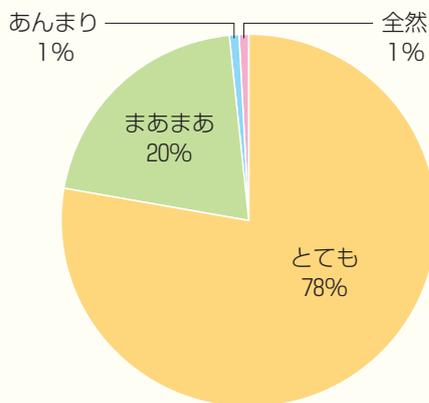


このまちにいつか住みたい (このまちに住み続けたい)

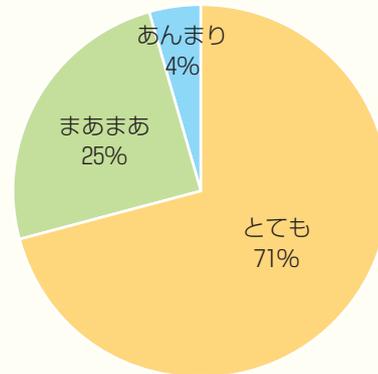
■ とっても ■ まあまあ ■ どちらともいえない
■ あんまり ■ 全然 ■ わからない



この演習は楽しかったですか



この演習は地域の理解に役に立ちそうですか



各班が作成したスライド

新潟市東区

東区入門フィールドワーク

新潟市東区

小澤征夫 大滝峻央 齋岡潤 瀧川愛那

基本情報

人口 134,446(人) (2020年)
 面積 38.63(km²)
 人口密度 3,481.30(人/km²) (2020年)
 人口増減率 -2.28% (2015年~2020年)
 高齢化率 29.20% (2020年、65歳以上)
 医療機関の施設数
 病院 5 一般診療所 70 薬局 66 歯科 74

(参考)日本医師会「新潟県 新潟市東区」地域医療情報システム。
<https://www.jnids.jp/cities/detail/city/13102>
 閲覧日:2025.01.29

地図

鶏そば縁道 石山本店

- 鶏、お米、野菜は全て新潟県産のものを使用
- 上品な鶏白湯スープ

東総合スポーツセンター

- 体育館の他にジムや子供用の遊び場などがある
- 子供から高齢者まで幅広い年齢層の人が利用している
- 周辺には病院やクリニック、ジムなど健康を意識した施設が多い

新潟空港

- 1936年から本格的に旅客運送を開始、現在は約100万人が利用している
- 周辺にはお土産や空港関連グッズを扱うコンビニがある
- 新潟の観光をアピールする置物や映像が流れていた

工業地域

スライド 60~71は参考文庫「2の歴史【中地区】新潟県東区」
<http://www.city.niigata.lg.jp>
 最終更新日:2012年6月1日
 閲覧日:2025年1月29日

東区の工業地帯について

国際空港、港を保有し、空と海の玄関となっている

たくさんの工業地帯がある
 「木工団地」「印刷工業団地」「石材工業団地」「卸団地」など
 工業団地を中心に金属加工、食品、製紙業などの産業が息づく

従業員数、事業所数、出荷額は市内8区で最も多い

南北に工業地帯と住宅地が交互に連なる

工業化の歴史～黎明期～

- 明治時代後期
 新潟鉄工所が山の下の工場を作る
 石油事業の関連機械の製造が開始
 新潟健康会(のちの新潟臨港)設立
- 大正初期
 下請けの小企業が増える
 北越板紙設立
 名古屋紡績新潟工場設立
(参考)新潟日報「東区ってこんな場所！」
<https://www.niigata-nippo.co.jp/feature/niigata-ansozu/niigata-series5-02>
 閲覧日:2025.01.29

工業化の歴史～築港期～

- 新潟臨港の築港による発展
- 大正後期
 「新潟臨港」築港開始
 山の下の臨海鉄道(貨物線)開通
 焼島埋立め立て工事開始
- 昭和(戦前)
 新潟市都市計画で山の下の工業地帯に指定
 新潟飛行場の使用開始

工業化の歴史～戦時中～

- 埋立め立てと工場誘致
- 「新潟人絹工場」山の下の下に設立
 「新潟電気製作所」上玉瀬町に設立
 「北越パルプ」「新潟硫酸石山工場」焼島埋立地に設立
 「昭和石油新潟製油所」山の下の下に設立
 「三菱鉱業新潟金属製錬所」開設
- ※「日本鋼管」「新潟鉄工所」などが重工業に指定される

工業化の歴史～戦後～

- 工場設備の奨励
- 新潟市「工場設置奨励条例」制定
 「日本瓦斯化学工業」種工場、「旭カーボン」など設立
- 天候が不安定に伴う地盤沈下が見られるようになる
- 煙による健康被害が起こる

工業化の歴史～平成初期から現在～

- 「新潟貨物ターミナル駅」開設
- 「新潟みなとトンネル」開通
- 「新潟産業型メガソーラー発電所」運用開始
 雪対策のために地上1mの高さにある適切な傾斜角の検証のため、20度と30度の2種類の傾斜角度がある

工業地域の健康

煙による健康被害

- 学校の壁が黒くなる
- ・騒音
- ・粉塵、化学物質
- 耳や鼻、喉に負担がかかるため
- 耳鼻咽喉科が多い
- 行政による規制も

新潟水俣病

- 1965年に阿賀野川流域で発生した有機水銀中毒による公害病
- 工場排水に混ざったアセトアルデヒドと水銀がメチル水銀に変わったことが原因
- 認定患者総数は約700人
- 給付金申請を行っている人を含めると約3800人

(参考)「新潟水俣病」新潟県ホームページ
<https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/142853.pdf>
 新潟水俣病資料館「新潟県立環境と人間のふれあい館」
http://www.fureaikan.net/minamata/acid_s.html

水俣病と東区

- 現在も患者は確認されている
- 保健師や看護師が毎年訪問し話を聞いている
- 有害物質の管理を厳格に行い、河川、湖沼の水質状況を定期的にモニタリングすることが重要

交通の便

JRの駅やバス路線があり、中央区へのアクセスが良いことは東区の良さ

また大きめのスーパーマーケットもあり生活しやすい。

しかし、バスの路線は限られているため日常生活では車がないと不便。

健康増進

- 「東スポレンジャー」というキャラクターを作って健康増進に繋げている。
- 木戸病院には福祉施設からの送迎車が複数来ていて、またクリニック紹介看板や施設が多くみられた。
- 区全体で健康意識が高いようにみられた。



新潟市江南区

医学入門
フィールドワーク
江南区
塚越光大 藤野麗 古演憲 牧野寛至

江南区とは

引用①

引用②

江南区とは

- 人口 7万人前
- 面積 約75平方キロメートル
- 特徴 新潟市のほぼ中心に位置 信濃川や阿賀野川に囲まれている。区内には豊かな自然環境があるため、多くの植物や鳥などが生息している。いちご、なし、とうもろこし等、土地を生かした農業も発展している。

地域医療情報システムより

江南区とは

- 住民の構成
 - 年少人口 8,722人
 - 生産年齢人口 38,653人
 - 高齢人口 20,597人 (2020年度)
- 医師数 約95人

地域医療情報システムより

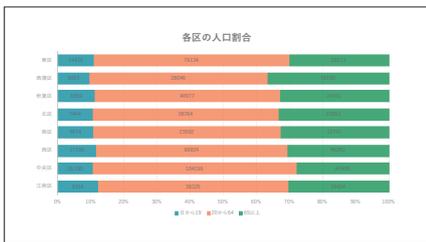
江南区の医療

医療状況

- 亀田第一病院が救急から在宅医療に至るまで幅広い医療を提供している
- 特定健康受診率が低く、生活習慣病の早期発見・予防が十分に行われていない
- 要介護認定率が高く、高齢者の介護予防が重要な課題

解決策

- 小中学校での保護者向け受信勧誘や、未受診者への電話勧誘を行う
- 高齢者の健康保持増進を図るため、地域の集まりで多職種と連携した健康教育を実施する



遠足のテーマ

江南区の人々と交流し、その地域の暮らしや医療の現状に触れ、その魅力や課題を見出し、改善策を考える。

北方文化博物館とは

- 夏期であった伊勢屋の家の遺構を博物館として公開
- 2020年「生き残り〜ふら〜あひま〜」という企画展が開催。暮らし、食、遊びといった建築物、庭園や彫刻などが展示される。
- 3月には動物の骨、11月ごろには結露を凍らせた展示も行う。



行ってみてわかったこと

- 亀田製菓などの企業の工場があったり、農村の地域が栄えていて、住民性が良い
- 想像していたよりも新潟県から近く、電車で8分、バスで25分程度だった
- 高速道路や国道はあるが、電車はあまりないので、車はあった方が便利
- 訪問医療も充実していないので、車は必須

引用③

わかったこと

- 訪問医療の整備が新潟市全体だけでなく、江南区も必要
- 亀田地域は医療機関、ショッピング、交通の便も整っているが、それ以外の地域は整っていないし、高齢者の多いが車の運転が大変
- 区入りの利用者はコロナ前は利用者数が1年間あたり9万人、コロナで減ったが、コロナ後は8万7500人と戻ってきた
- 収支率はコロナ前よりも良く、53%から57%に上がった。収支率を高める取り組みも行っている
- バリアフリー化も進めている

新潟市北区



北区の基本的情報

- 人口 72,804人(令和2年国勢調査結果)
- 面積 107.48平方キロメートル(国土地理院公表)
- 世帯数 27,418世帯(令和2年国勢調査結果)

新潟市の位置

・新潟市の位置は、右図のように海に面し、新潟県の下越に位置している。

北区の位置

- ・北区の位置は、新潟市の一番はじめにある。
- ・中央区からは、少し遠いところに位置している。



北区の特色

- ・北区は、田舎を体感できる場所。
- ・直線1000mの新潟競馬場は大人気である。
- ・四季ごとの表情がはっきりしている新潟は、季節の美味しいものや、海や山といった自然にあふれ、楽しみ方も多彩である。

北区のイメージカラー

- ・ネイチャーグリーン
- ・コンセプトは、見渡す限り広がる田園風景、巨大な葉を広げる種鳥島のオアシス、海沿いに続く松林など、豊かな自然に恵まれた北区を象徴する緑である。北区のイメージカラー「ネイチャーグリーン」は、人々の心に思いややすらぎをまぎせてくれる色です。



せんべい王国

- 所在地: 新潟県新潟市北区
- 運営: 粟山米屋(「ばかうけ」などを製造)
- 特徴: 米どころ新潟の伝統せんべい作りを体験できる施設
- 主な体験・見どころ
 - せんべい手焼き体験(自分で焼いて焼付け)
 - 絵や文字を焼ける大判せんべい作り
 - 工場見学でせんべい製造の工程を知る
- お土産・限定商品
 - 施設限定のオリジナルせんべい販売
 - 新潟ならではの特別な焼付けの商品が豊富
 - 楽しみ方
 - 観光や家族連れに人気のスポット
 - 新潟の米文化を体験できるユニークな施設
 - せんべい作りを見て、焼いて、味わえる!



試食!

1席内にはさまざまなせんべいが販売されている



せんべいソフト

新潟競馬場

新潟競馬場の概要

- 所在地: 新潟県新潟市北区 (JRA運営)
- 概要: 日本唯一の直線1000mコースを持つ競馬場
- 競馬種別: 中央競馬(1年制)
- コースの特徴
 - 直・サードランコース
 - 芝の外回りコースはJRA競場の広さ
 - 芝内りコース併用
- 主なレース
 - 朝陽記念 (GIII) (サマーマイルシリーズ)
 - 新潟記念 (GIII) (サマー2000シリーズ)
 - アイビスサマーダッシュ (GIII) (距離1000m)
- 競馬・観戦し方
 - スタンド・レストラン完備
 - キッズ向け遊び場もあり、家族連れにも人気
 - 観戦の雰囲気も体験できる



馬券を買ってみました。🐧



まとめ

実際に北区に行ってみて感じたことは、とても田舎であるということである。自然が豊かなのでリラックスしたい人には、ちょうどいい場所なのではないかと感じた。

北区には、競馬場に特に人が集中していた。



クイクイ

新潟市西蒲区



基本情報

- 人口 約5万人 (減少傾向)
- 医療機関数 一般診療所数 30施設
- 年齢構成
 - 0~14歳 5000人
 - 15~64歳 30000人
 - 65歳~ 20000人
- 面積 176.67km² (新潟市の4分の1の面積)
- 孝地区・西川地区・海東地区・若室地区・中ノ口地区で構成
- 2005年に市町村合併で新潟市に合併

西蒲区巻町の概要

- 国指定史跡
 - 県内最大の古墳である山古石古墳をはじめ数多くの遺跡が角山山麓のから発見。中でも高瀬古墳は地方首長の墓と考えられている。
- 「巻」という地名の由来
 - 古くは巻・巻木、アイヌ語のマク (山手・巻・巻) や牧 (牧場) の語で、国産川の流木のうず「巻」く地など。
- 歴史
 - 近世長岡藩領の中心地として同藩の代官が置かれ、近隣の村々を支配。
 - 明治12年郡区町村編成法により西蒲郡巻町となり郡役所を設置。
 - 明治22年町村制施行により巻町(現巻町)の村々は13に再編。
 - 明治24年巻町が町制を施行。
 - 明治34年町村合併で巻町(現巻町)の村々は5つに再編。
 - 昭和30年の町村合併促進法により巻町の5村が合併、新巻「巻町」が発足。
 - 1971年に西蒲区の一部 (中巻町・東巻町・新巻町・巻田・東北上) を編入。
 - 昭和35年現在の一部 (西巻町・下巻町) を編入し、巻町となる。
 - 平成17年新潟市と合併。

強み

人と人とのつながり
山や海などの自然

テーマ

自然の豊かさ
暮らしやすさ

巻郷土資料館

巻地区郷土資料の保存・収集・公開

展示品

新潟市指定文化財「越後毒消しコレクション」

毒消しと呼ばれる和紙の薬 (いっゆる薬) で、毒消し(毒消し)と毒消し(いっゆる)、「白紙」(毒消し)、「天狗」(てんご)、「目豆」(めいず)などがある。

のぞきからくり
江戸時代から昭和初年まで遊ばせられていた遊具。

松郷屋焼
1830-1843年に津山の百村二村八人が商家による集落のため、現在の巻島原津町の松郷焼の窯場(土器)に引き継いで陶器を製作し、巻島原津町を拠点とした。巻島原津町の窯場(土器)は巻島原津町の窯場(土器)などである。巻島原津町の窯場(土器)は巻島原津町の窯場(土器)などである。

采の芽

巻駅から徒歩約10分
2021年11月オープン
和がテーマの店内と外観と味づくり

「醤油」には鶏と鴨のダシ
「塩」には真鯛と金目鯛のダシ
使用したあっさりとした上品な味

カウンターライブスタイルの清潔な店内
常に行列ができていくほどの人気店
人気YouTuber SUSURUさんが紹介

種月寺

西蒲区石灘に位置する曹洞宗の寺院

- 近くに岩屋温泉 静かで穏やかな
- 1989年に国の重要文化財に指定
- 茅葺き屋根(新築は、遠景性、耐久性に優れる)が特徴的
- 豊かな緑が境内を囲う美しい風景

Taihoku! coffee&gelato soft

- 新潟出身の兄弟が営業するカフェ
- 北海道で経験したワクワクを伝えたいというコンセプト
- 北海道の深照りの文化と浅照りを織り交ぜたコーヒー
- 豊かな自然と落ちついた雰囲気

鯛車焼一成

鯛車とは

そもそも...

- 鯛の鯛車とは、江戸時代末期頃から新潟巻地区に伝わる竹と和紙で作った玩具
- 全盛期の昭和初期には、子供の数だけ鯛車を作ったとも言われる。
- お盆の夕暮れ時に浴衣姿の子供たちが、下駄を履き砂利道をゴロゴロ引いて歩く姿は、晩夏の風物詩として親しまれてきた。

鯛車焼一成

<鯛車焼きの由来>
巻地区の伝統的な郷土玩具「鯛車」をモチーフにしたお菓子

<鯛車焼きの特徴>
豆乳を使用したなめらかなクリーム外はカリッと、中はしっとり
巻地区の文化や歴史を感じられるスイーツ



たいぐるま リード君

新潟市南区

フィールドワーク

南区を訪れて
田中胡名 田中康人 桒水寿真 廣田海斗

南区はどんなところ？

- ▶ 人口 42,504人（2024年）新潟市の中では一番少ない
- ▶ 面積 100.91km²
- ▶ 旧白根市、味方村、月潟村で構成



南区の主な産業

- ▶ 南区は新潟県でトップクラスの農作物の生産量を誇る。
- ▶ フルーツ(イチゴ、モモ、ブドウ、日本ナシ、ル レクチエ)
- ▶ 野菜(枝豆、きゅうり、食用菊)



事前インタビュー

- ▶ Q 訪問診療の役割は？
- ▶ A 包括支援センターに同行する。家族の困りごとを解決する。田舎が多い上に一人暮らしの人が多いため、訪問診療のニーズは高い。
- ▶ Q 南区の住民の困り事は？
- ▶ A バスが1日に一本しか通らない場所があったり、電車が通っていない。病院への移動手段がない。



事前インタビュー

- ▶ Q 行政は医療にどう関わっているか？
- ▶ A 健康寿命を上げるために、白根で健康相談会を開いたり、看護師や民選良と協力している。開業医と健康診断受診の率を向上させるための声かけをしている。



テーマ

実際に南区を訪れて、
新しい新潟の魅力を知ろう！

南区役所

- ▶ 南区役所
- ▶ 階段の踊り場には区の伝統工芸であるから大瓶が飾られていた。



南区役所

- ▶ 南区役所の一階には、市民の健康を守るためのチラシが10枚ほど置かれていた。肺炎球菌の予防接種やウォーキング、骨密度の計算(骨粗鬆症の予防)、免疫力向上のための案内があった。



白根庭園

- ▶ 白根は低湿地帯で水質が悪く早くから上水道の普及が希求された。配水塔は、鉄筋コンクリート造で内部は4階建。上部に100立方メートルを貯水するタンクが設置されている。昭和48(1973)年に上水道施設としての役目を終えたが、地域のランドマークとして、隣接する白根庭園とともに景観を形成している。2018年に国の登録有形文化財になった。



白根庭園での写真



清楽苑

- ▶ 「新潟市白根高齢者能力活用センター」(愛称：清楽苑)は、高齢者がともに楽しみ、学ぶ施設。地域住民の集会場としても利用することができる。一時間当たり70円ほどで利用することができる。訪れた当日は何も集会は行われていなかった。



昼食(わっぱ飯)

- ▶ わっぱ飯とは？ わっぱ飯とは、新潟県や福島県会津地方の郷土料理。薄い木の板をまげて作られた容器にご飯やおかずを詰めて蒸したものだ。新潟県のみわっぱ飯は、杉の板でできたわっぱ飯は、杉の板と一緒に蒸すのが主流。



白根グレープガーデン

- ▶ 白根グレープガーデンは一年中フルーツ狩りを楽しめる施設。行った時期はレモンやミカンも収穫できた。併設のカフェなどもあり充実。ワザビ小屋もあったらしいが、確認はできなかった。

品種	収穫時期	特徴
レモン	10月～12月	酸味が強い
ミカン	11月～1月	甘酸っぱい
グレープ	9月～11月	甘み強い
りんご	10月～12月	甘み強い
梨	9月～11月	甘み強い
ぶどう	8月～10月	甘み強い
いちご	5月～7月	甘み強い
モモ	6月～8月	甘み強い
ブドウ	8月～10月	甘み強い
りんご	9月～11月	甘み強い
梨	9月～11月	甘み強い
ぶどう	8月～10月	甘み強い
いちご	5月～7月	甘み強い
モモ	6月～8月	甘み強い

白根グレープガーデン

- ▶ 訳アリ商品を安く売っていた。ブランド梨であるル・レクチエは4個で1000円。
- ▶ ちょうど班員が4人だったので、少しずつお金を出し合って梨を買って帰った。



主要公共交通機関(バス)

- ▶ 南区ではバスが主要な公共交通手段となっている。運賃は均一で特に、高齢者運転免許返納者や、高齢者専用のICカードを使う人は半額で乗車することができる。バス停間の間隔が短く、高齢者の方でも歩いて行きやすい。



主要公共交通機関(バス)



- ▶ 高齢者に制度を説明する講座も開催。一定区間フリー乗降可能。PayPay利用可能で若者も使いやすく。バスが来ない時間帯は、専用のタクシー利用可能。

アクセスは悪い



- ▶ バスの利用に力を入れているものの、事前インタビューでも聞いていた通り南区には電車が通っていません。バスもほとんど通らないといった場所も少なくない。左の写真のように見渡す限り一面田畑といった場所も多く、公共交通機関を使わずに自家用車の利用を余儀なくされる住民は少なくないであろう。

南区で一番素敵なおとこ



- ▶ 白根庭園
国の登録有形文化財。昔ながらの庭園で、わびさびを感じるような落ち着いた雰囲気がある美しい景観であった。

参考web

- ▶ <https://www.city.niigata.lg.jp/minami/terokuni/kyoku>
白根グレープガーデン
最終更新日 2月3日(月)
- ▶ <https://www.city.niigata.lg.jp/minami/about/gaiyou.html>
南区の概要
最終更新日 2月3日(月)
- ▶ <https://dustinmag.com/fruits/click/>
白根グレープガーデンフルーツ狩り・施設品種
最終更新日 2月3日(月)



五泉市

7班
フィールド
ワーク
in五泉市



橋本梨佳子 田中秀彦
柿崎大雅希 石原郁也

○五泉市

- ・五泉市は下越地方にある市で、南北に五泉、村松という2つの市街地がある。
- ・面積351.91km² 人口45,803人(R6.10時点)
- ・病院・診療所数 86.9施設/人口10万人
- ・医師数104.99人/人口10万人(全国平均307.23人/人口10万人)



○五泉市

- ・北側の五泉地区に様々な施設がある印象 (新潟大学農学部も！)
- ・周囲は山々に囲まれていて、自然豊かな雰囲気
- ・ぼたん、チューリップ、里芋、栗、銀杏の栽培が盛ん
- ・ニット製品の全国的な生産地



テーマ

五泉市と新潟市の違いを知る！

北五泉駅
から
中田製作所



①中田製作所




じょっぱいから
ご飯のみ！

中田製作所
から五泉八幡宮



②五泉八幡宮




②五泉八幡宮





五泉八幡宮
から新鮮市場
ベアーズ



③新鮮市場ベアーズ




新鮮市場
ベアーズ
から五泉駅



④五泉駅



五泉駅から
村松公園



⑤村松公園




愛宕神社




愛宕神社からの景色




村松公園
から村松郷
土資料館



⑥村松郷土資料館




村松郷土資料館
から
ラポルテ五泉



⑦ラポルテ五泉




⑦ラポルテ五泉



阿賀野市



阿賀野市

大崎青葉 小林良賢 佐々木小夜子
高木慎一郎

フィールドワークのねらい

水原駅周辺の散策を通じて
地域の特徴をつかみ、
生活の様子について考える

事前学習

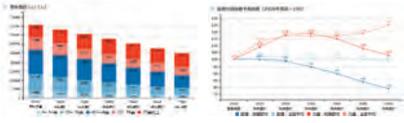
- 起伏地に6500ヘクタール余りの水田が広がる穀倉地帯
- 南側に大河阿賀野川が流れる
- 面積：192.7平方キロメートル
- 気候：日本海気候
- 産業：農業と建設業・サービス業
- アクセス：新潟市から車で30分



<https://agano-spot.com/access>

事前学習

医療 <https://jmap.jp/cities/detail/city/15223>



事前学習

- 阿賀野市の産業
- ヨーグルトやアイスクリームなどの乳製品
- 安田瓦



写真書：<https://adp.yamanashi.ac.jp/contents/yogurt.html>

写真集：<https://nipponia-kanou.or.jp/spot/7382>



出典：国土院

旦飯野神社

- 聖徳太子を祀る
- 1700年以上の歴史
- 歴史の神徳として地元の人々に愛されている



撮影：大崎青葉

旦飯野神社

- 丸石「御神霊石」
- 神様が居る石として、触れると神様の力が伝わりとされている



撮影：佐々木小夜子

水原代官所

- 年貢収納を確保することや、福島藩の開発、および新発田藩・村上藩の置守が主な目的
- 1746年（延享3年）に、幕府直轄として水原城跡跡に設置された

瓢湖

- 白鳥の産地として全国的に有名で、ラムサール条約登録湿地でもある
- 国の天然記念物に指定された
- 白鳥はロシアのシベリアからやって来る



撮影：高木慎一郎

生活面の考察① 生活環境

- 大きな建物が少なく、建物のほとんどは住宅で生活感がある
- 阿賀野市には3つ駅があるが、すべて無人駅、うち二つはほとんど利用がない
- 先に挙げたような神社や瓢湖、代官所(および屋内の展示物)といった人の集まるスポットや白鳥・鴨のような水鳥はアピールポイント

生活面の考察② 日用品の調達

- タクシーの運転手の方「水原駅から最寄り的大型店までは距離がある」
- 生活感とは裏腹に道中に大型店は少ない。商店や直売所はある



©2025 Google

阿賀野市の良さ

- 新発田に比べて静けさやアクセスが良く、通勤・通学がしやすい
- 五湖連綿と阿賀野川に囲まれ、自然豊か
- ヨーグルトやアイスクリームなど独自の乳製品

画像(<http://www.agano.net/shizen/shizen.html>)

課題

- 人口減少が最重要課題
- 阿賀野市は「消滅可能性自治体」に指定されている
- 人口減少が地域経済の縮小を呼び、地域経済の縮小が人口減少を加速させ、負のスパイラルに陥っている



<https://jp.gdfreak.com/public/detail/jp010050000001015223/1>

参考

- 阿賀野市ホームページ [阿賀野市の概要／阿賀野市\(2025/2/3\)](#)
- 旦飯野神社ホームページ [【公式】延喜式内 旦飯野神社\(あまのいの\) | 新潟県阿賀野市\(2025/2/3\)](#)



ぐすっちょ

阿賀町

医学入門フィールドワーク

1.阿賀町について

地理的特徴

- 1.新潟県東部に位置し広大な面積が なる(952.88 km²)
一方でこのうち可住地面積は約167km²
→町の大部分を山林が占めており、自然豊か
- 2.大きく津川、三川、上川、鹿瀬の四つの地区に分かれている
- 3.全体の中心機能は主に津川地区に集約されている

阿賀町の医療圏

- 基本的には阿賀町の中心部にある県立津川病院が一次救急の病院として機能している
- 三川、上村、鹿瀬の各地域にも診療所があるが、常に稼働しているわけではなく、定期的な外来診療と検診が主になっている
- 重症者や特殊な処置が必要な方は交通機関を使って新発田市内や新潟市内の病院へ行くことになる
- 広大な医療圏のため訪問診療や介護がメインになっている

2,阿賀町の社会福祉政策

1,阿賀町IT医療特区

県立津川病院にいる常勤医は6人、診療所ではないほぼ内科以外診療できない医療人材不足になっている

この問題を補うために、津川病院と診療所をテレビ電話で繋げて遠隔診療をできるように平成の終わり頃からやっている

2,子育て支援策

阿賀町全体での少子化対策として

- 乳児健診、就学児健診
- 保育園・支援学校の通学バス無償
- 住宅の建築費、ゴミ袋の費用助成
- 全天候型あそび場「あがりーな」
- 妊産婦医療費助成
- 未成年者の医療費無償 などがある

3,高齢者への医療支援策

- 市外の医療機関にからなければいけない町民向けに阿賀町が新潟市の基幹病院までの高速バスを出している
- 自力での移動が困難な高齢者むけに医療機関と自宅を無料で送迎するサービス
- 地域の安否確認の見守りサービス
- 認知症の高齢者向けにGPS購入の助成

3,フィールドワーク

フィールドワークの内容

- 阿賀町での子育て支援といった社会福祉政策
- 津川地域での各医療機関(歯科医院や介護施設なども含む)の規模感を確認し、
- 阿賀町への移住政策
- 阿賀町中心部の社会規模の美態を散策しつつ見学した

阿賀町津川地区について

- 平成の市町村合併でできた阿賀町における中心地域
- 歴史的にも呼応通の要所として栄えた名残が見える
- 付近の山々など豊かな自然環境から観光で訪れる人も多い



阿賀町津川地区について

- 阿賀町の進める移住政策によって若者の回帰したりしている側面もある
- しかし全体としてみると少子高齢化の流れが強い



主な施設紹介①

県立津川病院

- 阿賀町全体でのかかりつけの病院としては最大規模
- 病院の規模としては比較的小さく、病床数は42床
- 現在は在宅医療、訪問看護の拠点としても機能している



津川病院の抱える課題

- 建物の老朽化
阿賀町で唯一の夜間救急対応のできる医療機関なので存続の必要性が大きい
- 常勤医師の不足
現在新潟市内の医療機関から派遣されてきている医師が内科外科以外をほとんど対応している
- 医療圏の広さ
阿賀町の県内で3番目に大きい面積に対して津川病院がカバーしなればいけない範囲が大きすぎる

主な施設紹介②

道の駅阿賀の里

元々は新潟福島の休憩で答る道の駅であったが、利用者の減少から阿賀町の子育て支援策の一環として、隣接する建物に児童向けの屋内型の遊び場を作り、半年ほど前に開業した



まとめ

- 阿賀町は少子高齢化の進む地方自治体ではある
- 一方で自治体としての社会福祉政策が手厚い
- 医療システムも今のところ大きな問題が生じていない
- 1番大きい問題は数年後に本格的に人材不足が起こった時に備えてどう対策していくのか



たいらのこれもちー

佐渡市



佐渡について

人口：約4万6000人
面積：約855平方キロメートル。東京23区や淡路島の1.5倍の大きさ
産業：米作りを中心に、ル・レクチュ、リンゴなどの果樹栽培が盛ん
観光地：佐渡金山、トキの森公園、一ノ宮神社、北沢浮遊遊城跡地

インタビュー：佐渡総合病院

島ならではの医療需要は何か？
→特になし！高齢者が多め。
医療と介護の連携において何を心掛けているか？
→佐渡独自の情報共有システム（ひまわりネット）を導入して連携をとっている。
患者が本土に行って治療を受けるケースはあるか？
→重い病気（癌、脳梗塞など）は市内よりも本土の方がより高度な医療を受けられるのでドクターヘリで移動するケースがある。また、新生児の集中治療の場合にも移動するケースがある。
佐渡市での少子高齢化に対する対策にどのようなものがあるか？
→移住政策。具体的には、子育て支援などの住みやすい環境づくり。

インタビュー：佐渡市役所

佐渡金山の世界遺産登録によって暮らしにおいて変わったことは何か？
→大きな変化はないが、飲食店のお客さんの数が増えた。
離島で暮らすことの良い点、悪い点は何か？
→一年をとると暮らしやすい。コミュニティが狭い分、親密な関係を築ける。船で移動するのが面倒くさい。職業の選択の幅が狭まる。
佐渡の独特な自然風土を保護するためにどのような取り組みをしていますか？
→特に大きな取り組みはしていないが、島民全体で佐渡の自然環境を守ろうという意識が子供の頃から養われている。
佐渡の魅力は何か？
→食べ物おいしい。島だけ四季がはっきりと感じられる。



トキ野生復帰シンボルデザイン
サドッキー

新発田市

フィールドワーク 新発田市

石川幸平 小屋塚亮 三浦陸 関谷真都

新発田市

- ・新発田駅を中心に発展しており、内陸部はほとんど山。
- ・交通や施設などもほとんどが日本海側に分布している。



事前調べ

新発田市は臨海部から山間部までを含み、新潟県の中で10番目に広い市である。新発田城や城下町、自然風景などもあり、自然と歴史を特徴とした観光が盛んである。



基本情報

- ・面積533.19km²
- ・人口94,927人(2020年)
- ・人口密度178.10人/km²
- 全国平均338.20人/km²
- ・人口増減率 -3.74%
- 全国平均 -0.35%
- ・高齢化率(65歳以上、2020年) 32.40%
- 全国平均 28.60%
- ・医師数258.51人(人口10万人当たり)
- 全国平均 307.04人



新発田市の強み

農産物

- ・米
- ・紫米
- ・アスパラガス
- ・越後姫
- ・小坂梅
- ・洋ナシ

特産品

- 昭和58年に食品工業団地を造成後、食品加工業が盛んに。
- ・地酒
- ・和菓子
- ・のっぺ
- ・ぼっぱ焼き
- ・麩
- ・から寿司



事前インタビュー



新発田市で開業している松沢医院様にインタビューさせていただきました。Q.市内の医療供給について
A.山間部では、高齢化に伴い病院が無くなったことに加え、交通インフラが十分でないため、通院が困難であることがわかりました。患者数は、病院数の増加や少子高齢化の影響により、先生が開業された当時に比べ減少傾向にあるとお話しさせていただきました。一方、医師の高齢化により、夜間救急の受け持ちが困難になりつつあるようで、新発田市にも高齢化の影響が出てきていることがわかりました。

地図

私たちはこちらの地図のよう

新発田病院—諏訪神社—蔵前—第一公園—新発田駅前—新発田城—蔵前



地図

赤：医療機関

青：コンビニ

オレンジ：スーパー

緑色：敷設ルート

医療機関はとても多い。一方、コンビニやスーパー、その他の施設などは少ない。(新発田市中心部付近)



新発田病院

諏訪神社

・神社の方に新発田市のことや神社のことをインタビューしました。
蔵前野原にある諏訪神社に由来、約1400年以上の歴史、
年末年始や七五三、お祓いで地域の方々が集まる中心の神社
・カラオケやフットサルや電子ゲームによる観光案内を行っており、観光に力を入れていると感じました。



新発田城

新発田城も、観光案内をしている方に新発田市のことや新発田城についてインタビューしました。
人口減少によって気候が失われていることを危惧しており、通院などで受診をした際に昔よりも若手の医師が少なく、今後の医療に不安を感じているそうです。



水路

昼食

お昼ご飯は、インタビューの際に松沢先生におすすりいただいたお昼というラメちゃんに行きました。
天気がよく、寒い日だったので、温かいラーメンがとても体にしみしました！



行ってみてわかったこと

- ・新発田駅周辺は道幅が狭いような建物が多く、新発田市の歴史を歩いた歩道を行くだけで、フィールドワークの日には、平日で、天候が悪れていたことが一歩あるかと思われ、雨が降るとシッターが閉まっている店も多く、気候がかわっているように感じた。
- ・一方、蔵前野原には平日でも観光客の姿が多く、蔵前の商業の盛衰が感じられた。



街歩きテーマ

- 1.医療の様子
平日から新発田病院の駐車場が満車で、医療への需要の高さが感じられた。しかし、事前インタビューや現地でのインタビューからも医師不足や交通インフラ不足によって通院の難しさが伺えるようになった。また、若手の医師が少ない今後の医療に不安が感じられた。
- 2.城下町新発田
町を歩くとき歴史の建物が多く残っていた。また、その雰囲気に合わせて駅や街灯が作られていたり、町中に多くの観光アツが置かれていたりなど、観光に力を入れていることが伺えた。加えて、市のいたるところに市民会館のマークがあり、大きな施設が建てられつつあることから、城下町の気候を感じられた。
新発田駅周辺は、新発田城や蔵前、清川園など自然と歴史の調和した観光案内が、また違う季節に訪れてみたい。今回は訪れることが出来なかったが、山間部の方には月間温泉やスキー場もあるため、魅力あふれる市であった。

最後に



参考文献

- ・公益社団法人日本医師会、「新潟県 新発田市」, 地域医療情報システム, (取得日2025年1月30日, [新潟県 新発田市 | 地域医療情報システム](#) (日本医師会))
- ・新発田市, 「新発田市の産業・特産品」, 新潟県新発田市公式ホームページ, (取得日2025年1月30日, [新発田市の産業・特産品 | 新潟県新発田市公式ホームページ](#))
- ・新発田市, 新発田市民公開地理情報システム, (取得日2025年1月30日, [新発田市民公開地理情報システム](#))

使用した白地図

白地図専門店 2021年3月, 「新発田市の白地図」, 白地図専門店, (取得日2025年1月31日, [新発田市の白地図 | 白地図専門店](#))



関川村

13班 関川村

浜田夏実 津塚初々子 平川優大 松田武洲

関川村について

・近隣には、
村上市、
胎内市、
新発田市



<https://www.taishamonja.com/sekikawa/>

関川村の 基本情報

- ・面積 299.6ha
(新潟県30市町村のうち17位)
- ・人口 5144人
(30市町村のうち27位) (2020年)
- ・医療機関数 2
(村医の診療所と民営のクリニックのみ)

<https://house.com.ne.jp/sochi/menseki/15/>
https://shingokanet.com/area/sekikawa_lowe.html#population/nigata/
<https://jmap.jp/cities/detail/city/15581>

関川村の年齢構成 (2020年)



・少子高齢化
が深刻
・村の出生数
は1桁

<https://jmap.jp/cities/detail/city/15581>

インタビューの内容 1

- ・平成の市町村合併で、村上市に合併されなかった経緯や、行政独自の行政の仕組みや文化について
- ・関川村の病院・診療所の数や規模について
- ・関川村で対応不可能な病気の場合、どのように他の市町村と連携するのか、その仕組みについて
- ・楽年には村上総合病院の産科が休止される予定
- ・村民が村外に通院する際の移動手段

インタビューの内容 2

- ・子育てで支援やUターン支援の工夫
- ・若者が流出する中、大したもん祭りなどのイベントや文化を引き継ぐ上での工夫
- ・村民の職業
- ・観光地

村の特性

- ・村上市への合併について
- ・近隣と関川村で協議→サービスが行き届かないなどのデメリットを勘み、独立を後うことに決定
- ・合併しなかったからこそ、村らしさが残る
- ・企業は業種によって、課、課に細分化されると、独自の体制が特徴

村の医療

- ・村医の診療所が1つ、クリニックが1つあるのみ
- ・主に内科、小児科、整形外科の診療を行う
- ・入院病棟はない
- ・近隣の市町村の医療機関(村上市、胎内市、新発田市)に通う人も
- ・村の出生数は年々10人を切る
- ・楽年には村上総合病院の産科が休止される予定
- ⇒分娩の確保に課題



他の市町村 との連携

- 移動手段**
- ・村民は、車を運転するか米坂線で移動
 - ・令和4年度の表で米坂線が止まる⇒代行バスや乗合タクシーを利用する
- 施設との連携**
- ・重篤な場合は救急車やドクヘリで村外の病院に搬送
 - ・村上総合病院などとの連携を重視

子育て・ Uターン 支援

- ・村に集約がないため人口減少が深刻
- ・集約支援員が存在
- ・若者が採用される地域おこし隊という組織が、地域の活性化したり、イベントを行う
- ・子育て支援として、都市でのPRに尽力。
- ・移住、定住を呼びかけたり、結婚祝いをするなど、移住者を贈り工夫をする

伝統の継承



- ・大したもん祭り
- ・夏ごろに開催
- ・町と家で子どもを遊ぶ
- ・担が手不足⇒自衛隊や学生ボランティアに協力を仰ぐ
- ・地域の若学生には校の夏の職い部分を持ってもらう

村の産業

- ・農業主体の村→農家が多い
- ・高齢化の進行で農業一家の人は少ない
- ・役所や会社で働きながらの兼業農家が多い
- ・大企業がないため、会社員は村上、新発田、胎内に通勤する人が多い

観光地

- ・有名なは渡邊邸
- ・「〇〜む」という施設がおすすめ
- ・(例) ゆ〜む (温泉施設)
- ・の〜む (農村文化交流センター)
- ・にや〜む (観光情報センター)
- ・ど〜む (屋内運動施設)

フィールドワークのテーマ

「小さくてもキラリと光る村」を目指す、関川村の工夫とは何か

道の駅関川エリア



地図院地図 <https://maps.gsi.go.jp/>

関川村役場



渡邊邸



歴史とみちの館



の〜む (農村文化交流センター)



関川る〜む (旧幼稚園を活用:学童保育、通信制高校準備中)



にや〜む (観光情報センター)





胎内市

胎内市のフィールドワーク

○大久保侅旺
富樫蒼空
藤谷直輝
石岡さくら

胎内市 主要施設



https://jfmate.jp/car/_icsFiles/afieldfile/2023/04/19/P_031.jpg

胎内市の基本情報

面積: 264.89km² (新潟県: 12,584.06km²)
人口: 28,509人 (2020年) 増加率: -5.59% 高齢化率: 36%
 人口密度: 107.6人/km²
世帯数: 10,908戸
医療機関 一般診療所: 14 病院: 2 歯科: 14 薬局: 12
消防 一般診療所: 3 病院: 359
職員数 医師: 32.74人 歯科医師: 19人 薬剤師: 29人
介護 施設数: 46 入所定員数: 678 職員数: 433.06

新潟県 胎内市 | 新潟県情報システム (日本経済新聞)
<https://jmap.jp/cities/detail/city/15227>

胎内市のイベント



https://www.city.tainari.niigata.jp/shokai/gaiyo/documents/shiiseiyasai_2018.pdf

事前インタビュー

給地教育 ⇒ 子供が生まれると「**生き生きカード**」という物取りなど
中条中央病院 ⇒ 外転系は放射線科、専任看護師・社上病院、新発田病院
 遠くからの患者さんも、新潟交通バスの運行は廃止
 代わりに乗り合いタクシー「**のれんまわり**」
在宅医療 ⇒ かかりつけ医のすすめ
 医療と介護の連携 **win新発田=胎内=出羽市**
お取りの在宅医療 ⇒ 出張講座や勉強会
運動 ⇒ 車の出足があるとお散歩できない、家でできる運動の推奨
 生活、運動と実家の指導
 ウォーキングや体育館での運動、ながら運動講座
 宣伝、QRコード (若者にも向けて)
観光・産業 ⇒ 宮内計画、**地産地消**
 特産品を使った商品⇒米粉、ハルカナタ、マコモダケ、木耳

胎内の魅力に迫る ～雪の良さと大変さを知る～

何に注目して町を見てきたの??

▶ 中条駅



▶ 病院と町の様子



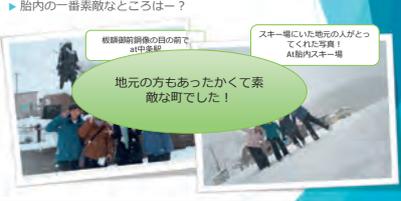
▶ 道の駅



▶ お昼ご飯と胎内スキー場



▶ 胎内の一番素敵なところは？



やらちゃん

聖籠町



【基本情報】

- ・人口：14,259人
- ・面積：37.58km²
- ・高齢化率：28.60%

【年齢構成】

年齢層	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年	2025年(推定)
年少人口(0-14)	2,070	1,972	1,788	1,693	1,611	1,526
生産年齢人口(15-64)	5,300	5,167	4,769	4,389	3,927	3,625
高齢者人口(65-)	6,889	7,120	7,702	8,267	8,762	9,108
総人口	14,259	14,259	14,259	14,259	14,259	14,259

【医療機関】

- ・病院病床数：290
- ・医師数：32.50
- ・これらの値を人口10万人あたりに換算すると、病院病床数は全国平均のほぼ2倍に対し、医師数は0.8倍と全国平均を下回っている。

【特産品】

- ・『果樹の里』と言われており、果樹栽培が盛んである。
- ex) さくらんぼ、ぶどう、桃、梨、スイカ等
- ・港が近いので、スーパーで鮮魚の販売が行われている。

【産業】

- ・国際拠点港新潟港(東港)に隣接し、高速交通アクセスに恵まれた日本海最大規模の工業団地を所有している。
- ・火力発電、東北電力東新潟火力発電所、石油備蓄基地、液化天然ガスの受け入れ基地などがある。
- ・東港があるため、県の中心の新潟市ではなく、聖籠町で工業が盛んになった。

聖籠町MAP

- 1: 亀代小学校
- 2: 聖籠中学校
- 3: 運野小学校
- 4: 山倉小学校
- 5: 運転免許センター
- 6: アルビレックスクラブハウス
- 7: 聖籠観音の湯さぶーン
- 8: 新潟聖籠病院

【テーマ】 県内で高齢化率が最も低い聖籠町その秘密に迫る！

インタビューでは…

- ・働く世代が多く、出生率が高い。
- ・町役場と住民が近い関係だから、安心して子育てができる。
- ・保育料の無償化。
- ・子供医療費の整備。

子育てしやすい「まちづくり」に取り組んでいるから！



【テーマ】 県内で高齢化率が最も低い聖籠町その秘密に迫る！

実際に行ってみて…

- ・聖籠町立図書館は、親子連れに人気で、子供から大人まで楽しめるイベントを数多く開催している。
- ・町民が公共施設と密な関係だから、子供連れでも安心できる環境。

町民の優しさ、温かさが秘密！

3つの小学校、1つ中学校に実際に行ってみて…

- ・大型の校舎
- ・駐車場が広い！
- ・町内の小中学校はこれが全てなので、遠方からはバス通学。
- ・学校に大きな庭がある。

公共施設に実際に行ってみて…

- ・やはり大型！
- ・駐車場も広い。
- ・設備が充実。
- ・地産地消の取り組み。

【まとめ】

- ・工業地帯のため、働き盛りの世代の住民が多い！
- ・住民がみな近い関係であるから子育てに選んでいる！
- ・住民の町への深い愛！
- ・乗用車は生活必需品。

一途に公共交通機関があまり発達しておらず、車がなければ買い物に行くのも、医療機関を受診することも困難であることが課題。



【参考文献】

<https://www.town.seiro.niigata.jp/kurashi2012/profile/profile.html> 『聖籠町トップページ』 (last access 2025/2/4)

<https://man.jp/cities/detail/city/15307> 『新潟県 聖籠町 - 地域医療情報システム』 (last access 2025/2/4)

<https://jin.gdfreak.com/public/detail/ip010050000001015307/2> 『聖籠町の人口と世代』 (last access 2025/2/4)



弥彦村

弥彦村

M24A044J 伊藤萌々子
M24A050C 細貝咲良
M24A068F 平川功人
M24A138A 木村優太

弥彦村について

- ・人口 7534人(2024年12月時点) 65歳以上高齢者率34.0%
- ・産業 弥彦神社に代表される史跡や、弥彦山をはじめとする自然環境に恵まれ、観光産業を推進している
- ・特産品 枝豆 パンダ焼き 釜めし わっぱめし
- ・医療 村内にはクリニックが二か所のみ 医師数は2名

インタビュー内容

- ・三条保健所管内の医療実態について
- 一過性新生物・心疾患・老衰で亡くなる方が多い
- ・生活習慣病の対策や運動を推進する取り組み
- 減塩のための食生活改善事業・ウォーキングなどの運動を奨励している
- ・病院間での連携
- 大きな病院が遠い地域も多いため、かかりつけ医と急性期病院、訪問診療スタッフでの連絡をこまめに行っている

地図



行った場所

- ① 弥彦駅
- ② 彌彦神社
- ③ おもてなし広場
- ④ 昼食（やまぼうし）
- ⑤ 弥彦公園
- ⑥ 弥彦競輪場

弥彦駅



彌彦神社



弥彦村の自然の中にあり、豊かな緑と静けさが学業に心地よかった
神社自体も歴史が深く、荘厳な雰囲気が漂っていた
本館の建物は歴史があり、非常に素晴らしい場所であると感じた
お湯を多くとるお風呂の湧き出しが心を浄化してくれるように感じた



おもてなし広場



本来は足湯に入ることができるとのことだが、行きたるは工事だったため残念
土産などが売ってあって、観光客や地元の人のための憩いの場所になっていた
フードコートがあり、家族連れでまわっていた

昼食（やまぼうし）

和食料理やまぼうしのわっぱめし
メニューの豊富さがあって驚いた
従業員のみなさんが優しく対応してくださった
釜めしやのどぐろ、ウナギなどのメニューもあったが、少しお値段が高めのメニューは食べず、次回はお湯を多くとるお風呂の湧き出しが心を浄化してくれるように感じた



おやつ

水引菓子類のパンダ焼き
もちもちした生地と中の餡がおいしかった
様々な味があって選ぶのが楽しかった
店員さんが優しく丁寧に接客してくださった



弥彦公園

景色色が綺麗で、幻想的だった
ほかの場所と比べると静かな雰囲気が漂っていた
思ったより広く、歩いて回るのに時間がかかった
秋は紅葉、春は桜の名所でもあるらしいので、違う季節にも訪れてみたい

弥彦競輪場

時間がなく、競輪場内まで入ることはできなかった
ので、次訪れるときは中に入りつくりと観光したい
弥彦駅からシャトルバスが出ていて、レースがあるときの賑わい具合を伺うことができた
想像していたより外観が綺麗

まとめ

- ・観光産業に力を入れているということがよくわかり取り組みがたくさんあった。
- ・弥彦村には初めて訪れたが、地域に人々の暮らしや、その土地の特色を感じることができてよかった。
- ・他の市区町村にも通じると思うが、弥彦村は弥彦村で特色を生かした産業を展開している、観光だけではわからない面も知れた。
- ・今回弥彦村に行ってみて、弥彦村の人々の生活環境や観光産業などを学ぶことができ、もっと弥彦村について知りたいと思った。

参考文献

- ・弥彦村ホームページ <https://www.vill.yahiko.niigata.jp/>
- ・弥彦観光協会 やひ恋 <https://www.e-yahiko.com/>



ミコぴよん

三条市

三条市

メンバー：南あかり, 上田真永, 中山緑亮, 柳沼侑里

データ

- 人口 91802人
- 高齢化率 33.9%
- 医療施設数 122施設
- 医師数 213人

サントロポータニョ2028
<https://www.city.sanjo.niigata.jp/eng/01.html>

地図

合地圖書門店
「三条市の合地図」
<https://j.gd/0366/>

医療課題

- 人口減少
- 高齢化率上昇
- 平均寿命と健康寿命の差が広がっている

産業の状況

- 金属加工業が盛ん
- 地場産業の影響で開業医も多い

第2016年

三条保健所へのインタビュー

- 医療機関で役割分担し、地域全体でひとつの病院となるようなかたちを目指す
- 管内では高齢者増加でがんが死因一位
- 三条市ではスーパーと協力しての減塩など健康改善の取り組みが行われている!

県央基幹病院

- かかりつけ医としての立場がある地域密着型病院に対し、高度治療可能な病院として地域医療を支える
- 救急医療の9割を県央で受け入れられるようになった
- 来年から研修医の受け入れも始まり、若手育成の側面も期待されている

新築中! 「県央地区医療圏」について
<https://www.keiyo-hospital.com/010001/01000101/>

どこに注目したか

- 金属加工業がどのように根付いているのか
- 歩行者・車の数
- 移動手段
- 町の人の年齢

当日買った鍋の包丁

- 燕三条地場産センター
- 能華亭

- 三条鍛冶道場
- 燕Wing

• その他町の様子

町の人に話を聞いて

- 移動手段は車・バイク・自転車が多い
- 消雪パイプがあるものの、雪によって立ち往生などの混乱が生じることもある
- かかりつけの地域密着型病院の利用が多く、手術などの治療を要するときに基幹病院や長岡の病院に行く
- 修行・就職を燕三条で行う県外の人も多い

実際に行ってみて

- 金属加工業を中心として発展している
- 地域密着型病院がかかりつけ医として重要な役割を果たしている
- 燕三条の背脂ラーメン

ご清聴ありがとうございました



エコちゃんサンちゃん

燕市

フィールドワーク in 燕市

小林碧、澤口玲七、高田恒七、中島大成

燕市の地図



基本情報

- ・人口 75931人
- ・面積 110.88km²
- ・65歳以上 31.2% 15歳未満 11.5%
- ・医療機関数 83

玉川堂



玉川堂～どんな所?～

- ・燕市の伝統工芸品、「鉋起銅器」を手がける工房
- ・銅板を叩いて彫り作り、磨きなどをする
- ・やかん、急須、タンブラーなどを製造し、販売も行っている
- ・創業208年にもなる、歴史ある所



玉川堂～どんな所?～

- ・系列店は12ヶ所に広がっている(家族として行っているところもある)
- ・人数：約20人
- ・若い人も少なくない(3割くらい)
- ・銅を叩く音だけが響き渡る、静かで麗かな雰囲気



<https://fritigate-karakusa.jp/visit/0005/>

玉川堂～鉋起銅器の作り方～

- ①形状加工
当てる金に合わせて銅板を叩き、様々な形を作る
- ②模様付け
金づちで叩いて模様を付ける(金づちにも模様がある)
- ③色付け
銅との化学反応により色を付ける
磨き具合によっても色が変わる



玉川堂～行って感じたこと～

- ・玉川堂の歴史ある銅器に触れ、その上品さを感じた。
- (目の前に置いてあったタンブラーで約4万円とかー)
- ・燕市の長い歴史を感じることができた。
- ・伝統工芸品を通じて様々な地域から人が集う、多くの人に燕市の魅力が伝えられている事が素晴らしいと思った。



燕市産業史料館

燕市の地場産業 ～金属洋食器～

新潟県は金属用食器の出荷額が全国1位
→その約9割が燕地域で製造されている

- 品質の高さが世界的にも評価されており、
- ・ノーベル賞授与式後の晩餐会
- ・東京オリンピックの選手村の食堂などに提供されている



金属洋食器の始まり

明治維新後、長く続く競争をきっかけに諸外国から洋食器の供給が日本に求められ、試作注文が燕に持ち込まれた事が始まり

長年、地場産業として長い間続いていた高度な金属加工産業をもとに、金属用食器の大量生産に成功した

都市部の洋風化が進むにつれて、国内需要が伸びていった。宮内庁や華族会館などへも納入されていた

金属洋食器産業の現在

現在 燕市の金属洋食器は、全国生産額の約95%を占め世界百数十カ国に輸出されている。

また、最近では、金属洋食器、金属ハルスウェアのほかに、優秀な金属加工の技術を生かし、プラスチック製品、自動車部品、ミニコン部品、金属雑貨、ゴルフクラブ、カーブミラー、農機具などの生産分野への進出が目立っている

現在での技術の活用例



鉋起銅器

- ・1764年ごろ仙台から伝わる
- ・弥彦山の麓の間瀬銅山が銅の供給源
- ・やかん、花瓶、茶器など
- ・時代が進むにつれ、日用品から工芸品へと変化



彫金や着色の技術

- ・工芸品としての発展に伴い、作品の美しさを重視した技術が進化
- ・美術工芸品として芸術性を高める創作が続いている



ご清聴ありがとうございました



田上町

医学入門 フィールドワーク 訪問先：田上町

医学部医学科一年
山口絵実里 長谷川修造
白石哲史 北川真章



田上町の基本情報

人口：10,618人(令和6年度) 学校：小学校2校、中学校1校、短期大学1校
医療機関数：3軒(内科系3,外科系1,精神科1)(歯科は5軒) 保健所：三条保健所が所管
医師数：4人 福祉施設：9軒
年齢構成：高齢者の割合38.7%(令和5年度) 公園：8箇所
コンビニ：6軒



田上町の産業、特産品、強みについて

産業人口
- 1次産業 8.3%
- 2次産業 39.9%
- 3次産業 51.9%

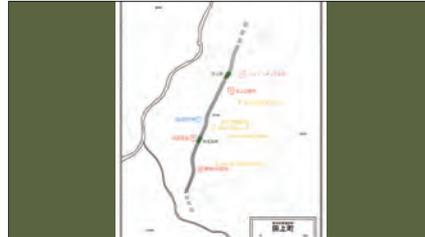
強み
・新潟市に車でアクセスしやすい
・温泉がありリラックスしやすい
・米や野菜、果物の生産が盛ん
・自然環境が豊かで景観が魅力的
・地域の住民の結びつきが強い

主な産業
農業および観光業

特産品
ブランド梅『越の梅』、加茂桐葉餅

グループのテーマ

- ・子育てのしやすさ
- ・高齢者の住みやすさ



田上町を歩いた感想

- ・坂道が多く、人とあまりすれ違わなかった上に移動手段は車だと思われる。多くの家が車を所有していて、移動の足として重宝しているようだ。
- ・また町内に医療機関が少ないため、医療機関に行くにはかなりの距離を移動しなければならぬそうであった。
- ・そのため、車の運転が難しい高齢者などは医療機関の受診が難しく感じた。



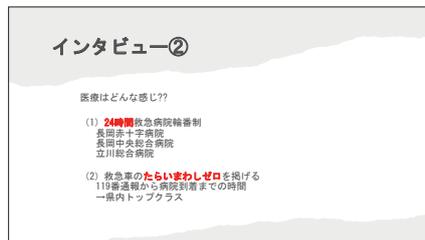
引用

- ・白地図専門店「田上町の白地図を無料ダウンロード」
<https://www.freemap.jp/item/FreeDPage.php?itemigata&sttagami> (最終閲覧日 2025年2月3日)
- ・Map-It 新潟県田上町の地図
<https://x.gd/u1eKR> (最終閲覧日 2025年2月3日)



田上レンジャー

長岡市



小千谷市



事前学習

- 小千谷市の基本情報
- 人口：3,471万人
- 市町村数：121 (令和2年10月1日現在)
- 面積：155,124㎢
- アクセス：新潟市まで車で約1時間
：長岡市まで車で約30分

事前学習

～主な産業と有名なもの～

- 鯉の養殖
- 片貝花火
- 小千谷縮(重要無形文化財)

インタビュー

Q. どうして「ホントカ。」というプロジェクトを始めたの？

地域の活力を取り戻すため！

そのためには…
人口減少/少子高齢化/出生率低下という問題を解決したい

→子ども医療費無償化
産婦さんの医療費補助の制限撤廃

Q. 豪雪地域特有の問題(救急搬送など)にどのように対応しているの？

- 消雪パイプの設置、除雪
- 除雪が追い付かないと通達が厳くなり渋滞になるなど人命に関わる一救急車ととも救助工作車、ポンプ車、指令車も出動！

ドクターヘリは？
天気が悪いと飛ばない！

小千谷の行き方

新潟駅 → 上越新幹線 → 長岡駅 (約20分) → JR上越線 → 小千谷駅 (約15分)

1時間かからない！！近



行ってみて分かったこと

- 町を歩いている人が少ない
- 車移動の方が多い
- ホントカは町の人に愛されている♡
- 信濃川の左岸地域が右岸地域より発達していた

参考文献

<https://hanabi.walkerplus.com/detail/4570008/>

<https://waknot.com/fashion/1022>

https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%NA%E3%83%AB:Emblem_of_Giyoa_Niigata.svg



柏崎市

柏崎市 フィールドワーク

メンバー：今川達登・西条史・富塚仁太・岡雪睿

柏崎市の基本情報

- 人口：81,526人（2020年国勢調査）
- 世帯：33,904世帯（2020年国勢調査）
- 面積：442.02平方キロメートル（2023年4月1日時点）

・2022年現在、新潟県内では6番目の人口を擁する。



テーマ：人と人とのつながりを感じる

柏崎市へのフィールドワークを通して、特産品や多くの人が訪れる場所についての理解を深めることは大前提ではあるが、その上で、実際に行ってみることでしか経験したり気づいたりすることが出来ないことについても、感じてみたいと考えた。そこで特に人とのつながりやそのふれあいの雰囲気などに意識を向けていきたいと思ひ、それをこのフィールドワークでのテーマとした



柏崎市全体（赤）
→柏崎駅周辺を回ったため、そこにフォーカス（水色）



フィールドワークの感想

実際に訪れた場所

- ・柏崎駅
- ・柏崎市役所
- ・柏崎市文化会館アルフォーレ
- ・ラーメン そばよし
- ・金砂山円光寺 閻魔堂
- ・松雲山荘



柏崎駅
・駅構内が緑豊かな
・駅前に図書館や
・アパレルのビル

柏崎市役所
・2021年に完成
・電気自動車の充電など設備も充実



昼食



閻魔堂

- ・市指定文化財であり、戦国期から旅人や浮浪者の宿に利用されていたという。



まちしるべ、えんまマップ

街歩きが楽しくなる工夫



松雲山荘

- ・松雲山荘（しょううんさんそう）は、大正15（1926）年以降、柏崎市東本町の奥池庭師二代の手によって造られた回遊式の日本庭園です。
- ・庭園は赤松やツツジ、モミジなど多数の樹木に覆われ、灯籠、尖塔橋、東屋、池などを配しています。



集合写真

- ・松雲山荘の紅葉は11月中旬が見頃
- ・柏崎の自然を感じることができた

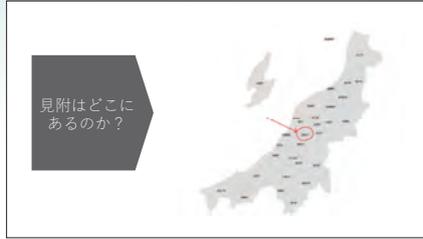
参考文献

- ・Googleマップ；最終閲覧2025.2.3.（月）
<https://www.google.co.jp/maps>
- ・白地図専門店；最終閲覧2025.2.3.（月）
<https://freemap.jp/itemFreeDIPage.php?b=niigata&s=kashiwa&aki>
- ・Map-It；最終閲覧2025.2.3（月）
<https://map-itazurewebsites.net/Map/%E6%96%B0%E6%9D%9F%E7%9C%8C-%E6%9F%8F%E5%B4%8E%E5%B8%82/highlight>



えちゴン

見附市



基本情報

- 人口約四万人(ゆるやかに減少中)
- 面積:77.96km²(県内で最も面積が小さい市)
- 市の東部に丘陵部
- 西部に平野が広がっている
- 人口十万人あたり診療所数53.52で平均よりかなり低い
- 人口十万人あたり病床数239.57(全国平均1164.02)
- 主な病院は見附市立病院

テーマ:見附市の様々な魅力を直接体験する！

見附市では「ネウボラみつけ」という子供支援が行われている。
市民の健康増進を目的とした「健康ポイント」を導入している。
年に一回みつけ健康フェスタが開かれている。
地域医療体制の充実のため診療所の誘致に取り組んでいる。

インタビューして分かったこと

- みつけの高齢化率は34%で20市の中で7位
- 一生涯高齢者を養育するため健康教室の開催一貫型に参加している人としていない人で10万円ほど医療費に差が出た。
- 補聴器や介護用品の助成、介護予防教室や健康カラオケなどを行う
- 一編聴覚で認知症予防課題は教室の男性の参加者が少ないこと

インタビューして分かったこと2

- 診療所の開設に補助金を出している(開業に600万)
- 一令和2年に1件、令和3年に3件開業
- 歩数や運動などによって「健康ポイント」を貯めると商品券や寄付として交換できる
- 一運動していなかった人の数が増えた！
- 一商品券で地域の活性化につながった
- 課題は若い人の参加をもっと増やすこと

インタビューして分かったこと3

- 地域内のコミュニティバスや乗合タクシー、コミュニティワゴンなどで外出支援
- 一30分に1本のペースでバスが通り、長岡まで行ける
- 健康フェスタでは食、運動、生きがい、検診の四本柱に基づいたブースを設置している
- 一今後のフェスタでは認知症予防や世代間交流もかねてワークショップのブースも設置してみたいと考えている

実際に見附市に行ってみて...

↓

見附市ならではの魅力を満喫することができました！！

主に訪れたところ

移動は、みつけコミュニティバスを利用しました♪

- 高野屋(ラーメン)
- みつけイングリッシュガーデン
- 道の駅 パティオにいがた
- きらく(焼肉)
- みつけ健康の湯 ほっとびあ



みつけイングリッシュガーデン

見附市の有名なものが入ったガチャガチャが印象的でした！

道の駅 パティオにいがた

- 見附市の特産品が多く販売されていました！
- おいしそうなのばかりでした！



みつけ健康の湯 ほっとびあ

ご清聴ありがとうございました！

参考文献

- <https://power-point-design.com/out-design/notes-for-a-powerpoint/>
- <https://www.freemap.jp/item/FreeDIPPage.php?u=mingata&u=mitake>



出雲崎町

医学入門フィールドワーク

出雲崎町
山口 空良 深井 絵緒
田中 京 伊藤 拓

出雲崎町の基本情報

人口：約3700人
医療機関：1つ
高齢化率：43.90%
(65歳以上・2020年)



産業・特産品

紙風船

- 国内で唯一の生産所
- 1919年に創業



出雲崎は紙風船を生産してきているが、全国展開しきれない日が限られたため、内銷として貯まった

石油産業

- 出雲崎町尼瀬生まれの新津恒吉が尼瀬で石油精製の事業を始める
- 蒸餾から輸入した石油留別の機械方式を用い、商業生産として成功した最初の町

新津恒吉

- 昭和シェル石油（現・出光興産）の前身の1つである新津石油の創業者、その成功ぶりから「昭和の石油王」と言われ新潟の財界に名を残す
- 晩年の恒吉は私財を投じ、新潟の社会インフラ整備に莫大な寄付をし新潟空港、新潟市公会堂（現・リョーとびあ）の建設また、新潟市の旭町に外国要人を迎えるための迎賓館「新津記念館」を建設した



食

出雲崎は県内有数の漁業の街

サザエの炊き込みご飯

出雲崎でも安定的な水揚げ量を誇る「ささえ」を使用した炊き込みご飯。
(2013年度産地グルメグランプリ・グランプリ受賞記念第1位、伝統系ご当地グルメ部門第1位の2冠達成)

浜焼き

出雲崎港で捕った新鮮な魚などを、昔ながらの炭火で一本一本焼き上げている



医療

長岡市、見附市、小千谷市とともに長岡地域定住自立圏を形成
長岡医師会に所属

- 平日夜間診療事業及び小児救急医療事業は長岡市さいわいプラザ長岡市幸町にあり、出雲崎から20Km車で40分程度
- 大きな病院で適切な医療を受けたい場合は長岡市まで行かなければならない
- 1件あった個人病院は今も継続されているのか確認できなかった

出雲崎町の強み



人口は減だが、手厚い子育て支援
4年連続転入超過



他世代交流機関「きらり」

全天候型の砂場や屋外遊具施設も充実し、保健師・助産師・保育士による子育て相談もある



「良寛記念館から見る日本海と佐渡」

新潟新橋100番一丁目

小木ノ城山

新潟県天然記念物

一山も海もあって穏やかな街一



テーマ

出雲崎の人々にとって良寛さんはどのような存在なのか

出雲崎出身昭和の石油王、新津恒吉が余分な財産は残さない事を告げ、地域社会のために私財を投じた事も関係があるのか

良寛さん関連の建物が町内の至る所にあるのは何故か



良寛さん

- すべての生きものに愛をそそぎ、老若男女、富貴貧賤を問わず優しく交流し、人としてどうあるべきかを常に問いかけた
- 生薬寺を持たず自らの質素な生活を示す事や、簡単な言葉によって一般市民に分かりやすく仏法を説く事によってさまざまな人の共感や信頼を得る
- 公明な人物からの素の依頼は断る傾向にあったが、子供たちから頼まれた時には喜んで書いた



行った場所

・越後出雲崎天領の里

佐渡を望む海岸線にそって造成された敷地面積21,000平方メートルの里を展示する施設。

『天領出雲崎時代館』『出雲崎石油記念館』、出雲崎と周辺の物産を販売する「物産センター」、旬の海の幸を楽しめる頂ける食卓『晴や』、野外で遊ぶ『日本海夕日公園』、観光スポット『夕嵐の橋』



天領出雲崎時代館、石油記念館

- 天領出雲崎時代館
江戸時代の栄華を再現
- 石油記念館

日本で初めて石油採掘に機械方式を用い成功をおさめた出雲崎の石油に関する資料等を展示



いずも屋

- あっさり生姜醤油ラーメン
- 長岡生姜醤油とは一味違う旨味満点、コクがありつつ、後味すっきりのおきの柔ない味



出雲崎町へ行ってみたい

良寛さんの教えが今も出雲崎の人々には守ろうとして、それを未来に受け継いでいこうとする姿勢が見られた

石油王の新津恒吉もその中の一人だと感じた

自然豊かで景色がきれいな場所が多く、ゆっくりした時間が流れていた



長岡駅

参考文献

- <https://www.town.iizumozaki.niigata.jp/>
- <https://niigata-kankou.or.jp/spot/7556>
- <https://the-niigata.jp/monodukuri/136/>
- <https://izumoya.hp.peraichi.com/ramen>



良寛さん

刈羽村



事前学習

刈羽村の基本情報
 人口：4,222人
 世帯数：1637 (令和6年12月31日現在)
 面積：26.27㎢
 アクセス：新潟市へは車で約70分
 柏崎市へは車で約20分

事前学習

企業
 ・ コメと砂丘を利用した緑の豊穡
 ・ 東電電力刈羽原子力発電所が立地

事前学習

医療

・ 全国に比べて高齢化が進んでいる
 ・ 出生率の低下、令和6年以降の児童数減少が見られる
 ・ 若い世代の離村現象が増加傾向にある

インタビュー

質問1: 支所の課題と総引合
支所会長の総引合
 ・ 村民の理解を得ることが重要
 ・ 人口規模 (約4300人) に基づいた柔軟な対応
認知機能が低い人への支援申請サポート
 ・ ケアマネージャーや役場職員が訪問対応
認知クリニックでの診察
 ・ 刈羽消化器内科クリニックの先生が対応

質問2: 少子化対策
既存の取り組み
 ・ 新生活応援奨励金の助成
 ・ チャイルドシート補助金
 ・ 妊婦訪問や新生児サポート
若い世代の現状
 ・ 若者世代の定住が難しい (進学後に村を離れる傾向)

インタビュー

質問3: 健康に関する取り組み
他地域連携の事例
 ・ 訪問対象を拡大し、健康増進の意識向上を図る
子育て世代への支援
 ・ 医療との連携を通じた健康支援
健康体操
 ・ 稲崎町との連携で健康祭を共有
 ・ 秋吉町では柏崎市 (柏崎総合高齢センター) へ依存

質問4: 交通・介護の現状
交通支援
 ・ 村内無料バスや通院費支援
 ・ 自家用車やタクシーの利用者も多い
介護施設
 ・ 既存施設の他、ケアハウスの新設予定

行ってみてわかったこと

村がコンパクト！
 ・ 総面積が26.27km² (TDL56倍分)
 ・ 施設が一部地域に集中
 ・ 車がなければ村内で生活しづらい
 ・ 生活に必要なものは村内だけで手に入る

行ってみてわかったこと

公共施設が豪華で綺麗！
 ・ 村民が公共施設に集まっていた
 ・ 図書館・体育館・ジムなどが充実
 ・ 毎日イベントや教室がある

刈羽村生涯学習センターラピカ

□刈羽村公民館
 学習室、アトリエ、サークル室、和室、調理学習室、陶芸工房、茶室
 □刈羽村文化ホール
 □刈羽村立図書館
 一般図書部、こども図書部、親子の読本コーナー、プラウジングコーナー、図書館学習室
 □刈羽村総合体育館
 アリーナ、水の広場、トレーニング室

刈羽村生涯学習センターラピカ

刈羽村の良さ

・ 住民に必要な施設がまとまっている
 ・ 周りの都市へのアクセスがしやすい (柏崎ICから15分 西山ICから10分)

課題

・ 公共交通機関が少ない→車がないと移動しづらい
 ・ 娯楽施設がない
 ・ 高校がない→一番近くても柏崎の高校 (通学に約70分)

①公共交通機関が少ない

解決策1: デマンドかきわの運行区域と運行日の増加

解決策2: タクシー券の配布
 解決策3: コミュニティバスの運行日の増加

②娯楽施設がない

解決策1: 小規模な娯楽施設の整備
 →ラピカのような公共施設でのイベントの開催

解決策2: 自然を活かしたアクティビティの提供
 →渚土運動公園でのウォーキングやスタンブラリーなど

解決策3: 複合商業施設に娯楽施設を導入する
 →PLANT-5のように住民が集中する施設に映画館なども導入

③高校がない

解決策1: 刈羽村立刈羽高等学校を設立する
 →現在は刈羽村立刈羽小学校、中学校があるので高校を作っても良いのではないかと

解決策2: 高校への通学用バスの運行
 →現在は柏崎市へのバス、電車ともに1〜2時間開通であるので使いたらい

解決策3: オンライン教育の活用
 →進学がしづらい場合でも教育を受けられる。ただ直接交流の場が減る可能性あり

③高校がない

かかる時間: 30分
 料金: ¥300
 期間: 60〜120分
 →天候で運行が止まる場合あり

参考文献

刈羽村 支所の村 かりわ



魚沼市



魚沼市 基本情報

人口	男性	女性	医療費
32,522人	15,960人	16,562人	13,168百万

魚沼市の人口は年々減っていて、30年間で1万人近く減少しています。



魚沼市 医療機関と医師

医療機関数	歯科
17個	11個

ほとんどが内科で、外科がある医院は整形外科を含め4件

医師数
36人

魚沼市 小出地区

① 駅周辺
② 学校
③ 魚沼IC周辺
④ 道の駅周辺

① 駅周辺

- 駅周辺はあまり発展していない
- 商店街は活気がなくシャッターが閉まっている店が多いが、④のスーパーまで行けない高齢者を支える大切な場である
- 医療施設、介護施設はこの地域に集中している
- 病院、市役所、警察署が国道の近くにありアクセスしやすい

② 学校

- 学校の周辺には住宅や田んぼが広がっている
- 医療機関は皮膚科のみ、介護施設は無い
- 買い物ができる場所が少なく、①の商店街が④のスーパーまで行く必要がある

③ 魚沼IC周辺

- 国道沿いに大きな店が集中しているその外側に住宅、田んぼが広がっている
- ICの近くに大きな公園、文化会館、子育て支援センターが併設されていてさまざまな活動が行われている
- この地域にも医療機関、介護施設は少ない

④ 道の駅周辺

- 小出で買物をするならこの地域
- 介護施設はあるが医療機関はない
- 道の駅では特産品が数多く販売され、併設されているレストランでは郷土料理を楽しむことが出来る

魚沼市の産業・強み

魚沼といえば**米**!!
魚沼は産地帯

ミネラルを多く含む電解水と産地特有の気候により米作りが盛ん

お米、切り葱、山菜などさまざまな産品を魚沼ブランドとして売り出している。魚沼市は首都圏の学生との体験交流も盛んであり、多くの人に魚沼の産業の素晴らしさを広めている。

魚沼市の産業・強み

魚沼市は「お米の産地」であるだけでなく、山菜、切り葱、山菜などさまざまな産品を魚沼ブランドとして売り出している。

まだまだあるからスキャンして欲しい

魚沼市の産業・強み

魚沼のコンビニや道の駅には魚沼の特産品であるお米や、お米を使った製品が多く並んでいました。魚沼の特産品を盛り込み、売ってみたいすることで、魚沼の魅力を広げることができた。少しでも行ってみたいと思った方は、ぜひお米体験などに行ってみてください。

4.注目して見てきたこと

住民の暮らしやすさ!!!

- ①アクセスの良さ
- ②生活の利便性
- ③子育て環境の充実性

4.注目して見てきたこと

①**アクセスの良さ**
バス停や駅は数とあるが本数が少ないため、生活には車がないと不便

例) 小出駅→小出病院 (バス)
8:30発、11:30発、16:10発 のみ

②**生活の利便性**
町の中心部には駅、病院、スーパー等が集結
大通り沿いに多くあるため車があれば買い物もしやすい

4.注目して見てきたこと

③**子育て環境の充実性**
魚沼市は子供が遊んで学ぶ施設が充実!

- 子育ての駅かたっくりに様々な室内遊びグッズやボールゲーム、異年齢の子と遊ぶ機会が広がる施設がある
- ボールゲーム専用室、絵画教室、おどりがみ教室、木工教室など**イベントも頻繁**に行われている
- 響きの森公園
1階は遊具、2階ターマに、様々なイベントや文化交流の場として整備されており、登山避難などの施設がある
- 小出駅文化センター併設しており、広々とした心地よいお米体験の場所だった。



出典

ふるさとチョイス <https://www.furusato-tax.jp/feature/detail/15210/9785>

魚沼市 地図 https://www.google.com/maps?imgres=1imgurl=https://www.city.suomagun.jp/uploaded/image/1428.jpg&fbclid=IwAR1F5UjL7y291FM&vet=1&imgrefurl=https://yandunternsinc.com/item/25782826.doc&docId=K9b_Nhcd980M&w=463&h=655&ig=1&hl=ja&source=sh/vi/m/ml/5&ggs=ac9956c13122882

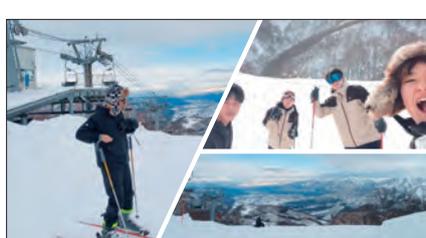
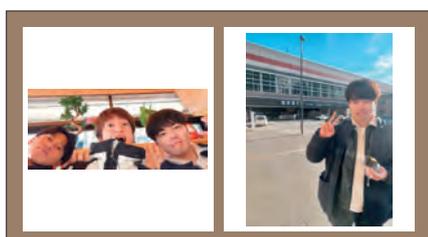
小出駅バス時刻表 <https://www.tetsuonsen.net/> 小出駅バス時刻表/

子育ての駅かたっくり <https://www.kosodatenoe.jp>

【魚沼の音】魚沼の音で楽しい夏6 <https://www.scfalus.com/?p=3679>



湯沢町



津南町



津南町の基本情報

津南町（つなまち）は、新潟県中魚沼郡に属する町。新潟県最南端の長野県境に位置している。中越地方の町で十日町郡市圏に含まれる。

石落としや苗場山を含めて苗場山麓ジオパークとして認定されている。また、水のふるさと『忍久の河津段丘と湧き出る名水の里』に選ばれている。

日本有数の豪雪地帯であり、特別豪雪地帯に指定されている。

出典：津南町 - Wikipedia

名所・観光

◎観光資源

- ・ひまわり畑
- ・ニュー・グリーンピア津南
- ・秋山邸
- ・山伏山森林公園
- ・温泉
- ・スキー場

「大地の芸術祭の里」「雪国観光圏」など認定都市と一体となった観光圏を形成している。

河津段丘も津南町のシンボルとなっている。

インタビューの内容

〇雪について
 閉ること…燃料の高騰…一度限りの観光資源
 高齢者中心の支店はニーズが同時多発
 公共交通機関の運休・運休
 家業を継承すること、高齢対策

活用方法→ 雪室施設(雪下に住み、高原野菜など)
 水の農場
 スキー場
 雪まつり!

〇医療について
 豪雪の際の緊急体制(平成13年の豪雪の時秋山邸が孤立
 →自衛隊が支援、関係開ける、保健師が集まるを巡回
 子育て支援→文庫センターがあり、保育・教育に力を入れている
 高齢者福祉→全国を先駆けて運動習慣をつけるキャンペーン、介護予防などを実施
 訪問診療・看護→津南町保健センター
 診療→月40~60人
 看護→月170~200人

・北部と南部が山地
 ・河津川と信濃川が流れている
 ・川沿いを中心に都市が発達
 ・津南町役場周辺に病院や学校(中学校・中等教育学校)が分布
 ・観光資源は分散
 ・山地にも集落が点在

・信濃川や河津川を中心とした河津段丘を中心に街が作られている
 ・段丘面は広く田畑に使われている
 →米どころ津南を生み出したのは信濃川!

青森部の断面図
 新潟県地理院土地情報部 <https://www.gis.go.jp/> (印刷2021.3.2)

津南町
 ↓
 川の展望台
 ↓
 津南町役場・商店街
 ↓
 まちなかオープンスペースだんだん
 ↓
 津南物産館・とんかつまり
 ↓
 しなの荘
 ↓
 なじよもん

イメージはこんな感じ・・・

夏の様子→
 冬(除雪された晴天時)の様子、
 秋の展望台↓

商店街

地元のスーパー、商店街の店、待合所、コンビニエンスストア

インタビュー

まちなかオープンスペースだんだん

中等教育学校の1年生
 テスト勉強をしている
 みんなで勉強をする時によく利用している

商店街の一角にあるリースペース
 学生も大人も利用している

昼食・物産館

移動中...

道で雪玉を飛ばし、飛びだけで雪だるま完成
 道路の歩道には無雪。道路脇の木の幹がツルツル(3分電バイク)が滑る

しなの荘

信濃川沿いにある温泉宿施設
 露天風呂の景色がとても綺麗だった

なじよもん

縄文土器、動物の剥製などが展示された施設
 道中はほぼ登山、帰るときには大雪

まとめ

津南町は観光資源(雪・食べ物・芸術・温泉・自然など)に恵まれている、
 かつ、人が優しく魅力がいっぱいのとてもいいところだった! が...

正直交通の便が悪い(特に積雪時)!

そのため、
 観光資源の集約化&生活と観光の両用タクシー
 による「生活と観光の融合」が有効ではないか



十日町

十日町市 **32班**

林悠誠 関塚大 吉水悠
山口菜瑛

訪問日 1/12

十日町の概要

- 人口
2020年時点で、49,820人
(2015年では54,917人で大幅に減少)
このうち高齢者の割合は39.90%
(全国平均は28.60%)

十日町の概要

- 面積 590.39平方キロメートル
- 2月の平均積雪深 210cm (新潟県平均23cm)
- 医療資源データ

2020年度	医師数 (1/10万人)	歯科数 (1/10万人)	病床数 (1/10万床)
新潟県平均	272	6.6	0.67
新潟県	223	5.8	0.27
十日町市	116	4	0.1

十日町マップ

① 自然との付き合い

A) 雪かき

- 屋根に積もった雪を落とすために屋上にのぼる
- 一屋上に行くためにはしごや階段が設置されている
- 屋上にのぼらず、さすまたと糸のこのようなアイテムを使って雪を落とす人もいる
- ※中には転落し半身不随になる人も...

B) 農業

- 十日町では夏に農業などの仕事でお金を稼いで、冬は雪かきなどをして雪と戦う(昔は東京などに出稼ぎに行く人もいた)
- へぎそばが有名
- 一海藻の布海苔(ふのり)をつなぎに使うことで生まれた

C) 家のつくり

- 雪の量がとても多く一回部分が雪で埋まることもある
- 一外に出ることができない
- 一二期に空間を設けることで外に出るることができるように!
- 一階段がコンクリート
- 一積雪で埋もれてしまうため頑丈なコンクリート造りに!

観点② 少子高齢化

少子高齢化が否めないのが十日町の現状

駅から少し歩いたところに募集の張り紙

お集りの商店街ではほとんど若者とすれ違ふのがお家の雪下ろしをする高齢の方をちらほら見かける

市民センターの中で何人かが勉強中
ミニキッチンやコピー機付きの静かな空間

今日は働く前から遊ぶ高校生みたいなこと
結果の大学へ進学し、そのままの土地で働く人が増加→若者が減少

新潟+関東圏の大学合格実績

商店街で塾を発見(10前後あるらしい)
教育環境はそれなりに整っている様子

松之山温泉入り口辺りに店が一軒

コンビニは少し遠く(水曜が定休日) 近くに他の店が見当たらなかったため、この辺りに住む方はここで日用品等いろいろ買うのかも知れない

温泉街より上の集落に住む方々

- 若者は減ってきている
- 公共交通手段が充実していない→車が必須不可欠 (免許更新に必要な認知機能テストの対策を習得しておられるとのこと)
- 緊急の際はドクターヘリがくる(最近増加している?)

③ 十日町市のイベント

A) 雪まつり

- 十日町駅周辺で開催
- 雪まつり発祥の地(昭和25年に地元住民が「雪を友とし、雪を楽しむ」をモットーに開催)
- 毎年2月中旬
- 雪量が多ければ、優秀作品は10万円、2万の賞金が出る

B) さいの神

- 年始にみんなで集まってお供え物と共に粟を燃やして無病息災を祈る
- 「(悪いものを)『さえ』ぎる神」から来ているとされる。寒い地域柄なので火を神聖視する傾向があり、これを燃やして煙として天におくるのだそう。
- 集落、地区ごとに行われる。
- 似たような祭りが新潟各地で行われている。

C) 婿投げ、炭塗り

- 松之山温泉で1/15に開催
- 前年に結婚した男性を、5mほどの崖の上からみんなで落とす。
- 落とし後は顔にB)で燃やした灰を顔に塗りつける。
- 昔、他の村に娘をとられた腹いせが由来。

松之山温泉入り口にて

参考文献

- 十日町市 | 十日町市の地図
<https://www.mapion.co.jp/gp/m/237.134608.136.794.1433.16ppa0724021>
- 医療資源
<https://www.city.tokichiro.jp/>
- 子育て
<https://chikamachi.tokichiro.jp/child/>
- 子育て支援
<https://www.city.tokichiro.jp/guide/childcare/welfare/welfare.html>
<https://www.city.tokichiro.jp/guide/childcare/welfare/welfare.html>
- 松之山温泉周辺
<https://www.city.tokichiro.jp/guide/childcare/welfare/welfare.html>
- まつり・祭り
<https://www.city.tokichiro.jp/guide/childcare/welfare/welfare.html>
- 子育て支援
<https://www.city.tokichiro.jp/guide/childcare/welfare/welfare.html>
- 子育て支援
<https://www.city.tokichiro.jp/guide/childcare/welfare/welfare.html>

参考文献

- 十日町地図
<https://www.city.tokichiro.jp/guide/childcare/welfare/welfare.html>
- A-0
<https://www.city.tokichiro.jp/guide/childcare/welfare/welfare.html>



ネージュ

上越市

フィールドワーク 上越班

田中優祐 中澤穂貴 山本晃雄 藤戸声

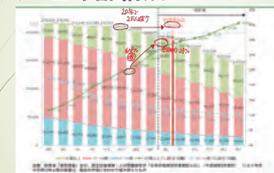
上越市について

面積 973.89㎢
人口密度 184人/㎢
人口 179036人



人口と年齢構成

・人口減少→4時間半に一人ずつ減っている
・少子高齢化



医療従事者数 (医師、歯科医師、薬剤師)

・医師の数は足りない
・医師の偏在指数はそこまで高くない

職種	人数	1000人あたり	偏在指数
医師	1,234	6.9	1.2
歯科医師	567	3.2	1.5
薬剤師	890	5.0	1.1

特産品

米

・上越産コシヒカリの栽培
・日本穀物検定協会 10年連続最上位の特Aを受賞



特産品

酒

・山から湧き出る天然の水資源を用いた高品質の酒
・上越産コシヒカリを原料とした日本酒
・岩の原産地で生産されるワイン



味噌 漬物



地図



高田の地図
本町商店街と高田公園が中心
城下町のような雰囲気がある
本町商店街はシャッター商店街
になりつつある
高田公園には学校が集中している

高田駅 ステンドグラス 高田の四季



雪での暮らし

・雁木



本町通り



高田城址公園 高田城



オーレンプラザ 上越市市民交流施設



こどもセンター 子育て支援



ありがとうございました！



参考文献

地図・空中写真閲覧サービス <https://maps.gsi.go.jp>
上越市ホームページ <https://www.city.utsunomiya.lg.jp/>
上越市社会福祉協議会 <https://www.jouchohshiyakyo.jp/access/>
コトバンク https://kotobank.jp/word/上越_530644



謙信くん



けんけん



兼続くん

糸魚川市



35班 糸魚川
木村遼介、小野蓮生、山崎航一朗、仁科奏音

糸魚川の基本情報

- ・総人口：約38000人
- ・医療機関数：23
- ・医師数：69人
- ・年齢構成：0~14歳→約4000人
15~39歳→約7,400人
40~64歳→約13000人
65歳以上→約25000人

遠足の目標

事前に調べたことやインタビューをもとに糸魚川の街の様子や公共交通機関の使いやすさなどを実際に行き調べる。

事前のインタビューで聞いたこと

- ・富山側の人々は富山の病院に通う人が多い。
- ・長野側との関わりはほぼない。
- ・緊急患者の8~9割は糸魚川でそれ以外は富山や上越の病院に行く。
- ・これから救急にオンライン診療を導入したい。
- ・新潟県は糸魚川総合病院に年間2.5億円支援している。
- ・医学生への奨学金制度で貸与期間の1.5倍糸魚川の病院で働くことを条件に学生機関に月額30万円もらえる。
- ・大雪で除雪間に合わない、救急車が細い道に入らなかったり、病院のスタッフが通勤できないため病院に泊まり込みしなくてはならない。

行ったところ

- ・糸魚川駅
- ・糸魚川駅ステーション ジオパル ヒスイ王国
- ・日本海展望台
- ・海鮮丼
- ・フォッサマグナミュージアム
- ・糸魚川駅北広場 キターレ

糸魚川駅

結構大きく、綺麗。お土産が充実しており、お洒落なところもたくさんあった。

日本海展望台

海と日本アルプスが見られる



海鮮丼 ととやのはなれ

とてもおいしかった。海の幸と山の幸を食べた。



フォッサマグナミュージアム

糸魚川を代表する鉱物「ヒスイ」などが見られる石の博物館。日本国内や世界の化石なども展示されていた。



糸魚川市駅北広場 キターレ

地域のふれあい施設
(地域の生産者やお客さんと一緒につくる糸魚川らしいカフェ)
糸魚川の災害の展示などもあった



施設の分布



糸魚川の産業、特産品

- ・鉱業：ヒスイ（2022年に新潟県の石に選定された。糸魚川では5500年前からヒスイを加工して交易をする文化があり、世界最古のヒスイ文化発祥地と呼ばれている。）、石灰石
- ・農業・漁業：米、ベニズワイガニ、アンコウ、南蛮エビなど（糸魚川は森林資源や水資源が豊富であり、上記以外にも野菜、果樹、大豆、地酒など、山の幸や海の幸が多い）
- ・製造業：セメント（石灰石資源を活かしている）
- ・観光業：フォッサマグナミュージアム、ヒスイ海岸、道の駅マリンドリーム能生（ベニズワイガニが食べられる）

行ってみて分かったこと

バスや電車などの本数が少なく、交通機関があまり充実していない印象であった。そのため、車を所持していない人はスーパーや病院への移動が困難なのではないかと感じた。また糸魚川駅の近くにあった「糸魚川市駅北広場 キターレ」という施設では、「つくる・つながる・はぐくむ」というコンセプトの元、地域住民が楽しく交流している様子が見られた。キターレには糸魚川市駅北大火の記録映像や展示物とともにコーナー、打ち合わせや子どもの遊び場等多目的に利用できるホール、お店を始めたい人のスタートアップとしての活用のほか、他県同士の一時利用ができるダイニングスペースなどがあり、地域住民の交流を活発にすると同時に、糸魚川の歴史や魅力を発信する取り組みが行われているように感じた。

糸魚川の自治体の良さ・課題・解決策

糸魚川市は、フォッサマグナの糸魚川一帯開拓路線上にあり、地質学的に非常に価値のある地域であり、特有の地層や鉱物を見ることができ、日本海・忍川・北アルプスと海・川・山があるため、豊富に高い食材を取ることが出来る。稲作・野菜・果物・大豆などの農業も盛んに行われている。実際に、糸魚川で食べたご飯はとてもおいしかった。糸魚川市の課題としては、高齢化が挙げられる。医療面では、市民の高齢化に伴う患者数の増加や、医師自体の高齢化も問題となっている。地域を活性化するには、若年層の人口を増やす必要がある。そのためには、豊富な食料を活かして、ふるさと納税などで財源を増やし、それを子育て支援などに充てることで、自然の中で子育てをしたいと考える若い人を呼び込むことができるかもしれない。



ジオまるとぬーな

フィールドワークを終えて

新潟市東区

2024.12.20



フィールドワークに行き、土地柄というものはその土地に足を踏み入れて初めて理解出来るものだと思えた。私たちの班は新潟県新潟市東区へフィールドワークに行った。事前の学習でこの土地には工場地帯や空港、港があり工業や流通が発展している土地であるということを知っていた。しかし、インターネットで調べた情報などの事前情報だけでは正直自分が今住んでいる中央区と大差ないだろうと考えていた。だが、東区の街を歩いていると、コンテナを積んだトラックがたくさん走っていたり、工場からたくさんの煙が出ている様子が見えたり、工場の臭いがしてきたりしてこの土地がどんな場所であるかが五感を用いて理解できた。将来、私がどのような形で医療に関わるかはまだはっきりと決められているわけではないが、医療と地域というものは切り離せないもので、中央区と東区でさえこんなにも違うことから、医療を提供する時にはその土地のことを理解することが第一歩であると考えた。この考えを忘れずに将来へ生かしていきたい。

このフィールドワークを行って学んだのは、思ったよりも身近な環境の違いが人々の健康や医療に影響を及ぼすということです。東区では（新潟県全般にも言えることですが）ラーメン屋が多く、また工場が多いようです。ラーメン屋が多いと生活習慣病のリスクが高まる、というのはある程度想定できるのですが、工場が多いと耳鼻科が増える、という事実は考えが及ばませんでした。こうした地域ごとの医学的な視点は機会が与えられないと考えることがあまりないと思うので、そうした気づきや知見を得られたのは大きな収穫だったと感じます。医師になったら、文字通り患者さんの衣食住、或いはそれ以上のことに目を向けた医療の提供を意識する必要があると痛感しました。また、私たちはスポーツセンターにも行きました。きっと若者がスポーツをしているだけだと決めつけていたのですが、実際は高齢者の方々が元気に卓球をしている様子を見ることができ、その方々はとても澆刺としているように思えました。健康に良いだけでなく、人との交流も生まれるため、スポーツは全人的医療的に良いものだと思います。健康に良い影響を与える公共施設の存在は、思ったよりも重要な役割を果たしているということが実感としてわかりました。

このフィールドワークで、自分たちは新潟市東区という普段生活している地域（西区、中央区）から比較的近い地域での実習だったため、街の雰囲気などはあまり変わらないだろうと予想していたが、実際に訪れてみると建物や土地の特徴に細かな違いをたくさん見つけることができとても勉強になった。住宅地の道路は規則的に作られているところが多く、瓦屋根の家が多く見られた。広い道路の近くには車関係の店が多く並んでおり、駐車場の広かかなりの数が埋まっていたことから、車が日常的に多く使われる街であることがわかった。病院とスポーツセンターの周りにはクリニックやジムなど健康に関連した施設が多くあり、退院後も患者の健康を街全体で支えていく医療を実践していると感じた。地域医療をする上でこのような街と人々の関係はとても重要だと思うので、今後も様々な街を訪れた際には視野を広く持って細かいところにも目を配り、その地域の特徴を理解できるようにしたいと思った。

東区は、健康増進のためにキャラクターを作ったり、医療施設を置いたり、工業地帯の環境問題削減に取り組んだり、空港では施設を盛り上げようとしたりと、より良い区にする努力を町から多く感じた。その様な自分の町に誇りを持ちより良い所にしようとする姿はとても良いなと思った。しかし、車がないと移動が不便などとまだ改善点があると思ったのでこれからの東区の変化を見ていくのが楽しみに思えた。また、地域の人とのコミュニケーションは普段話すことの無い人達との交流であり、貴重な経験だと思う。これは医師になって様々な人達とコミュニケーションを取る時に役立つと思った。さらに班員と色々話し合っただけでフィールドワークを行ったことは医師となってチーム医療を行うのに生かせそうだった。

新潟市江南区

2024.12.11



新潟市江南区でのフィールドワークを通して、地域の特徴や課題について多くのことを学びました。江南区は都市と農村が混ざり合った地域で、高齢者が多く暮らしている一方、医療へのアクセスが十分でない場所もあると感じました。特に高齢者の方は移動が難しいため、病院に通うことが大変で、日常生活でも困っていることが多いとわかりました。この経験から、医師として地域の人たちの生活や背景をしっかりと理解し、その人に合った医療を提供することが大切だと学びました。また、地域の方々と積極的にコミュニケーションを取り、病気の予防や健康づくりにも力を入れていきたいです。医師として、病気を治すだけでなく、地域全体の健康を支え、患者さん一人ひとりに寄り添う医療を実現したいと思います。

私は高校まで勉強にしか注力していなかったので、大学に入学後はコミュニケーションスキルがとても必要とされるのに驚きました。そんな中でのフィールドワークだったので、知らない人と行動を共にするいい練習だと思って挑みました。実際はたいして話せなかったのですが、こうやって経験を積み重ねてゆくゆくは誰とでもぺらぺらと話せるようになりたいと感じるいい機会になりました。来年度以降の行事も積極的に参加して、コミュニケーションスキルを身につけたいです。また、それ以前に私は毎日学校に行ったり朝起きることができていないので、対人関係のストレスを増やしすぎず、無事2年次が終わらせられるといいなと思います。

新潟県新潟市江南区に遠足に行き、自然や地域の暮らしに触れることでさまざまなことを感じ、学びました。例えば、広大な田園風景や豊かな自然環境を目にし、都市部とは異なる落ち着いた雰囲気を感じました。この経験は、医師としての将来にも活かせると感じました。例えば、地域医療の重要性を改めて実感しました。都市部とは異なり、地方では医療機関が限られていることが多く、地域住民にとって身近な医師の存在がより重要になると感じました。この遠足を通じて、医師としての視野を広げ、地域の人々の暮らしに寄り添う医療の在り方を考える貴重な機会となりました。

フィールドワークを通じて、地域の実状を直接知ることの重要性を学んだ。事前のインタビューでは見えなかった地域特有の課題や住民の生活を、現地での観察やインタビューを通じて具体的に理解することができたと感じる。例えば、過疎化が進む地域では、統計データだけでは分からない住民の声や、地域活性化に向けた努力を知ることができた。また、北方文化博物館を訪れ、地域の文化や歴史を実際に体験することで、その土地ならではの価値や課題の背景をより深く理解できた。さらに、地域の人々とのコミュニケーションを通じて、異なる視点や価値観を学ぶことができ、自分の考えを見直す機会にもなった。フィールドワークは、普段の学習では得られない実践的な知識や洞察を得る貴重な機会であり、今後の大学生活に活かしていきたい。

新潟市北区

2025.1.18



私が北区に初めて行ってみて感じたことは、とても自然豊かで暮らしやすい環境にあるなと思った。しかし少子高齢化が進んでいる中で、公共交通機関がバスがメインで本数もあまり多くないため、高齢者が移動するには少し大変なのではないのかなと思った。そのため、電車の本数やバスの本数を増やす工夫をするなどして、もっと、高齢者を考えてもいいのかなと思った。また、自分が将来医師になった時には、地域のこと考えられる医師になれるようここでの経験を活かして行きたいと思う。

私は県外の出身なので新潟県では新潟市の中央区と西区にしか行ったことがなく、広い新潟県についてもっと詳しく知りたいとかねてから思っていました。この実習を機会に特に馴染みのない新潟県の中なかでも北側の地域に行くことができ街の気候や雰囲気、人々の方言などにも触れることができとても良い経験になったと思います。将来、新潟で医師として働きたいと考えているので新潟のまちについて以前より詳しく知ることができ、将来の役に立つ実習だったと考えています。北区は平和な田舎ですが競馬場など活気にあふれた場所もありとても素敵な場所だなと思いました。冬も素敵な場所でしたが、また、夏など違う季節にも行ってみたいなと思いました。

まず印象に残ったのは実際に行ってみないとその土地の雰囲気や良さというものはしっかりとわからないということだった。また実際地元の人と話してみてその人の生活や背景について知ることが大事かもと実感した。例えば競馬場に行った時は老後の楽しみにしていたりそこでの他の人との会話を目的にきていたり想像と違っていた。

新潟市北区に行って感じたことは非常にリラックスできるような土地だということだ。フィールドワーク中、人とすれ違うようなことはほとんどなく、自分としてはこの地域に住んでみたいと思った。とはいえ人が全くいないわけではなく、フィールドワーク中に行った新潟せんべい王国や競馬場では人がいて、特に競馬場はたくさんの人たちがいた。その人たちの中には特に熱心に賭けをしている人も多く、それがストレスにつながっていくかもしれないと感じた。これが生活に大きな影響を与え、依存症などの問題に繋がるかもしれない。もし医師になり、このような症状の方が来たら、そういったところもケアしながら治療を進めていかなければならないと思った。

新潟市西蒲区

2025.1.8



私は新潟市西蒲区で生まれ育ったので、この土地のことは熟知していると思っていましたが、実際にフィールドワークに行ってみると、自分がこれまでに行ったことのない場所であったり、知らなかったことであつたりととてもたくさん学ぶことや体験することがあり、驚きました。地域の方々とお話ししてみると、地元の話が次から次へと出てきて「地元が好きなんだなあ」とつくづく思いました。医師になると、さまざまな場所から患者がいらっしゃって対応することになるとは思いますが、診療する前に地元の話であったり、ちょっとした世間話であったりと、そういったことから始めて、患者が話しやすい環境作りを徹底していけたらなと思います。

ほとんど初めての西蒲区で、郷土資料館に行ったが、お米に関する道具や資料が多くあつた。また、海苔作りのための道具や、ノゾキバコと呼ばれる一名「水眼鏡」または「眼鏡箱」と言われる木製の梯形（台形）で、底の部分に「ガラス」がはめ込まれているものがあつた。水面に浮かべて波の動きを遮ると、水中がよく見えるので牡蠣を採る時に用いられるらしい。これらのように、西蒲区ではお米や海に関する産業が盛んであつたことが伺えた。私が将来医師になった時、その勤務する場所の地理的情報をまずは学ぶことで、患者さんに多い病気や、訴えのパターンなどを把握しやすくなると思った。また、そのためにこれからも医療の知識だけでなく常識や時事的ニュースを身につけていこうと思った。

私は新潟市出身であるものの、西蒲区には数回しか行ったことがなく、フィールドワークの前までは西蒲区について知っていることがほとんどなかった。フィールドワークを行うことによって自分の出身地と同じ市内の区のことでも全然知らなかったし知ろうとしていなかったことに気付かされた。保健師の方々にインタビューをしたり、実際に西蒲区に行ったりすることで西蒲区についてまだまだ少しではあるが知ることができた。また、今回同じ班のメンバーのうち、2人が西蒲区出身だったので、その2人の話からも西蒲区について知ることができた。私は自身が働く地域について熟知するということは医師として必要不可欠であると考えてるので、今回のフィールドワークでの経験は地域を知る実践となったと感じている。

今回伺った場所は私の地元だったが、普段はあまり行かないような所に行くことができて楽しかった。飲食店の店員さんやお寺の住職の方と話してみて僕自身西蒲区に住んでいながら、人の暖かさを感じた。残念だったことは天候や時期の関係で西蒲区の自然の豊かさを感じられるスケジュールを組めなかったこと。可能であれば来年度からは9月や10月など、野外での行動が可能な時期から始めると良いと思う。新潟県は全体として自然の豊かさは魅力だと思う。西蒲区の課題としては、広いにもかかわらず、移動手段の少なさが問題としてあると思う。将来、もし西蒲区で医師として働くとしたら、フットワークが軽く、どんな所でも駆けつけられる気力が必須だと思った。

新潟市南区

2024.12.11



新潟市と言う大きな都市の中でも、人口の少ない南区においては、農業や畑作が盛んであり、それを支える高齢者たちのための整形外科などの下に需要があるということを知ることができた。南区には電車が走っておらず、バスはあるものの、数時間に1本しか通らない交通手段が非常に少なく不便と言う環境であるため、訪問医療等の患者が赴く必要のない医療を提供するべきだと感じた。私の地元では、訪問医療があまり盛んではなく、患者が病院に行く形式をとっているため、訪問医療の必要性について考える事はあまりなかったが、今回の南区でのフィールドワークを受けて、ホーム医療等の患者さんに負担をかけない医療がどれだけ重要なのかということを感じることができた。

新潟市南区にフィールドワークに行き、まず南区は都市部と比較して医療資源が限られており、高齢化が進んでいることを目の当たりにした。特に、交通手段が限られる高齢者にとって、通院の負担が大きいことを知り、医療アクセスの向上が課題であると感じた。この経験から、医師として地域のニーズに応じた医療を提供することの重要性を学んだ。例えば、在宅医療や遠隔診療の活用が、患者の負担軽減に寄与する可能性がある。また、地域住民との対話を重ねることで、健康維持や予防医療の啓発ができると考えた。将来は、地域医療に貢献できる医師として、患者一人ひとりに寄り添った医療を提供していきたい。

18年間新潟県と縁のない場所で暮らしてきたので、今回のフィールドワークを通して、新潟県をより身近に感じる機会を得られたように感じた。特に公共交通機関に制限があり、中心街（中央区）から20～30分車で離れた距離で、景色が一変するのは衝撃を受けた。「新潟」という県の多くの面を見られたのは貴重な体験だった。新潟大学に通う上で、その土地柄を理解することの重要性を感じられた。南区は農業地域であり、区の中でも田園地帯と畑や果樹園が両立していて、魅力のある街であると感じた。南区は南側に比べて北側の方が、川沿いよりも内陸部の方が発達しているように感じたので南区の歴史を調べることを意欲的に考えるようになった。

南区の全体的な雰囲気や特産品、文化などを身をもって感じる事ができた。こうした地域理解は新潟で今後働く自分にとっては患者さんとのコミュニケーションに役立つと考えられる。南区の問題として鉄道が通っておらず、バスの本数も少ないという交通の便の悪さであると感じた。車がないと生活できないというのは高齢者にとって住みにくいであろうし、更に過疎化や高齢化が進んでしまうのではないかと考えた。

また南区を調べていくうちに新潟全体としてやはり高齢化が深刻であることがわかった。私たちが医師として働いている2040年には65歳以上の方が約8割になることを考えると、地域の高齢者の方が生活上どういった問題点を抱えているのかなどの生活背景を今回身をもって学ぶことができたのはとても有意義であると感じた。

新潟市秋葉区

2024.12.18



自分はこの街に行ってみて人の少なさをひどく痛感した。またそれに準じて街がすごく寂しかった。駅前を通ってみても駅前通りなのに人も少なければほぼシャッターが閉まっている店が占めていた。この街に行ってみてこのまま何もしていかなければこの街がどうになってしまうのかと不安に思ってしまったし、しかもそれが非現実的ではないし、出身が新潟である以上他人事でもないことに気付かされた。今回の実習で学んだことはいままで何となくで生きて何も感じないでいたことが、いざ目の当たりにしたときに不安になってしまうことが実は身の回りにたくさんあることだ。大学生になっていままで以上に肩の荷が降りて生活をしている今でこそもっと周りのことに目を向けてみようと思った。ここで学んだことを、患者さんの些細な変化を見逃さないことや周りの従業員たちのことを気にしながら働くことに少しでも活かせたらいいなと思った。

秋葉区の外れの集落に少し足を踏み入れたのですが、近くのコンビニ、スーパー、病院からはかなり距離があり、雪も降っていて徒歩ではとても行くことができない距離でした。また、集落の中には人が住んでなさそうな家屋もあり、すれ違う村人の方は高齢者が多かったです。秋葉区は市内であるため、過疎化・高齢化は進んでいないと思っていましたが新潟の中心地である中央区から少し離れた秋葉区でこのような限界集落を目の当たりにし、驚きました。私は生まれ育った場所が都心で、交通の便が良いところであったため、少し歩けば、病院がありました。このような集落に住む方だと、車を運転できない限りなかなか通院もできないと思います。地域医療という言葉だけ学んで、地域の現実を見る機会がこれまでありませんでしたが、今回の実習を通して、特に高齢化・過疎化が進む集落の現状と課題を実感しました。

県外出身なので、新潟の地方の気風についてよく知らなかったのですが本フィールドワークにおいて十分感じられた気がします。道の起伏がやや激しいこと、冬場は新潟市内でも少し中央区から離れると雪が強く降ること、地方部には古びた空き家が多いこと、大型のホームセンターやスーパーが多いことなど田舎ならではの光景が見られました。ラーメンは体感太麺のお店が多く感じられます。人通りはかなり少なく、また関東圏よりも高齢者の割合が高いようで、街で見かけるのも高齢の方、もしくは小学生くらいのものでした。駅には貸し出し用の雪かきが常備され雪国の慣習を感じられました。卒業後の進路は明確に決まっていますが、地方の病院に勤務する場合には、患者さんの生活環境がどのようなものなのかを理解することに、本フィールドワークは役立つと考えます。

今回初めて秋葉区にいき、色々驚きました。新津は聞いたことある街でしたが行ったこと無かったので初めて新津駅を見た時大きいなと驚きました。遠足当日は中央区は雪が降ってなかったのに秋葉区はとても雪深かったのがびっくりしました。自然が多く、植物園に行きたかったのですが遠足日は休館日で行けなかったのが唯一悔いが残ります。今度行った時行ってみたいです。ラーメンを食べましたがやっぱり美味しかったです。石油が有名だったらしく、油田を見ることが出来ました。秋葉区では車がないとスーパーに行くのも不便という意見がありました。また病院も少なく、色々な面で交通の便がよくなかったのが医師になった時にどのように医療を届けるかを考えようと思いました。またより一層地域医療に貢献したいと思いました。

五泉市

2024.12.7



地域医療の立ち位置の解像度を上げることが出来ました。まずインタビューを通して地域の病院がその地域における医療の入り口の役割を担うものであり、その病院で完結するとは限らず、高度な医療が求められる場合は大学病院等の特定機能病院との連携を行いその地域に暮らす人々の健康を支えていることが分かりました。大学病院で難病などの症例にあたる事が出来る一方で地域の医療ではより患者さんを長いスパンで診ることができ、異なるやりがいを持って働くことが出来ると思いました。大学の講義で人格的な成熟の重要性が繰り返し説かれていますが、実際に地域の病院で働かれている先生も地域で働くにあたって特に人間性が大事であることを強調されていたのが印象的でした。インタビューや事前に調べた内容を踏まえて行ったフィールドワークでは本やネットで調べただけでは分からない町の空気を肌で感じる事ができフィールドワークの意義を実感することが出来ました。医師になってどのようなキャリアプランを形成するかを考えるにあたって今回のフィールドワークで得た地域医療の知見は大きな判断材料となると思います。

五泉市について今まであまり知らなかったのですが、フィールドワークは五泉市についてよく知るきっかけになりました。ラポルテ五泉という施設では、沢山の子供たちが遊んでおり、活気があるなと思い、この施設が五泉市に住む親世代を支える大切な場所だと感じました。また、何人か地域の人と話すタイミングがあり、五泉市の良いところを沢山お聞きしました。話した方全員がこの町が好きで、住み続けたいと思っていると分かり、私もフィールドワークを通じて五泉市のことが好きになりました。豊かな自然や水、美味しいご飯などがあるということを知り、他の人にも知ってもらい、より多くの人に訪れてもらいたいと思いました。

将来地域医療に携わる上で地域に寄り添った医師になるためには、その地域のことについてよく理解し、地域の人が大切にするものを共に大切にすることが重要であると感じました。

私は将来、臨床医になりたいと考えているが、病院で勤務していると、病院での治療後に自分の家に帰りたいという希望をされる患者さんに多く出会うことが予測される。このような患者さんに自宅で希望通り過ごしてもらうためには、新潟のように市区町村によって医療機関の数などに大きな違いがある地域では、患者さんの自宅がある地域の医療について理解して、必要な準備をすることが求められると考える。私たちは中央区にある新潟大学医学部という新潟の医療の中心地で勉強を続けていくので、新潟の他の地域の医療について知る機会がなかなかなかったように思えるので、ほんの一部であるとは思いますが、低学年のうちに地域について知ることができたのは良い経験だったと思う。

五泉市は移動するなかで、全然違う雰囲気のある場所がいくつもあると気づいた。事前インタビューで聞いた通り、新潟市との交通の便は結構よかったこともあり、以外と距離を感じなかった。住宅地も閑静で、住人のここで暮らしたいと考える気持ちがわかった気がした。将来どのような場所で医師として働くことになるかはわからないけれど、働く場所、患者さんの暮らす場所の様子を知ることは医師として働くうえで役に立ち、それを調べるといふことの経験を積めたことは大きいと思う。さらに、今回のように見知らぬ土地の様子への経験を増やすことを、新しい土地を訪ねたときの適応力に生かすことが出来れば、知らないから、で済ませずにどんな場所でもそれを踏まえての医療が提供できると思う。

阿賀野市

2024.12.7



今回の阿賀野市でのフィールドワークを通じて思ったことは、地域の医療へのアクセス環境の悪さである。はじめに、それを実感したのは計画段階である。阿賀野市がどのような場所か知るために観光地を調べ、そこにどうやって行くかを調べたところ、まず、新潟駅から阿賀野市に行く手段が限られており、2、3時間おきにしかならず電車やバスがない状況であった。阿賀野市内でも移動手段が市バスぐらいしかなく、それも2、3時間おき、また土休日は運行していない便もあり、立案にかなり難儀した。現地について、今回は天気も悪かったことからタクシーを多く利用したが道路が狭く感じた。こうしたことを踏まえると、こうした地域に住む人は医療機関、特にあがの市民病院のような基幹病院にアクセスするには自家用車を使う他なく、後期高齢者の方などは医療を受けるために苦労されるのではないかと強く思った。だからこそ、医療機関に連れて行ってくれる市バスや、訪問看護が医療インフラを支えるうえで極めて重要であるというように感じた。

訪問先は以前にも行ったことがあり、やや懐かしさを感じた。今回、地域を探究する視点で街を見てみると、新たな発見があった。まず第一に、阿賀野市は自然環境に恵まれている点である。田畑や木々、山などがすぐ近くにあり、自然に身近に触れることができる。訪問当日は雪が降り、外はかなりひんやりとした空気であったが、パワースポットとして知られる神社には続々と人が訪れた。また、白鳥が訪れることで有名な瓢湖には、餌をやる人やカメラを手にした人々も見られた。第二に、バスの本数が限られている点である。駅に到着した後、移動はほぼタクシーを利用した。高齢者の割合が市内に比べて多く、車を持たないと移動が難しいと感じた。事前に、あがの市民病院に勤務する医師へのインタビューで、訪問看護や訪問介護のニーズが増えるだろうと聞いてはいたが、その通りになるだろうと実感した。一方、車でアクセスは新潟市内からも良好で、道路も整備されており、車社会である新潟らしさを感じた。

医師になった時、患者さんが実際に暮らす町のことを知っておくことは、信頼関係を築く上で非常に重要だと感じた。例えば、仕事や住居の特徴、食事の内容、日々の困りごとなどは地域に根差したものである。地域の特性を理解しておくことで、患者さんの立場に立ったケアがしやすくなり、より具体的なイメージを持つ手助けになるだろう。

我々は水原駅周辺で散策を行いました。住宅が多い中、旦飯野神社や瓢湖のように生活の場に溶け込んで気軽に訪れることのできる場所が多く、交流の拠点となる場が多いと感じます。また、大型店に比べ自営業とみられるお店やローカルチェーンのお店の割合が多いこともあわせて考えれば、強いコミュニティを育てやすい環境であると結論できると考えます。また、ちょうど雪が降っており田畑や水辺には多くの白鳥や鴨がみられ、冬の訪れを豊かに感じることができました。ただ、水原駅周辺は住居が多い割に生活必需品を揃えることが難しいと感じます。タクシー運転手の方にもお話を伺いましたが、水原駅から買い物ができる場所までは少々距離があるとのことでした。

関西出身で新潟に縁もゆかりもない私にとって、新潟といえば豪雪地帯というイメージが強かったのだが、地域ごとに積雪量はかなり異なっている。実際、旭町キャンパスがある中央区では、今年雪が積もるということはあまりなかった。積雪量が多いのは新潟市以外の地域であり、医師数が不足しているのもこれらの場所である。

全国の医学部のキャンパスの場所を確認してみると、いわゆる田舎がほとんどであり、周りに田んぼしかなくコンビニやスーパーに行くのも一苦労という大学も少なくない。その点、新潟大学医学部は繁華街の近くにあり、新潟駅や万代にも徒歩圏内と交通の便も悪くない。立地的にはかなり恵まれているといっても良いだろう。

しかし、前述したように、医師数が不足しているのは新潟市以外の地域（私がフィールドワークを行った阿賀野市も当然含まれている。）であり、阿賀野市に行くとき自分が持っていた新潟の豪雪地帯の雪国というイメージと一致したのを覚えている。結論としては、今回のフィールドワークは、私達が学生生活を送っている新潟市が新潟県の中でも特例的な都会であることを再認識させるという意味において意義があったと思う。

阿賀町

2024.12.12



私は今回のフィールドワークで阿賀町に行きました。以前から七福温泉やたきがしら湿原などの観光名所について見聞きし、阿賀町に興味があったので、今回実際に街歩きをすることができて非常に楽しかったです。さらに、実際に道の駅「阿賀の里」や津川の街並みや商店街などを歩く中で、地域に住む方々の暮らしの様子や、町の雰囲気を感じることができ、とても勉強になりました。このように街歩きを通して阿賀町について多くのことを学ぶことができましたが、中でも勉強になったのが阿賀町の子育て支援についてです。今回の事前インタビューでお話を聞く中で、阿賀町では乳児検診や就学児検診、保育園の通学バス無償や様々な費用助成など、非常に沢山の子育て支援が行われていることを知りました。また、実際にフィールドワークで訪れた「阿賀の里」では、2024年6月にオープンした「あがりーな」という2階建ての遊び広場を見学しました。施設内にはデジタルすなばやジャングルジムなどもあり、とても広々としていました。このように、阿賀町には様々な観光地と子育ての手厚いサポートがあり、とても魅力的な街だと感じました。今後、今回学んだことを活かして、地域の医療サービスについても勉強したいと思いました。

フィールドワークに行って感じたことは、本当の地域を知ることができたなということです。私は田舎で育った身であり、これ以上辺鄙な場所はないだろうと思っていました。ところが、辺りには便利なスーパーやコンビニもなく、電車も2時間に1本という頻度でしか動いていません。（当然自動改札も使えません。）私は大学入学後は電車に頼って移動しているのですが、この環境では車を持っていなければ生活に支障をきたすレベルだな、と感じました。

その分自然豊かなスポットが多数存在しており、阿賀野川を遊覧船で観光できるライン下り、咲花温泉に加えて、中心地でもある津川の街並みには目を引かれるものがありました。

また、この体験は医師になってへき地医療を学ぶ観点として生かせると思いました。

今回訪れた地域は、医療過疎地域というには十分すぎる環境でした。地域枠として入学した身でもある私は将来的に新潟県のへき地での医療に貢献したいと思っています。

今回足を踏み入れたのは広い阿賀町の中でもほんの一部で、辺りにある山々の中にも当然人は暮らしていて、そういった人々がどのようにして不自由なく医療に触れることができるか。これこそがへき地医療の目的であると感じました。

今回のフィールドワークでは、再三医学入門の授業でも強調されていたコミュニケーションの重要性を再確認しました。スライドを制作する過程で、コミュニケーションがなされておらず、統一感のないものとなり結局作り直しになりました。各々が自由に作業することは当然簡単ですが、一つのものを数名で協力して作るといった作業は久しくやっていなかったので良い経験になりました。また、地域医療を考える上で、その土地で何が必要とされていたり、どんな医療が求められているのか、その土地を歩いて初めてわかるようなこともありました。こういったことを念頭において、行程やその後のプレゼン作りなどに取り組み、工夫すればより有意義な実習にできたと感じました。

よくテレビや新聞などで聞く過疎化と医師不足の実情について、実際に自分の目で見る良い機会となった。私の故郷も山間部の地域では同様の問題が議論されており、そういった意味では阿賀町の医療政策は現状機能しているのでロールモデルとして参考になる部分も多く感じた。また、町役場の方と関わる機会をこのフィールドワークで得られ、どういった方針でどういった政策を実施しているのかを実際に町の運営に携わっている方からお話を聞くことができたのは、自分の中で地方自治体の現状を見直すという意味で大きい経験ができました。フィールドワーク全体を通して、インターネットで公表されている情報以上のもの（阿賀町に住む人々の気持ちや阿賀町そのものの持つ文化的な意味）を体感でき、将来日本のこういった多くの自治体の再活性化の一助を担いたいと感じました。

佐渡市

2024.12.12



このフィールドワークから地域に実際に行き、街並みを見ること、気候や空気を感じることがその場所の印象を変えることを実感しました。私は佐渡市に行く前は佐渡市を自分とは関係の薄い「市」と捉えていました。しかし、実際に行くことで佐渡市への気持ちが変わりました。寒く雪が降っていたこともあり、外を歩いている方はいませんでしたが、バスに乗って街を見ること、住宅地を歩くことで地域の人々の暮らしの雰囲気を感じ取ることができました。また、バスと徒歩で移動することで車がないと移動が難しいことが理解できました。

行く前に地図やネットの情報で街について調べましたが、その時には有名スポットや離島であるが故の特徴に注目していました。市内の飲食店で地域の紹介をしているチラシを見ることは実際に行かないとできないこと、知ることができない佐渡市の魅力だと思います。このフィールドワークで佐渡市を知ることが佐渡市を知りたい気持ちが深まりました。この体験は将来医師になった時に役立つと思います。以前の講義で医師としてある地域で働く時には対象となる患者さんの生活を知ることが診断の手がかりとなることがあると学びました。画面に向かって調べるだけではなく、実際に地域を歩くことが地域の方の生活を知るには必要だと思うようになりました。また、地域を歩くことでその場所への親近感が増すと考えます。これの理由は私自身わかっていないのですが、場所を自分の目で見て移動することで知ることが画面越しで知ることより感覚の情報量が多いからだと思います。親近感のある地域で働くことは仕事への責任感に影響すると思うので、私は働く地域を知るためにも町に出ることを実践していきたいと思います。

今回のフィールドワークで初めて離島に行ったのですが、本土とあまり雰囲気は変わらないなと思いました。自然豊かで海産物もおいしく、班員のみならず協力してきちんと計画を立てて、行動することができ有意義な経験となりました。今回の体験を通して、自分が医師として働く地域の雰囲気を事前に知ることが非常に重要だと思いました。理由としては、場所ごとに地域性があり、そこに住む人々もまた地域によって違うため、その雰囲気に触れて医療を行うことでよりいい医療につながると考えたからです。とても良い体験をありがとうございました！

佐渡は、世界遺産に先日登録された佐渡金山をはじめとして、美味しい海の幸や朱鷺など様々な魅力があった。それらを案内したりPRするなどさまざまな形で支えている人がいるのだなと感じた。事前に調べたことによると佐渡は高齢化がかなり進んでいるとされていたが、実際にあまり若者は多くなく、それを実感した。医師となって、佐渡市のような観光資源はあるが、高齢化が進んでいるというような地域で働くこともあるかもしれない。このフィールドワークという経験は、そのような観光地としての町で暮らす人々の中に溶け込み、共に暮らしていきたいというときに、生きていくと思う。佐渡は小学校の頃一度行ったことがあったが、今回はこのように当時とは違う視点で楽しみ、学ぶことができたと思う。

自分は最初、佐渡と聞くと何か他の地域と異なる環境だと無意識に考えてしまっていた。しかし、インタビューをしたり実際に足を運んでみて、他の地域と差はないと感じた。また、今現在佐渡に住んでいる人は元々佐渡市で生まれ育った人が多く、他の地域から移住した人は体感だとあまり多くないように感じた。そのことから佐渡の魅力他地域に発信し、移住者を増やすことが課題であると感じた。佐渡の魅力を伝えるYouTubeなども発信にはいいのではないかなと思った。今回のフィールドワークで自分自身の視野が広がったような気がした。前は都会で働いた方が最先端の医学を学ぶことができ、自分の将来的にいい経験ができると思っていたが、佐渡のような医師が不足している地域で医療に携わることによって若いうちからたくさんの実践経験を積むことができ、活躍できると思った。今回は佐渡を回ってきたが、この六年間の学生生活の間に他のたくさんの地域に足を運ぶことによってより多くの考えが浮かび、視野が広がりそうだった。

佐渡市でのフィールドワークは非常に充実した経験でした。私自身、佐渡に行った経験がなかったので、美しい自然環境と豊かな文化に触れてとても充実した遠足でした。特に、佐渡金山や北沢浮遊選鉱場跡などの歴史的な遺産を見て、地域の人々の生活や文化に対する理解が深まりました。また、佐渡の美しい海岸や山々の風景を目の当たりにし、心が穏やかになりました。今回のフィールドワークは、学びだけでなく、リフレッシュの機会にもなり、非常に有意義な時間を過ごすことができました。新潟大学に入学した身として、新潟の医療の課題である地域医療について理解する責務があると思っています。そのため、今後もこのような体験を通じて、新潟の地域の魅力や医療をさらに深く理解していきたいと思っています。

村上市
2024.12.7



村上市でのフィールドワークは、私にとって非常に意義深い体験だった。自然豊かな環境や地域住民との触れ合いを通じて、医療の提供における人間関係の重要性を強く実感した。特に、地域の高齢者との会話を通じて、彼らが抱える健康上の悩みや生活の質に対する思いを聞くことができた。このような直接的なコミュニケーションは、医師として患者の背景を理解し、より適切な治療を提供するために不可欠だと感じた。また、地域医療の現状を知ること、医師としての役割が単なる治療者ではなく、地域の健康を支える存在であるべきだと再認識した。特に、村上市のような地方では、医療資源が限られている中で、地域住民が自らの健康を守るための知識や支援が求められている。これに対して、私は医師としての知識を生かし、地域の健康教育や予防医療に貢献できると思った。さらに、フィールドワークを通じて得た地域とのつながりや信頼関係の構築の重要性は、今後の医療活動にも大いに役立つと思う。患者との信頼関係を築くことで、より良い医療を提供できると思った。この体験を通して、私は医師としての責任を再認識し、地域社会に貢献する医療人を目指していきたいと思った。

きっかわさんに干してあった鮭は迫力満点だったし、土間ん中さんで聞いた話はとても興味深かった。特にお隣さんと外壁を共有してそのため建て替えるときはまずお隣さんの外壁を作るという話は、自分の周りでは想像できないことととても面白かった。このように、事前に調べていた以上にたくさんの魅力や文化が村上市にはあって、どここの場所にもきっとその場所の魅力があるんだろうなと感じた。医師になってからどここの地域で働くか決める際に、それぞれの地域に魅力がたくさんあるという前提で探すことで、今まででは気づけなかった魅力に気づけると思った。また、患者さんをはじめとする様々な人と関わる際に、その人のバックグラウンドにある出身地に対してリスペクトを持てるようになったと思う。

地元の前橋ではあまり雪は降らないが、降るときはパラパラな雪なので、村上市で降る雪は少し氷に近くて新鮮だった。そのため、積もりやすくてとても嬉しかった。村上市では、昔ながらの街並みが残っていて、伝統を感じられた。塩引き鮭が有名で、鮭が大量に吊るされている光景には圧倒された。地元の人の話によると鮭を乾燥させる際の開き方や吊り方にもこだわりがあって、とても勉強になった。また、そのこだわりに反している鮭の吊り方をしているところもあり、伝統はやはり薄れていくものだということも感じた。地元の人と話していて、人の良さや地元愛が伝わってきた。このような地元の人の感じや、駅を降りた時に感じる冷たい空気は現地に行かないと分からないことなので、実際に訪れることができるととても良かった。

今回のフィールドワークを行ったことで、実際に行くことでしか感じられない街の魅力を感じることができた。今の時代はインターネットを使えば、たいいてい情報を得ることができるが、そうではなく実際に現地に行くことで身をもって体感できるということが分かった。例えば、街のコミュニティーセンターを訪れたときには現地の方から地元の人しか知らないような歴史や名産品、観光スポットなどを教えていただいてさらに村上市について知ることができた。また、自分自身は村上市に行くのは今回のフィールドワークが初めてだったが、想像以上に楽しくて、いい思い出になった。行く前と後で村上市に対する印象が大きく変わった。特に村上牛と瀬波温泉がよく、また行ってみたいと思えた。

新発田市 2024.11.18



私は新潟出身ですが上越地方のため、中・下越地方についてはなんとなく名前を聞いたことがある程度の知識しかありませんでした。今回は新発田市でフィールドワークをおこないましたが、同じ県、同じ雪国として地元と似通った点も多く見受けられた一方で、街の作り、活気など違いも多く見られました。住民の方との交流では、医師不足ひいては人口減による活気の減少への不安の声も聞くことができました。新潟県内において新発田市は耳にすることも多いですが、そのような街の中心部でもこの問題があることが認識でき、新潟県における医師不足、人口減の問題の大きさを再認識しました。医師としてのキャリアを考えた時に新潟の地域医療に携わることは重要であると実感できました。今回は比較的大きな街の中心部を訪ねるのみで終わってしまいましたが、その他の場所にもぜひ行ってみたいと思います。

私は今回の遠足の行き先である新発田市には初めて行きました。私が今回行ったときの新発田の天気は曇りや雨で、典型的な新潟らしい天気でした。そのせいか、通行人の数は少なく思えました。今回は新発田病院や名物の新発田城、新発田市役所は勿論のこと、地元の寺社やインタビューの際にインタビュー相手の先生のおすすめのご飯屋さんにも行くことができました。新発田の街並みを見ていると、車が多く走っていたり、商店街ではシャッターが閉まっている店が多かったりしているのを見て、良くも悪くも地元の群馬、前橋を思い出しました。地元の前橋は18年間住んできて車さえあればとても住み良い街だなと思っていたので新発田市も同じように住みやすい街なのかと思い興味が湧きました。自分が将来、医師になって新発田で従事している未来もあるのかな、と少し思えるような経験になりました。

まず、私は県外出身なので、新潟ならではの特徴を多く感じる事ができた。一つの例として、車が主な交通手段であることが伺えるような街並みである。基本的に車道が広く、駅前や病院なども自動車のスペースが多く設けられていた。また、歩いている際に消雪パイプの点検が行われていた。これは新潟の雪国としての特徴が大きく表れていて、非常に面白かった。加えて、新発田市は新潟市とは異なる新発田市由来の特徴も多く街並みに現れていた。特に、ところどころに大きな水路があったり、街灯が和風に統一されていたりと、以前は城下町であったことが街の雰囲気として感じることができた。街歩きに加えて、松沢医院の院長や市民の方にインタビューをしたことで、新発田市の医療状況を学ぶことができた。歩きながら目に留まった病院やクリニックとして、新発田病院、耳鼻科2軒、婦人科、内科や小児科などがあった。しかし、この多くは駅前に分布しており、駅から離れていくにつれて少なくなる印象があった。松沢医院の先生もおっしゃっていたとおり、市内でも場所によって通院することが難しい地域もあることを肌で感じられた。市民の方によると、若い医師や内科が少ないと感じているようで、医療不足の感覚を持っている市民の方も実際にいるということが分かった。以上のような経験は、医師になってからどのような場所で働くにしても役に立つと感じた。新発田市は私の実家の市内とは、雰囲気や設備、医療面では医師の年齢、科の分布などが全く異なる。医師はこれらのような働く地域の背景を、住みながら、あるいは患者とコミュニケーションを行いながら理解することで、その地域にとって重要な医療の形を常に考えていく必要があるのだと感じた。

新潟出身ということもあり、このフィールドワーク以前にも新発田市には訪れたことがありましたが、新たな発見ばかりでした。事前調べや、インタビューもとても有意義であったと感じています。実際にその地域で医師をなさっている方のリアルな医療の話や、地域として盛り上げていこうとしていることを知ることができて、普段は知ることができなかったことを知ただけでなく、インターネットだけでは決して知ることのできないことをリアルな声として知ることができたのは大変ためになりました。また、新潟県の地域医療の一つとして、地域医療のリアルを知ることができて将来の進路を考える上でも有意義でした。実際にフィールドワークに行った時も、グループの仲間と仲を深められただけでなく、実際に訪れないとわからない街の雰囲気や街づくりを知ることができてとても良かったです。

関川村

2024.12.15



フィールドワークで偶然出会った集落支援員の宮島克己さんという方に、半日車で村の案内をしていただき、大変お世話になりました。事前の連絡も無く、初めてお会いしたにも関わらず、貴重なお時間を割いていただき関川村を案内してくださいました。雪道の中、車の運転をしていただき、徒歩では行くことを断念していた鷹の巣吊り橋や丸山大橋からは素敵な景色を見せていただきましたし、道の駅周辺では農村文化交流センターの～むや、せきかわ観光情報センターに～むで村の人とたくさんお話をすることができ、関川村の人々の優しさに触れ、貴重な体験をすることができました。宮島さん自身が活動に関わっている、子どもたちの居場所としての～むや、整備中の民泊す～むなど、パンフレットには載っていない、村の人々の集まりの場を見せていただき、一日という短い期間でのフィールドワークではありませんでしたが、宮島さんのおかげで関川村を深く知ることができました。宮島さんによる村興しのための取り組みや、関川村の人々を想う姿勢は、疾患だけでなく地域の人々の暮らしや人そのものを診る、医師としての姿勢に繋がると感じました。このフィールドワークを通して、新潟県のとある村の人々の日常に触れ、少子高齢化や医師不足の現状を知ることができました。少ない人口の中でも村の人同士が関わりあえるような場所作りをすることで村を支える人々の存在を目にしたり、村内の病院不足についても、新発田病院や坂町病院など隣市との連携や、新大病院に車で通っているという村の方のお話を聞くことができ、とてもためになりました。私自身地域枠学生として、地域の人々や暮らしを知り、地域の人とコミュニケーションを取って人脈や信頼を得ることとはこういうことかと納得した気持ちになりました。素敵なご縁があり、関川村で良い思い出を作ることができました。この経験を胸に、これからも医学部生として勉学に励み、人との関わりを大切にできる医師を目指したいと思いました。

このフィールドワークで感じたのは、関川村の人々の温かさです。当初の予定では、班員のみで徒歩圏内で行ける施設を回るはずでした。ただ、歴史とみちの館で知り合った、集落支援員の宮島さんという方が、初対面にも関わらず、車で送迎して下さり、遠方にある吊り橋など、寒い中自力では行くのが難しい場所にたくさん連れていただきました。他にも、昼食の途中で知り合った赤ちゃん連れの若いご夫婦には、子供たちと交流させていただいたり、渡辺邸にいらっしゃった女性には丁寧に案内していただきました。新潟市内の中心部よりも優しい方が多く感じました。医師として、このような方々が、医療を受けられないということがないようにしたいと思いました。

私はこのフィールドワークを通して、あまり人口が多くないとされる地域ではどのような工夫をして医療を成り立たせているのか、地域の方たちがどのような思いや葛藤を持って地域の為に活動しているのか、その地域の未来のことを考えてどのような取り組みを行っているのかを知ることが出来ました。今回の授業で実際に行って街を見たり話を聞いたりするまではどのように医療を成り立たせているのか検討もつかなかったのですが、今回行ってみて想像以上にこのような地域での医療は深刻な問題を抱えているのだと知りました。対応出来る診療科がとても少なく、近接する地域との医療連携は複雑で驚きました。医師になってからこの経験をどう活かそうかは正直分からず、要請があれば優先的にその地域へ赴くことくらいしか思いつきませんでした。これからの勉強でより医者に近づいた時にまた考え直そうと思います。

今回のフィールドワーク（関川村）に行き、関川村の方々の優しさに触れると同時に、新潟県内の過疎地域の生活実態について学ぶことができました。関川村は出生数が10を下回る少子高齢化の地域ですが、村民の健康や子育てを支援するための施設は整っており、村民の方々は不自由ない生活をしているように感じました。特に興味深かったのは、運動施設・入浴施設・道の駅が併設しており、また行く場所場所でそこに勤める方や利用する方々が顔見知りであることが多かったことです。関川村の男性と結婚し関川村に移住した女性に話を聞いても、村民の方々に親切心や子育て支援の充実について伺うことができました。コンパクトなモデルでありながら、地域における医療・福祉・教育の関連性について具体的に学ぶことができました。

胎内市

2025.1.15



胎内でのフィールドワークを通じて、自然環境と地域医療の関係について深く学ぶことができました。実際に現地を訪れることで、都市部とは異なる医療ニーズや課題を肌で感じることができ、特に高齢化が進む地域での医療提供の重要性を実感しました。一つの病院が地域の方々に信頼されていることもわかりました。さらに地域の医療体制の連携の大切さを改めて認識しました。実際に現場に足を運び、地域の実情を知ることは、机上の学びだけでは得られない貴重な経験であり、今後の医療に対する視野を広げる良い機会となりました。特に、実際に行くことでそこでの生活がどのように行われているか体験したり、そこの観光や美味しい食べ物を食べることで、1人では気づくことのできないたくさんの方々の魅力を知りました。雪の多さにもとても驚きました。当日は特に大雪の日で交通網の大変さも知りました。実際に足に運ぶことでしか知ることのできないことばかりでとても楽しかったです。これからも地域医療について考え、学びを深めていきたいです。

公共交通機関の利便性に欠けているということが最も印象に残りました。胎内市までの移動は電車での移動が可能でしたが、胎内市内の移動はバスの運行がなく、タクシーも台数が少ないため到着に何時間かかるかわからないと言われた程度でした。地域特有の乗り合いタクシーの制度もありますが、この乗り合いタクシーも予約制で前日までは電話での予約が必要とのことでした。中条駅に行ったあと中条中央病院に行きましたが、胎内市一帯の医療を担っている割には通院が大変だと感じました。また、私たちが胎内市を訪問した際には日中から大変雪が多く降り積もっており、消雪スプリンクラーの無い田んぼの道では住民の方が絶えず雪かきをしていました。医師としてただ病院に来る患者さんを診るだけではなく、通院の大変さなども考慮に入れ、訪問診療の重要性などにも着目していきたいと思いました。

行ったことのない地域を訪れ、その地域の方々と直接関わり、特産物を味わい、観光を楽しむことで、たった1日ではありましたが、その地域を持つ魅力とともに、抱えている課題を強く実感することができました。

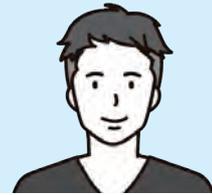
特に胎内市では、公共交通機関が限られており、高齢者を含めた住民の方々が病院へ通うことに大きな負担を感じているのではないかと考えさせられました。医療を必要とする人々にとって、交通手段の不便さがどれほど深刻な問題かを改めて認識しました。今回のフィールドワークを通じて、医師は単に病院内で患者さんを診察するだけではなく、地域全体を理解し、その実情を踏まえた医療を提供することが重要であると感じました。その地域の環境や暮らしを自分の目で見て、足を運ぶことで、患者さんの生活背景をより深く理解し、寄り添う医療を実践できる医師になれるのではないかと強く感じました。そのような医師となれるよう今回の経験を活かしていきたいと思います。

このフィールドワークで初めて同じになり喋った仲間たちと、いろいろ協力して計画し、そして実際に行くというのはこれからのチーム医療につながると感じました。

また、ひとえに地域医療といっても自分自身新潟市も地元もそこまで医療過疎地域ではなかったのでイメージが湧いていませんでしたが、胎内をじっさいに味わってみて、交通手段が不便だななど地域特有の不便さを身に染みてわかることができました。同時に田舎ならではのお土産や産業、そして街の人たちの優しさに触れることができ、将来医者としてさらに地域の人々に寄り添えるのではないかと感じました。

聖籠町

2024.12.4



今回私は聖籠町にフィールドワークへ行きました。聖籠町は新潟市と新発田市の間という地形にもかかわらずこれらの大きな都市とはかなり違い果樹園が広がる静かな町で、ある程度もともと調べていたとはいえ驚きました。具体的には三つの小学校と町で唯一の中学校を見て回ったほか海の方へ行ったり図書館や温泉にも訪れることができ充実したフィールドワークにすることができたと思います。今新潟県は地域の医師不足が日本の中で一番深刻な都道府県だとよく聞きますが、聖籠町の温泉で実際お話を伺ったところ、「小さい病院や聖籠町の一番大きな病院である新潟聖籠病院があり、また新発田市や新潟市も近いので車でこれらの大きな病院にも行くことができる」とおっしゃっていて病院の数自体には意外と町民の方は困ってないのでは無いかと驚きました。今回のお話を踏まえて、車で病院に行くのも時間のかかる地域ではかなり患者さんが大変なのだろうと感じました。今回のフィールドワークは同じ新潟県でも想像と実際行ってみるとでは雰囲気や景色が全く違うことを実感できた良い機会だったと思います。

フィールドワークを通して、実際に町で働く人々と話をすることで、地域住民の町への深い愛を感じると同時に、新潟県全体における生活の問題も浮かび上がってきました。聖籠町を歩くと、多くの工場と果樹園が立ち並んでいますが、スーパーやコンビニの数は多くはなく、徒歩で買い物に行くのは困難であるように感じました。実際に話を聞いてみると、乗用車は確かに生活必需品であるが、新発田市が近くにあるので、生活には困らないとのことでした。私は逆に、乗用車を持つことのできない学生などの若者や高齢者は、買い物にも容易に行けず、医療機関においても同じことがいえるだろうと考えました。このように公共交通機関があまり充実していないことは、通院や予防医療などの受診率の低下に繋がってしまうと感じます。これは聖籠町だけでなく、新潟県全体にも同じことが言えると思います。医療者は地域社会に暮らす人々に寄り添う姿勢が必要だと改めて認識しました。また、インタビューさせていただいた方は生活に困難はあまりなく、住民が皆温かく優しいところが良いところとおっしゃっていました。自身の所属する地域を愛することは非常に尊いことだなと感じることができました。

新潟県聖籠町への遠足では、自然の豊かさと地域の温かさを実感した。田園風景や日本海の美しい景色に癒され、地元の方々との交流を通じて、地域の歴史や工業の大切さを学んだ。この経験から、医師として地域医療の重要性を再認識し、患者に寄り添う姿勢を大切にしたいと感じた。また、自然が心身の健康に与える良い影響を実感し、将来は生活環境を考慮した医療を提供したい。聖籠町での学びを活かし、地域に貢献できる医師を目指す。

私は今回聖籠町へ行って感じたことは、まず町民の優しさです。聖籠町の温泉へ行った際、受付の順番待ちで順番を譲り合うなどの光景が見られて、自分の地元ではなかなか見られない光景だったので、町民の優しさを感じました。他にも図書館や屋内遊び場の整備の検討、0～2歳児の保育料を半額にするなど、子供にとっても住みやすい環境であると思いました。聖籠町は車がないと少し不便といった面もありますが、何よりも住みやすく、町民が優しいといった良い面のほうが大きいと思いました。また医師になった際には、今回のフィールドワークで得た、人だけでなくその人の住む街までも見るといった力を存分に発揮したいと思いました。患者さんの病気だけでなく、その人の住む街や生活状況までを見ることで患者さんを全人的に治療していきたいと思います。

弥彦村

2024.12.15



観光客も多いけれど、それぞれにあたたかく寄り添ってくれるような取り組みがたくさんされていて、とても楽しめる場所だと思いました。様々なお店や公園、神社などの施設がわかりやすく描かれている地図が駅前にあり、非常に良いものだと思いました。歩いて観光しやすいように看板などもあり、工夫がされているのがわかりました。また、一方で、道が狭かったり車での移動でないといけないところも多く、車で通院できない高齢の方には受診しにくく、また医療機関も少ないため、訪問診療や交通手段の整備などが必要なのではないかと思いました。地域診療を進めるためには、まずはどの人も気兼ねなく、すぐに受診できるような環境づくりが大切だと感じました。

弥彦村は以前行ったことがあり、今回回った場所も、大抵は記憶にある場所が多かったです。ですが、以前行った時は季節も一緒に歩く人も違い、新鮮な気持ちで改めて弥彦村を歩くことができました。また、以前とは違う見方で様々なものを見ることができました。弥彦神社などの観光地では、そこに集まる観光客の方々の様子を見ることができ、弥彦駅では、職員の方と地元の方々の繋がりを感ずることができました。特に駅での様子が印象深かったです。弥彦駅には電光掲示板やアナウンスがなかったため、駅員さんが口頭で発車時間などを伝えていたのですが、その度に地元の方々と笑顔で親しげに会話をしていたら良かったです。特定の制服を着ている人は、少し親しみにくい印象を与えるものですが、弥彦駅の駅員の方のように、笑顔で歩み寄る姿勢は、医師にも通ずる大切な姿勢だと感じました。

今回弥彦村に行ってみて、地域は様々なことが関わっており、協力し合って成り立っていることがわかった。また、弥彦村と聞いて、弥彦神社しか印象になかったが、実際に歩いて弥彦村をまた見るとたくさん魅力的な場所があるのだなと感じた。もっと時間をかけて弥彦村について知りたいと思った。それと同時に、他の地域についても知りたいと思った。今回のフィールドワークにて、それぞれの地域は様々なことが関わり、成り立っていることがわかったので、医者として地域でのつながりを大切にしたいと思った。今回病院などの医療機関はフィールドワークでは行かなかったが、これらも地域の一部であるので、地域でどのような役割を担っているのかを考えたいと思った。

これまでは無かったフィールドワークという学習の機会を私たちの代から恵んでくださり大変感謝します。このような機会をいただけると説明された時、行ったことある地域でも無い地域でも観光として訪れる際とは違う観点から観察し、調べたいと感じていました。実際に行ってみて予想通りであった部分もちろんありますが、地域そのものやその地域の医療を細かく見たことで学べた唯一無二の点もあって非常にいい経験になりました。具体的に言うと、どの産業が地域を支えているかという点です。弥彦村ではどのような産業を中心に展開して経済的にも盛り上がり的にも支えているかと言うと、私たちが考えたのは観光産業でした。彌彦神社や弥彦公園など自然を活かした産業が非常に大きな役割を担っていました。これは新潟県の多くの市区町村にも通じるのではないかと思います。

三条市

2024.12.22



フィールドワークを通じて、ふわっとした理解しかできていなかった新潟県への理解が深まった。特に、三条市といった新潟市以外の地域は、行くことも少ないため、こういった機会を大事にしたい。フィールドワーク中、現地の人と話すことがいくつかあった。それを通じて強く実感したのは、かかりつけ医といった地域医療の重要性である。一方で、大病院といったところでの手術も非常に重要であると感じた。そのため、今後医師になる上で、地域医療とそれ以外の医療との繋がりや両方の役割を学ぶことに注力していきたい。また、それぞれの地域にそれぞれの暮らしが存在し、医療も形を変えるため、柔軟に対応できるような医師になりたい。

三条市に行って思ったことはのどかでいい町だなと率直に思った。初めに燕三条地場産業復興センターに行った。ここでは、多くの金属工芸品があった。私自身あまり造形品に対する理解が深くなく、見ても何か感じることができただろうかと不安であったが、実際に見てみると機能美や造形美とはこういうことを言うのだろうと感じた。この後、ペーパーナイフ作りに行った。ここで実際に釘みたいなのを自分たちで叩きあげて、ペーパーナイフを作った。思った以上に器用なコントロールが必要であり、指導員の方に手伝ってもらってやっとできた。フィールドワーク実習がなければ、この体験をすることはなかったので、いい経験をすることができた。この体験を通して、やはり職人というものの重要性に気づけてよかったと思う。

三条市のフィールドワークを通じて、三条市独自の特徴や文化、そしてその中での努力を感じることができました。例えば、燕三条駅は新幹線の停車駅にしては少し寂しい印象を受けましたが、地域の象徴である刀鍛冶に関連した店舗やオブジェクトが並ぶ様子を見て、地域の特産や伝統を活かして観光や地域振興に力を入れていることを学びました。また、吹雪に遭遇したことも、三条市が新潟市とは異なる気候特性を持っていることを実感する貴重な体験でした。この気候の違いは地域住民の生活や医療にも影響を与えているのではないかと感じ、地域ごとの環境や気候に応じた医療提供の重要性を再認識しました。

医師としてこの体験を生かす場面を考えると、地域ごとの特色を理解し、そのニーズに応じた医療提供が求められることを実感しました。特に、気候や地理的要因が体調や病気にどのような影響を与えるかなどまで考慮すれば効果的な予防医療や地域医療ができると思いました。また、地域の文化や伝統に根差した話題を取り入れることで、地元の文化を大切にしている患者さんとの信頼関係を築くことができると感じました。

三条市でのフィールドワークでは、燕三条地場産センターへの訪問を通して、三条市の特産品や強みを知ることができました。金物が多く展示、販売されているところを見たり、地元の小学生が作ったパンフレットを見て、魅力を発見したりしました。三条鍛冶道場では、ペーパーナイフ作りを体験しました。金属の棒から徐々にナイフへと形を変えていく様子を、間近で見ると触れることができ、貴重な体験でした。私は将来、新潟の医師不足の地域で働くことになるので、その候補地として今回訪れた三条市を考えるようになりました。医師になって新潟県で働く際には、その地域についてよく理解していることが大切だと考えるので、今回三条市を知ることができて良かったです。

燕市
2024.12.12



高齢者が多いイメージがあったが、意外と子供たちもいて活気があるなと感じた。燕市は伝統と自然が共存している過ごしやすい街だと思った。伝統工芸を見学してみると、自分の想像よりも長い歴史を持ち、繁栄していた事にとっても驚いた。自分は燕市出身だが、今までで知らなかった事が思いのほか多くあった。地域への理解を深める事ができた事で、地域の人たちの特性なども感じ取る事ができたように感じる。その中で医師はかなり市民と距離感の近い存在なのではないかと感じた。患者さんと暮らす地域は切り離せないものであり、医療においては要因の一つになるものなのかなと思った。だから私が医師になった時も患者さんの私生活をしっかり視野に入れながら診療していきたい。

燕市は伝統的な地場産業が有名とは知っていたが、実際に話を聞いてみると他県から多くの職人が燕の産業に携わっていると知り、とても嬉しかった。自分は知らなかったが、燕市の産業を題材とした漫画が描かれていたり、全国的な知名度も上がってきているため、県外からも産業に関わってくれる人がいるそうだ。医療的な面に関して、燕だけでなく、新潟全域のよいところを他県の医学生や研修医にも知ってもらうことで、医師の偏在や地域医療のニーズに応えていけるのではないかと考えた。また、都会に比べると地域住民同士の結びつきがやはり強いように感じた。医師となった時には、地域での行事などに積極的に参加することで、よりその地域に寄り添った医師として活動できるのではないかと感じた。改めて、今回のフィールドワークで新潟の魅力を知ることができた。まだまだ行ったことのない地域もあるので、訪れて新潟を楽しんでいきたい。

このフィールドワークで、燕市の伝統的な工業や地域の様子について、実際にその場で過ごしてきた人やものから学ぶことが出来たのがよかったです。また、実際に歩いてみて、駅から遠ざかるにつれて人やお店が少なくなっていくのを見たり、市のコミュニティバスに乗って、スーパーで沢山の人が乗り降りするのを体感したりして、医師になったときにこのような日常を過ごしている人々に役立てるような人になりたいと思いました。

自分の育った市である燕市について学ぶことができた。実際に住んでいては見えなかった部分を、玉川堂、燕市産業資料館を訪れることで見る事ができた。燕市には鍮起銅器やステンレス製品、金属用食器などが有名でありそれらの製造工程や、オリンピックやノーベル賞授与の食事の際に使われた洋食器などの展示などを確認した。今回のフィールドワークでは燕市の良さを感じることができた。今後医師になり地域医療に従事していきたいと考えている身として、ある地域の良さを知ることはそこの地域の医療を担いたいと考える良い動機となると考えたので、これからも自分から積極的にさまざまな地域の良さを探究していきたいと感じた。

加茂市

2024.12.19



夏に花火を見に訪れたこともあり、懐かしい気持ちになりました。町の中を流れる加茂川はとても美しかったです。アーケード街は地元で馴染んだお店が多く、人々の生活が地域のなかで完結している感じがしました。実際に土地を訪れたことでこの地域の雰囲気や生活様式を知れ、その地域に最適な地域内外の医療体制を整えたり、地域の方々にうけいれてもらえるような働きかけや医師としての在り方、寄り添い方が分かりそうな気がしました。この地域の方々はどのような医療を求めているのか、行政機関だけでなく住民の方の声を聞いてみたいと感じました。都市部ではなく地域医療の病院の医師になった際、病院の診察室だけでなく日常の中でも地域の人々と関わりをもち地域に馴染むことができれば良いと思いました。

私は町を歩く人の数が悪天候な平日の昼間とはいえあまりにも少ないことが気になりました。何故なら、運動量の低下は心身両方の健康に悪影響を及ぼし得るからです。また、気軽に外へ出掛けられないような体の具合の住民も少なくないのではないかと疑問に感じました。一方で、新潟市内と比べ、圧倒的に病院やその看板の数が少なかったです。そのため、この先にはどんな地域であったとしても、どんな人であったとしても、気軽に出歩けるような町づくりや制度作りが社会体制として必要になるのではないかと感じました。また、医療従事者側も、出歩けなくなってしまった患者さんのケアを行えるような治療体制だけでなく、そうなってしまった高齢者をいち早く発見できるような社会的なセーフティネットの構築にも寄与しなくてはならないと思いました。

印象的だったのは、地域住民との直接的な対話を通じて、医療ニーズが地域の社会構造や生活様式と密接に関連していることを理解できた点です。加茂市は車社会なので運動不足の方が多いなどの特徴があるとわかりました。古くから残されてきた街並みや、中心市街地に隣接している豊かな自然など、行ってみて分かった感覚が多くあります。

また、フィールドワークを通じて、多様な視点から課題を捉える重要性も認識しました。加茂市に到着した時には雪が降っていました。車で移動する人々が多く、高齢者には市内を走るバスを利用している方もいました。将来、医師として働く際には、患者さんの症状だけでなく、その背景にある生活環境や地域特性も考慮に入れた医療を提供することが重要だと感じました。

この経験は、地域に根ざした医療の実践に向けて、貴重な第一歩となりました。医師になった際には、地域社会との協働を重視し、住民の健康増進に寄与できる医療者になりたいと思いました。

自分は新潟出身なのだが、その自分でも県外出身の人たちから自分が知らない、いい場所などを教えてもらったりする。加茂市でもそういったところがあると思うので、行く前にもっと調べることができればいいなと思った。また、加茂市は少子高齢化などの影響で医療状況がひどいものかと思っていたが、医師数など、確かに全国平均よりも下回っているものの、自分の予想以上に下回っていたわけではなかったのが驚いた。

田上町
2025.1.18



田上町はとても自然豊かでのどかな場所であった。新潟市よりも雪深く、自然と共生している感じがした。温泉に行ったが、施設はフリーマーケットなども行っていて、地域の人々の交流が行われていると感じた。新潟市のベッドタウンらしく、今回のフィールドワークでは住宅街を主に歩くことになった。私が将来医師になった時、その病院のある地域だけでなく、その周りの地域のことも調べるのが大切なのではないかと今回のフィールドワークを通して感じた。その病院にはこの場所からだけでなく、周りの地域からも多くの人々が来るのだから、その地域にも目を向けて、医療を考えていく必要があると感じた。そうすることで、人々に有益な医療を届けられるのではないかと感じた。

私は県外出身であるため、4月から新潟に住んでいるが、フィールドワークのグループ分けがされるまでは田上町というまちがあることすら知らなかった。しかし、実際に田上町でフィールドワークをしたことで、このまちに親しみを持つことができた。また、この地域が抱えていそうな課題についても考察できた。

行く前の下調べで、病院の数が少ないことは知っていたが、実際に行くことで道を歩いていても本当に見かけないということが実感できた。さらに、事前に地形図を見て坂が多そうだとは思っていたが、実際に歩いてみて傾斜の急な坂や曲がりくねった道が多いということが分かった。また、歩いていてもほとんど人とすれ違わなかったため、住んでいる人々の移動手段は車を中心なのだろうと考えた。

今回のフィールドワークで、田上町は車を持たない高齢者などが病院にかかること自体、難しい地域なのではないかと感じた。医師になった際、そのような地域に住む患者さんを診察する機会はいくらだろう。今回の体験は、そのような機会に患者さんの背景を考えるためのいい素材になったのではないかなと思う。

私の班のメンバーは全員が首都圏出身なので、医療過疎地域の街並みを見たり暮らしについて想像する機会を得られたのは非常に良い勉強になりました。全国平均から考えれば人口に対する医師の数が10倍いても良いところ、少数の医師および医療機関しか所在しないため、単純に医療資源が乏しいということのみならず、専門が十分に分化されていなかったり、災害などによって傷病者が多数発生した場合に対応が間に合わない危険性があるなど、いくつかのリスクがあるように感じました。私は将来臨床医として働くつもりなのですが、東京や千葉に帰って働くのか、あるいは新潟で働くのか、確定的なことは決めていません。どちらで働くにしても、働く場所の地域的課題について意識的であって、それに合わせた成長ができるようであれば優れた医師にはなれないと思います。このことについても考えながら、医学部での今後の5年間で充実した学びを得ていきたいと感じました。

住宅街が山の麓にあり、坂が多かったので車が必須な町だと感じた。

歩いている人がほとんどいなかった。

子育て支援に力を入れていると感じた。

長岡市
(長岡市方面)
2025.1.8



長岡市は雪が降り積もりながらも寒すぎることはなく、つんとした冷たく澄んだ空気が綺麗な街だった。新潟市の雪よりふわふわとしていて、山が近いめか風は強くなかった。街の人々はとても温かく、写真をお願いしたら快くとってくださり、フィールドワークで来ているというお勤めの場所を教えてくださいました。長岡市のことを嬉しそうに紹介して下さるみなさんの姿が印象的だった。歴史資料館では除雪車がなかった時代の除雪方法を知り、街中では実際の除雪車や除雪をする人々の様子を見ることができた。雪とともに生きてきた長岡の人々の生活を今と昔のどちらからも学ぶことができた。また、人にとっては厳しくとも、酒造りに適した雪国の気候を活かして室町時代から続く吉野川は長岡の冬があるからこそできあがるという。吉野川という長岡ならではの産業にも触れることができた。そして、長岡花火には空襲で亡くなられた方々への慰霊や復興に尽力された人々への感謝、恒久平和への願いが込められているという。中越地震では復興祈願にもなった程、長岡の人々が大切にしてきた長岡花火について知ることができた。今回のフィールドワークを通して長岡のことや長岡の人々を知ること、長岡の人々が大切にしてきたものを感じることができたことが最も大きな収穫であったと考える。地域の人々が今までどのように生きてきて、何を大切に、どのように生きていきたいのかを知ること、即ち住民の生活背景やスタイル、価値観を理解することが一人ひとりに対して最適な医療を提供することに繋がるのではないかと感じた。そして、そのためには実際の街や人の様子や歴史を知ることが何より大切であると学ぶことができた。これから地域医療に関わる際にはこのことを忘れずに生かしていきたい。

長岡市でフィールドワークを行い感じたことはまず一月ということもあり、雪がとても降っていて50センチほど積もっていた。私は東京出身ということもあり雪がここまで積もっている様子を見たことがなかったので驚いた。昼食にラーメンの店に行ってみると多くの人々が来ており、地元の人に愛されている店に行けてとても良い経験になった。吉野川酒ミュージアム醸蔵では多くの吉野川のお酒があり、どのように吉野川酒が作られ、さまざまな歴史を通じて作られてきたことを知ることができた。悠久山公園では長岡市郷土資料館があり長岡藩の歴史なども多く知ることができた。その後山本五十六資料館にも行き長岡にとってもゆかりのある人物を学ぶことができた。長岡には多くの資料館があり多くの人が支え合っている市なのだと気づいた。このような体験から患者さんとこの長岡という土地は強い結びつきがあるとおもった。このことから患者さんと関わる時にはその土地に住んでいる人特有の考えや悩みなどを聴いていく必要があると思った。この経験から患者さんの病気だけではなくルーツも知っていけるように生かしていきたいと思う。

フィールドワーク以前は、この地域について、漠然としたイメージや知識が頭の中にあるのみであったが、実際に訪れることでそれを肌で感じる事ができ、深い学びを得られた。その地域の様子やそこで日々を暮らす人々の営みを、現地に足を運ぶことで初めて自分自身の目で見ることができ、事前の学習ではわからなかったリアルな雰囲気を感じることができた。特に、地域の歴史や文化、生活環境に触れることで、単なる知識としてではなく、体験として深く理解することができたと感じる。この実習を通じて、今後、新潟大学で医学を学ぶ中で、県内の多くの病院や地域にお世話になる際には、そこで足を動かす時間を作り、その地域についての理解を深めたいという思いが強くなった。

フィールドワークで感じたことは、車の必要性です。新潟は土地自体が広く、自動車社会ということもあって、自家用車がないと住むのが大変ということが感じられました。また長岡市の人々の人当たりの良さを感じることが出来ました。移動でタクシーを使用した際に、ドライバーの方が観光地の紹介をしてくれたり、資料館の方が快く歓迎してくれたりしました。若者に長岡市のことをもっと知って欲しいという思いが伝わってきました。私も医師になったあと、勤務する病院の地元について深く知り、地域を盛り上げる力になりたいと思います。さらに、新潟県の食の美味しさを再確認することが出来ました。フィールドワークの報告会で、班で食べたものを共有した際に、ひとつも被るものがなかったので、食の幅広さも知ることが出来ました。

長岡市
(寺泊方面)
2024.12.8



私はこのフィールドワークを行って様々なことを学ぶことができました。まず、協調性の大切さである。今回のグループワークは何から何まで自分たちで決めたので、各々がなんのためにどうするべきかを考える必要があった。このことはチーム医療など、医療の現場においても重要になってくると思う。次に、地域の特異性である。長岡市に行ってみて、新潟市や地元には無いもの、考えられないものをいくつか見つけられた。このように地域ごとに様々な特色があることを知り、このことは、様々なバックグラウンドを持った患者さんがいるのだということを考えるうえで役立つと思った。最後に、自分の目で確かめることの大切さである。事前の調査で行く場所がどのような場所かはある程度分かっていたが、実際に見に行くことで新たに発見することも多々あった。少しずれているかもしれないが、このことは例えば在宅診療などを行うことで、患者さんがどのような環境で生活しているのかを目で見て確かめることで、何か発見できることがあるのかもしれない。

今まで思っていた以上に、生活する場所によって生活スタイルが異なることを感じました。このため、地域によって病気やケガをする原因が異なるのではないかと、またその地域特有の疾患があるのではないかと感じました。例えば、今回のフィールドワークで訪れた寺泊は海産物が有名なため、それに関する病気が流行るかもしれないと感じました。そのため、将来医師として働く際は自分が働く病院がある地域について知っておく必要があると感じました。加えて、フィールドワークでは公共交通機関を利用して移動しましたが、思っていたよりバスや電車の本数が少なく、自分で運転することができない高齢者などが病院に行きたい時に不便なのではと感じました。

寺泊でのフィールドワークを通じて、地域の歴史や文化、自然が地元の人々の生活ととても密接に関わり合っていると感じることができた。特に、寺泊では港町としての発展や漁業の伝統が生活に深く根付いていると感じた。また実際に赴いてみることで、地元の人だけでなく観光のために来る人が多くみられたので、寺泊は長岡市内でも観光地として重要な機能を果たしていると感じた。さらに、寺泊の海沿い（魚の市場どおり近辺）は寒い気候に負けじと、たくさんの人たちで賑わい、加えて地元の人々は優しく、親しみをもって接してくれたので、実際の雰囲気はとても明るい印象を受けた。一方で、この地域の課題として高齢化による漁業の担い手不足や人口減少、さらに医療提供の難しさ等を肌身で感じた。

この体験から、医師になって患者さんと関わる時にはその患者さんの文化的背景を知るとともに、住んでいる地域の歴史や文化、課題、制度、特徴的な価値観等を把握しておくことで、よりその地域の患者さんに寄り添った治療ができるのではないかと考える。また、寺泊地域は医療提供がとても難しい地域であるように感じたので、治療だけでなく、予防や健康促進を地域全体で上げていくことも大切であると感じる。

以上のように、このフィールドワークを通じて、地域の医療に根ざした医療の在り方について考える良い機会となった。このことを生かして、これからの自分の将来設計を考えていきたいと思う。

私達のグループは長岡地域に行き、長岡の中でも、端にある寺泊地域に行きました。私は新潟県出身なので、他の人達より県内のことについて理解しているつもりでしたが、たくさん新たな発見がありました。特に印象に残っていることは、やはり生活の不便さでした。私は小中高と長岡で生活してきましたが、どちらかといえば、市街地に近い場所でした。なので、特に生活に対して不便さを感じたことはほとんどありませんでした。一方、寺泊地域は周りを海と山に囲まれていて、買い物に行くことでさえも大変なことがわかりました。どうしても過疎地域よりも市街地や都会の方が病院の数が多いので、それに応じて勤務する医者の数も増えると思いますが、たとえ、市街地や都会の病院に勤務したとしても、過疎地域の現状、問題点、不便さを忘れず、常に意識して働きたいです。

小千谷市
2024.12.22



今回初めて小千谷に行かせて頂いた。初めに小千谷駅に着いて、駅から小千谷市全体を見た時はあまり市全体に活気がないように思えた。また、人が全く道を歩いておらず、ほとんど移動が車で非常に驚いた。班のみんなで市の中心に向かって歩いている時に突然あられが降ってきたり、突然止んだりするので小千谷市は天気不安定だと思った。フィールドワークのインタビューで教えていただいた「ホントカ。」を訪ねた。そこには、子供の遊び場や図書館、カフェが併設されており子供から大人までが多く利用していた。遊び場は子供が長い時間いても飽きないような工夫がされていたり、図書館は非常に綺麗で、勉強スペースがありおそらく全ての種類の本が置いてあると思う。私はあまり図書館に行ったことはないが、今回ホントカを訪ねて、そこでずっと本を読みたいという気持ちになった。本当に素晴らしい施設だと思った。小千谷市の子供から大人まで様々な世代が交流して欲しいという願いが込められているのだなと感じた。医師になったら、小千谷市が市民のために様々な工夫をしているように、私も患者のニーズに合わせて工夫し努力したいと思った。今回のフィールドワークはとても楽しかった。

小千谷駅を出てしばらく小千谷市を探索して、道端を歩く人が全くいないことに気づいた。しかし、文化複合施設「ホントカ。」の施設に行ってみるとさまざまな年齢層の方たちや家族連れ、学生が集まっていることが分かった。人口の少ない地域では文化複合施設「ホントカ。」のような市民の憩いの場となる複合施設と医療とを結びつけることで市民の健康を守ることにつながるのではないかと考えた。高齢者の多い地方では訪問医療など医師が患者のところまでいく医療が必要な場面はもちろんあるだろうが、それだけではなく、可能な限り市民がひとつの場所に集まりそこで医療を提供することで、市民同士の交流もはかることができるのではないかと感じた。

私は小千谷市へのフィールドワークに行って、やはり、人通りは少なく、車通りもそんなに多いわけではない道をよく見た。実際、少子高齢化が進んでいる中で、地域での医師不足は深刻な問題であることも分かった。だが、地域の自治体が若い世代の人々にとって魅力的な町を作ろうと、子供の医療費を無償化したり、産婦さんへの医療費補助の制限を撤廃したりする財政的な努力と「ホントカ。」という新しい建物を作り、毎週イベント等を行うなどの努力もしていることに興味を持った。これから医者になっていく上で、大学で学ぶ病気を治すための知識だけではなく、今回インタビューとフィールドワークによって学んだ地域の医師不足の問題や、地域の自治体がそれに対してどのような対応を取ろうとしているのかという知識は、地域医療の現場で役に立っていくととても感じた。

小千谷は新潟市よりはるかに雪が多いイメージだったのですが、私たちが行った12月半ばの時点ではほとんど雪が積もっておらず驚きました。まず、駅を出ると鯉を模したトンネルが目に入りました。街中を進んでいくにつれて街を上げて地元の産業を大切にしていることが伝わってきました。「ホントカ。」という9月に新しくオープンした小千谷市の図書館等複合施設を訪れました。小千谷市ひと・まち・文化共創拠点として作られた施設で共創拠点とはなんだろうと疑問に思っていたのですが、実際に訪れてみてとても市民にとってありがたい施設であるのではないかなと思いました。天気が良くなかったこともあり道を歩いてもほとんど人と出会わなかったのですが、「ホントカ。」にはたくさんの子ども、大人がいました。入ってすぐには子どもが体を動かして遊ぶことができる施設がありました。全体が木で作られていてとてもあたたかさを感じるなと思いました。外で遊ぶこともできない日でも子どもを十分に遊ばせることのできる施設があることは親にとってもありがたいのではないかなと思いました。図書館エリアには親子連れだけでなく、中高生もおり静かに勉強をすることのできる場所としても活用されていました。このように新しい設備ができて一方で、公園の設備の多くが使えない状況で置かれていることも気になりました。限られた資金をどのように使うかというのは難しいなと感じました。

柏崎市

2024.11.24



新潟駅から電車で少し行ったことで街の雰囲気が大きく変わるということを実感することが出来ました。今回の経験でそれぞれの土地によってその街の雰囲気や状況、そしてその街で当たり前のことなどが違うということを経験として知ることが出来たので、この経験を活かして医師として働く時にどういった土地に勤務するか、どういった環境で育った方かなどを考慮した上で診察に当たることが出来るように意識したいと感じました。また、フィールドワーク中に自分と周りの人達の様々な感じ方が違うことにも気が付きました。一人一人育つ環境が違えば考え方や感じ方、そして価値観も違うということを実感できたので、それを忘れずに医師として患者の方々に接していきたいと感じました。

今回のフィールドワークでは柏崎市を訪れるまでに、新潟県の中心地である新潟駅や長岡駅を経由しましたが、それらの駅に比べると町全体として人が少なく、駅前の商店街にも人通りが少ない印象を受けました。しかしながら、市役所や市民が利用することのできる文化会館などが近年建てられており、地域活性化、そして他地域から人を呼び込むための取り組みがなされていると感じました。また、駅近くの公園では豪華な紅葉が見られ、そこにカフェを併設することで、多くの方の交流の場が形成されていました。このフィールドワークを通じて、柏崎市は全体として落ち着いた雰囲気であり、心地よく過ごせる街だと感じました。この経験を通じて、地域の特徴を理解し、医師として患者さんの背景や文化圏の違いを考慮した医療を行えるようになる必要があると考えました。

柏崎でのフィールドワークを通じて、人と人との繋がりに触れることができたのが一番の学びである。新潟市のなかでは6番目に大きい市とはいえ、一般的な田舎という部類に入る柏崎市だが、だからこそ住民同士のつながりは濃く、コミュニティのなかでの人の優しさにたくさん気づくことができた。例えば松雲山荘という紅葉スポットを訪れた際には、ガイドさん自らが話しかけてくださり、歴史的背景をとてども丁寧に解説して下さった。この学びは、医師になった際にも、まわりの人との関わり方を考えるのにとてども役立ちそうだった。また、医師として以前に一人の人間として、自分を取り巻く環境に目を向ける大切さを学べたと思う。自分が普段身をおく環境に意味を見だし、良い点や課題点を見つけられることは重要な能力であり、今回テーマを伴った街歩きをしたことで、少しでも経験を積めたと感じる。今後の人生に役立てていきたい。

今回のフィールドワークでは、実際に現地の街並みや雰囲気を肌で感じる事ができた。地域の基本的な情報や特産品などはインターネットを使って簡単に調べることができるが、現地に行くことで初めてわかることが多くあると思った。私たちが行った柏崎市では、休日にもかかわらず駅前に人はほとんどいなかった。駅前の商店街はシャッターが閉まっていて建物は古びていた。将来医師となって診察をするとき、このような地域で育った患者さんの価値観と少なくとも6年間新潟市に住んでいた私たちの価値観にずれが生じてしまうことを防ぐためにも今回のフィールドワークは貴重な経験だと思った。今回感じたことを今後の実習などでも忘れないようにしていきたい。

見附市

2024.12.8



初めて訪れた土地でフィールドワークを行うと、その場所の独自の空気感や人々の暮らしが生き生きと伝わってきます。地図や文献で得られる情報とは異なり、現地での体験からは、土地の細やかな魅力や課題がより具体的に感じられます。例えば、自然環境の豊かさや街並みの歴史的背景を知ると同時に、現地の人々が直面する問題や日常の工夫にも気づかされました。また、地域の方々とのお話を通じて、文化や価値観の多様性を実感し、自分の視野が広がるのを感じました。フィールドワークは、現地のリアルな姿を知るだけでなく、異なる視点から物事を捉える力を養う機会でもあると感じました。この体験を通じ、現場の重要性を改めて実感しました。

私は見附市出身なのですが、改めて見附市の良さを認識することが出来ました。事前に調べていたよりも暮らしやすいように作られていると感じました。住んでいた時に気づいていた良さも住んでいた時に気づかなかった良さもありました。具体期にはほっぴあというスーパー銭湯に行ったのですが、すごく広くてとにかくすごかったです。あとは道の駅に行ったのですが、新潟県ならではの日本酒だったり美味しそうなスイーツが売っていて良かったです。今回行った道の駅やほっとぴあは見附市に住んでいながらも、初めて行ったのですがこんないいところあるのだなと思いました。今回の経験を通して、もしこのまま見附市に住むなら見附市の高齢者を支えているんだということを意識していきたいです。そして見附市以外のところで働くようなことになれば、その地域の特性を街を観光することで発見した上で働きたいと思いました。

このフィールドワークを行なって、見附市特有の気候や特産品に直接触れ、地域の魅力を肌で感じる事ができたと同時に、地方における医療や健康課題についても考える良い機会となりました。特に、冬の積雪や湿度の変化が住民の健康に与える影響、また高齢化が進む中での医療ニーズの変化を実感し、地域に根ざした医療の重要性を改めて認識することができました。例えば、慢性疾患の管理や介護との連携、災害時の医療対応など、都市部とは異なる課題に対する柔軟な対応力が求められると感じました。この経験を生かし、将来医師として地域の特性を理解しながら、一人ひとりに寄り添った医療を提供し、地域医療の充実に貢献していきたいと考えました。

今回のフィールドワークでは、事前に自治体の方とお話する機会があり、まずはそこで見附市の高齢化や医療問題に対する取り組みであったり、どんな特徴を持っているのかを知ってから現地に行くことができた。実際に見附市に行ってみて、まずは新潟市に比べてやはりどこへ行くにも車や公共交通機関が必須だと感じた。以前の医学入門でもあったように、このような地域では病院にくる人はもちろん、来ていないまたは来れない人への医療も重要になると感じた。また、インタビューでは、見附健康フェスタであったり、健幸ポイントであったり、様々な工夫をして、実際に効果を上げていることもわかった。医師になった時には、このような地域ごとに合わせた予防医療にも関わっていききたいと感じた。

出雲崎町 2024.12.21



出雲崎を歩いていて、木造の家が多いことが印象に残っている。また、良寛様の記念館があり、町の至る所に良寛様ゆかりの場所があり、観光に力を入れていることが分かった。

出雲崎には小さな商店や畑、田んぼ、漁港などがあり、それらを仕事にしている人が多いと考えたが、職場は少ないと感じたので、20代から50代の人々の多くは、長岡などの近い市に移動して仕事をしているのではないかと思った。また、小学校、中学校、高校はひとつずつあるが、ひとつしかないため、子供も他の市に通学している子も多いと考えた。しかし、電車やバスの本数が極端に少ないため、大変だと思う。また、フィールドワーク中にスーパー、コンビニをひとつも見かけなかったため、調べてみるとコンビニはひとつあったが、大きなスーパーはなかった。病院も、やっているのか分からないような小さな医院は見かけたが大きな病院はなかった。そのため、生活するには不便な場所だと感じた。出雲崎は海沿いの町で、木造の家も多く、とても雰囲気の良い場所だと感じたが、生活するには不便な場所だと感じた。隣が長岡市のため車があれば、生活に困ることはないのかもしれないが、車を運転できない高齢者はどのように生活を成り立たせているのか気になった。

医師になった時に、このような街で人々がどのように生活しているのかや不便さを体験することが出来たので、出雲崎のような不便な場所に住む人々をどのようにサポートしていくか考える際に役立つと思う。

出雲崎では、良寛さんの生き方や考え方が地域に根付いていることを感じた。地域ごとに大切にしている価値観が異なることを実感し、医療の在り方もそうした文化や考え方の影響を受けるのではないかと思った。また、医療の面では、大きな病院が長岡市まで行かないとないことが大きな課題だと感じた。出雲崎には病院が1つしかなく、高齢化が進む中で医療提供の負担はかなり大きいと考えられる。さらに、地形が山がちで傾斜がきついことも、移動の面で高齢者にとって大きな負担になる。そのような状況の中で、乗り合いタクシーの仕組みは、住民の生活を支える重要な取り組みだと感じた。将来、医師として地域医療に関わる際には、医療資源の限られた地域でどのように効率的に医療を提供するかを考える必要がある。患者の生活環境や地域ごとの課題を理解し、それに合わせた医療や支援を提供することが求められると学んだ。今回の出雲崎での経験を通じて、地域に根ざした医療の重要性を改めて実感した。

出雲崎のフィールドワークで、町内の歴史や魅力を知れただけでなく、その地域の医療体制の大変さをみにしみて感じることができた。実際に行かないと分からない、長岡から出雲崎への道の雪深さや、病院の少なさ、交通機関の無さを実感した。また、町内に高低差が多く、高齢者が移動するのが車なしでは大変だということも感じた。私が過ごしている新潟市の雰囲気とはまるで違く、このような地域で特に救急医療などを受けるのは大変だと気づくことができた。このような医療地域にも平等に医療が提供できるよう、積極的にリモート診療などの現代技術を取り入れてくれることの重要性について深く考えさせられた。また、私は群馬出身だが、新潟の方が医療が提供されづらいところが多いため、新潟に残りこのような医療の地域格差を是正する一助になりたいと感じるきっかけになった。

出雲崎町でのフィールドワークでは、道の駅「天領の里」を訪れ、地域の歴史や文化に触れる貴重な体験をしました。「天領の里」では、海に面した美しい景色や歴史的展示物を通じて、地域の暮らしや過去の営みを知ることができ、地域住民の生活背景を理解する一助となりました。このフィールドワークを通じて、医療を考える上で重要なのは、患者さんの背景にある地域や文化を理解する視点だと改めて感じました。地域医療の重要性を実感し、今後の学びに活かしていきたいと思います。

刈羽村
2024.12.8



今回のフィールドワークでは、刈羽村を訪問し、地域の生涯学習センター「ラピカ」などを見学する中で、この地域の特性や地域医療に関連する課題について考える機会を得ました。

「ラピカ」は、図書館や体育館、プールなどの複数の公共施設が一箇所に集約された複合施設であり、住民が学び、体を動かし、交流することのできる場として役割を果たしていると感じました。このような施設が地域の中心として機能することで、住民にとっての利便性を高め、地域全体のつながりを強化している点が印象的でした。

一方で、刈羽村では多くの自家用車が利用されており、公共交通機関が非常に限られていることを実感しました。高齢者や運転が難しい方にとって、医療機関へのアクセスが大きな課題となる可能性があると感じました。また、村内の医療施設として「かりわ消化器内科クリニック」を外から見学しましたが、大規模な医療機関は村内に存在しないため、専門的な治療が必要な場合には柏崎市や長岡市といった近隣都市の病院に通う必要があることも分かりました。特に車を使えない場合には、家族や地域の支援が不可欠であり、都市部に比べて医療を受けるまでのハードルが高いことが課題として感じました。

このフィールドワークを通じて、地域の医療環境だけでなくその自治体がどういう場所なのかということの理解を深めることができました。医療従事者として働く際には、地域住民が抱える課題に目を向けるためにもその地域について知ることの重要性を学びました。

刈羽村は小さな村で村民が日常的に使う施設（スーパー、図書館、診療所など）がコンパクトにまとまっている感じがした。しかし、村に唯一の診療所にも定休日があり、そうすると一番近い病院のある柏崎にまで出向かなくてはならない。柏崎に出向くには車で1時間程度かかるので高齢者の方々には負担が大きいと思う。それを軽減するためにタクシー券を配布するにしても村の財源に限りがあるためそれも最善案であるとは考えにくい。だから総合診療医の往診が必要になってくると感じた。また村のコンパクトさから往診はしやすいようにも思える。この経験を将来は医療資源の少ない地域に出向いたときに活かしたい。

今まで個人的に気になった地域に1人旅を何度かしていたが、今回行った場所は自分では行かないような場所だったので、自分の視野を広げるのに今回のフィールドワークはとても有効的だったと思う。地方の状況を知ること、医療の偏り具合をより具体的に知ることができた。また、グループで計画を立ててあちこち行くことで、みんなのやりたいことをうまく調整して形にしていく大切さを学んだ。医師になった際には、今回の経験からそれぞれの強みなどを活かして仕事をしていけるようにしたい。それに加えて、地方の地域医療に従事した際は、患者だけでなくその人の住む地域の状況にもフォーカスを当てて治療方針を考えられるようになりたいと思った。

今回の刈羽村でのフィールドワークを通じて、地域医療の重要性を肌で感じることができました。都市部とは異なり、地域では医療資源が限られており、医師が果たす役割が非常に広範であることを実感しました。特に、高齢化が進む中で、住民の健康を支えるためには、単に病気を診断・治療するだけでなく、生活全体を支援し、予防医療を推進することが求められていると強く感じました。

また、住民の方々との交流を通じて、信頼関係の構築が地域医療の根幹であることを学びました。地域に根差した医療を提供するためには、患者さん一人ひとりの背景を理解し、長期的な視点で寄り添う姿勢が不可欠です。

医師としてこの体験を活かすために、患者さんとのコミュニケーションを大切に、地域の人々の声に耳を傾けることを心がけたいと思います。さらに、地域医療の現場で必要とされる幅広い知識と柔軟な対応力を身につけ、地域に貢献できる医師を目指したいと感じました。このフィールドワークでの学びは、将来の医療活動の礎となる貴重な経験となりました。

魚沼市

2024.12.4



今回の行き先である魚沼市には訪れたことがあったが、その地域について知ろうという意識を持って訪れたのは今回が初めてだったため、新たに気づくことがたくさんあった。実際のところ魚沼市というと田舎のイメージが強かったが、訪れて店の並びや車通りなどを見てみて、自分の地元である長岡と似ていると感じ親近感が湧いた。今回はバスでの移動であったが、新潟市とは違いバスの本数が少なかったり、徒歩での移動も不可欠であったりと、車のない高齢の方が暮らすには大変なのだろうと感じた。病院が位置している場所は魚沼市の中でも比較的栄えた場所であったため、病院で勤務する際にはどうしても交通機関の少ない山間部のような場所は目に入らないかもしれないが、そのような地域のこととも考慮しながらその地域の医療に携わることが大切だと認識する良い機会となった。

私は自分の故郷をもう一度見つめ直したいと感じ、魚沼市へ行きました。高校まで18年間ずっと魚沼市で暮らしていたので、そこにある様々な施設や建物、住んでいる人々は当たり前存在でした。しかし、新潟市で生活するようになり、改めて魚沼市を見てみると魅力的なものがたくさん見えてきて、とてもいい場所であると感じました。文化会館に飾ってある地元の子どもの描いた絵や道の駅で売っている地元の特産品など、今まで当たり前すぎて気づかなかった地元の温かさを感じるとともに、環境が変わると視点も変わり今まで気が付かなかったものに気づくことができるという学びを得ました。将来医師となった時にも、今ある環境を当たり前と思わずに豊かな感性で物事を捉え、発見や気づきを持ち続けたいと思います。

魚沼市を訪れて、東京のような都市とは全く違う文化があるのだろうと感じました。東京では、便利なスーパーやコンビニがたくさんあり、常に人々で賑わっていますが、魚沼市では人通りが少なく、商業施設も少なかったです。そのため、地元の商店や直売所が大切にされている感じが感じられました。地域の人々は、自然とともに生活し、お互いに支え合っているように思いました。このような静かな地域での生活は、都市とは違った価値観や文化が育まれていると実感しました。医師として、こうした地域ごとの文化や生活習慣を理解し、適切な医療を提供することの大切さを学びました。

実際に行ってみることで、感じられたことが多くありました。街の雰囲気や実際に住んでいる人がどのような施設を利用したり、どのように移動しているのか、どのくらい家が建っていて、何をよりどころにして生活しているのかなどを観察して、感じることができました。新潟市内に比べるとやはり大きな病院の数は少なく、病院に行くまでに時間がかかるというのが現状であるということは行って確認することができました。自分が将来医師になった時はそのような場所で患者さんの病状だけでなく生活面も考えることができるような人が必要とされると思うので、学生のうちから意欲的に様々なことを学びたいと思いました。

南魚沼市

2025.1.8



今までずっと新潟市に住んでおり、市外を訪れる機会はほとんどありませんでした。しかし、今回初めて南魚沼市を訪れ、その土地の特徴や生活環境の違いを身をもって感じる事ができました。まず、南魚沼市では、新潟市では普通に使っていたSuicaが使えないことに驚きました。切符を改札ではなく駅員の方に見せるというシステムにも驚きました。駅員に切符を見せるという方法は新鮮で地域ごとの鉄道事情の違いを感じました。また、年明けで市内では見られないような量の雪が積もっていて、その雪の多さに改めて驚きました。新潟市でも雪は降りますが、南魚沼市のような山間部では積雪量が圧倒的に多く、生活や移動にどれほど影響を及ぼしているのかを肌で感じる事ができました。雪の影響で移動手段が限られる中、病院へのアクセス確保がどれだけ重要であるかを痛感しました。将来私がかもし山間部に積雪量の多い地域の病院に勤務することになった場合、地域の医療システムや住民の生活状況を十分に理解し、考慮する必要があると強く感じました。特に、病院までのアクセスが悪く、交通手段に困難を抱えている患者さんがいることを予想し、来院する回数の調整を行うことや、必要であれば市や地域の行政と連携して、より効率的で安全なアクセス手段の改善を検討することが大切だと思います。雪の影響を受ける地域では、病院に通うこと自体が一つの大きな困難となるため、その点を踏まえた医療サービスを提供することが求められると感じました。

今回のフィールドワークでは南魚沼市に行き、そこでその土地の良さを感じてきました。豪雪地帯と言われるのも納得するほどの雪の多さ。関東からきた班員の人は雪の多さに感動していましたが、実際にここに住む人からしたら日々の暮らしが大変なものであるのは間違いありません。雪のおかげで暮らしていている人も多くいるでしょうが、実際に住むとなると不便な点も多いだろうなと感じました。雪による怪我や事故も数多くあります。自分が医師としてこの土地で働くことになったら、この土地特有の怪我などを負った患者さんもみることになると思います。その時の自分が今回見て実際に感じた南魚沼市の特徴を、忘れることなく、それによって患者さんに寄り添えるようになっていきたいです。南魚沼市に限らず、自分が将来働く地域について無関心のままではなく、その地域についてよく知って患者さんと近い存在でいきたいです。

普段行かないような場所に行くことができ非常にいい体験ができました。町を見てみて、車がないと移動が厳しいような印象を受けました。雪がたくさん積もっていたため歩いての移動が厳しく、電車も本数が少ないため公共交通機関での移動も難しいと思います。高齢者が定期的に病院に通うためには、送迎サービスのようなものがないと厳しいのではないかと感じました。または、かかりつけ医のような人が身近にいるべきだと感じました。

他に感じたことは、雪の量がすごいということです。自分は神奈川出身で、大量の雪を見たことがなかったので、南魚沼に行った時の雪の量を見た時はびっくりしました。住んでいくには少し難しい環境かもしれませんが、その地域性が表れていていいなと思いました。

私は茨城県出身で、ほとんど雪を見ることなく育ってきました。地元で雪が積もったことはない記憶しています。そのため、南魚沼市のような、言わば豪雪地帯での生活に大変関心がありました。実際行ってみると雪が見たことないくらい積もっていたり、除雪車が通っていたり、積雪対策なのか線路上に温水が撒かれていたり、何もかもが自分にとって新鮮でした。さまざまな場所や人と会って南魚沼は素敵だなと思うと同時に、ここで生活するには医療の観点で見ると不便なことも多いのかなと感じました。積雪が邪魔して公共交通機関が機能しなかったり、道路の交通状況が悪かったりするため、患者も病院に行きづらくなりますし、医師の立場から見ても駆けつけづらい場面があるのかなと思います。この体験を通して私は、気候によって満足する医療が届けられないケースが存在するような場所に住む人がいて、その人々にどのような医療の形が最適なのかを考えるきっかけになりましたし、将来的にも自分のテーマの一つとして大事に考えていきたいと考えています。

湯沢町

2024.12.21



フィールドワークを通して、日本人とだけでなく、外国人とコミュニケーションをとれる能力の必要性を感じた。私は湯沢町でフィールドワークを行ったが、特に驚いたこととして、海外からの観光客が非常に多いことがあげられる。新潟県内でも人気なスキー場が多く、また温泉地であることから、冬季休暇を利用して訪れる海外の観光客が多かった。中でも、話し声などから推察すると中国や韓国からの観光客が多く、その大半が家族でツアーに参加する形態をとっているように感じられた。このように、湯沢町では冬季が1年でもっとも外国人観光客が多くなる時期と思われるが、観光客の大多数の目的がウィンタースポーツであることを考慮すると、同時にそこでの怪我や気候変動による体調不良で病院を受診する海外の患者さんも一気に増加すると考えられる。そしてこれは湯沢町に限られることではないと考えた。円安の影響で今後もさらに訪日外国人が増え、それにともない海外の患者さんが病院を受診する頻度も増加する。そのような際に、通常の医療を適切に提供できるよう、コミュニケーション能力が課題になると感じる。しかしフィールドワークを通して、日本人との会話はあっても、外国人との会話は一度もなかった。今後、医師として患者さんと接する場合、必ずしも日本人だけとは限らないため、外国人とふれあう機会を増やすことでコミュニケーション力をつけていきたいと感じた。今回のフィールドワークはそのための絶好の機会であったが、実践できなかったことが反省点である。コミュニケーションは言語学習のみで完結するものではなく、実際に相手とコンタクトをとって初めて成立すると思う。日常生活でより多くの人とコミュニケーションをとり、医療現場で実践できるようにしたい。

フィールドワークに行く前の湯沢町に対する私の印象は、新幹線を使えば新潟市からも首都圏からもアクセスがよく、スキー場があることで有名な町というものであった。この度、実際に湯沢町に行ってみて事前の印象通り観光客に向けたまちづくりがされていて、冬であったことからスキーをしに来ている人であふれていた。一方で、フィールドワークによってはじめて知ったことも多かった。越後湯沢駅前に足湯があるなどの温泉でも有名であることやガーラ湯沢駅がスキー場に非常に向かいやすい構造になっていること、自分が思っていたよりも医療機関が少ないこと、街中にはスキー場が近くで営業しているとは思えないほど雪が少ないなどの学びがあった。

湯沢町に行き行って感じたことは、湯沢町は可能性を秘めている町だなということである。冬の季節にあったということもあるが、駅や周辺、宿泊施設などは観光客、特に外国人観光客で賑わっているようにみえた。しかし、雪が溶けてなくなるシーズンになると、ウィンタースポーツを目的とする多くの観光客が来なくなってしまうので、あまり観光客は期待できない。だから、夏場に力をいれるよりは、冬場の観光客をより増やしたり一人一人が湯沢の町で使うお金が増えるように魅力的な町に発展させることで、湯沢の財源も増加して、湯沢に住む全ての人が住みやすい町づくりが実現すると思った。

フィールドワークに行くための事前準備をしているときは、正直どこに行ったらいいのか、何がその地域の魅力なのか分からなかった。でも実際にその地域へ行ってフィールドワークをして、それまで地図で見ていた場所を自分の目で見たり体験したりすることによって、町の雰囲気や良いところを知ることができた。加えて、自分が思っていたよりも、今回自分たちが行った湯沢町は時間距離で考えると近いことがわかった。百聞は一見にしかずというが、本当にその通りで、自分で実際に行ってみることで分かることが沢山あるなと思った。将来医師になったときには色々な地域の病院で働くことになると思うが、勝手にイメージや偏見を持つことはせず、地域の人と関わるなど、実体験を通して、その町を知っていくようにしたい。

津南町
2024.12.8



このフィールドワークを通して、津南町について理解が深まった。私は新潟県出身ではないので、フィールドワークに行く前はその地域を聞いたこともなかったが、フィールドワークに行くという機会を得られたので、その地域に実際に行ってその町を歩いてみることで、その地域の特徴や雰囲気を知ることができ、とても充実していた。また、私たちが津南町に行った時は大雪が降り、歩くのがとても大変だったが、それでもそこには多くの住民が生活していることを考えると、とても尊敬する気持ちになった。医師になってからは、私たちが行った津南町のように、病院から遠く医師不足の地域があることを忘れないことが大事だと、このフィールドワークを通して感じた。我々は医学部に通えるような環境で育ってきたけど、そうではない人もいっぱいいて、その人々こそ医療が必要かもしれないので、それを念頭に置きながらこれからの勉強を頑張っていきたいと思った。

私は今回のフィールドワークを通して自分にとっての普通は他人にとっての普通ではないことを再認識することができました。私は今回のフィールドワークで津南町に行ってきました。津南町では雪が降っていて街にはかなり雪が積もっていました。私は慣れない雪でテンションが上がりましたが毎日この環境で暮らす地域住民の方々は大変だろうなと感じました。しかし雪が多く降る地域だからこそ工夫も見つけることができました。道には凍結防止のスプリンクラーで水が撒かれていました。また地域の住民の方が雪かきをしていたり除雪車が雪かきしてくれたことで昼過ぎごろからは歩きやすくなった歩道が徐々に増えてきました。雪に慣れている地域の方々の対応の早さを感じました。スーパーなど街の中で見かける人の多くは高齢な方でした。これから先さらに高齢化が進んだら街で働き手が不足したり医療体制が不十分になってしまったりする可能性があるのではないかと感じました。医師になってからこのような地域で働くこともあると思います。その時にはその地域の特徴を知って自分にとっての普通を押し付けるのではなく、地域ならではの困りごとがあることを考慮して患者さんと接することができるようにしたいと考えます。

フィールドワークではスーパー（農協）やコワーキングスペースでの見学など生活を感じる場所と、観光客の訪れるような温泉や観光スポットの両方を訪問し、個人的には知っている場所であったので住民と観光客の間くらいの目線で「地域」を見ることができた。当日は大雪にもかかわらず関東圏のナンバーが多く、雪は貴重な観光資源であると言える一方で、バスや電車の遅延、実質的な道路の閉鎖など、生活の障害でもあることを実感した。今までは車で訪れたことしかなかったのが、公共交通手段を利用したことで、特に冬場は車がないとあらゆるものへのアクセスに困難が生じることを体感した。それでも美しい自然や美味しい食べ物、人々の生業など愛するものがそこにあると知り、そこで暮らしている人たちの存在と生活、その人たちが大切にしているものを見て触れて食べたことは、医師として患者さんの暮らしを尊重した医療を提供する上で貴重な学びであったと思う。

今回のフィールドワークでは津南町の自然を堪能するとともに、地域の方々の雪への対策や、雪の中での暮らし方について学ぶことができた。雪の中での暮らしは一般にマイナスと思われがちだが、町のあちこちに雪対策がされているだけでなく、雪を利用したものがあり、一般にマイナスな点と言われているものを利用しているように見えた。また、地域住民どうしの関わりも見られ、豪雪地帯ならではの繋がりが感じられた。医師になった際、逆境に立たされることや色々なことに悩まされることは多々あると思う。津南町の件を逆境と言うと言い過ぎかもしれないが、そういった状況をいかにして上手く利用できるのかということを常々考え、同じような状況の人と助け合いながら、打ち勝っていきたいと思う。

十日町市
2025.1.12



実家がほとんど雪が降らない地域なので、自分の背丈よりも積もっている雪と暮らす生活を想像することは難しく、だからこそういった趣旨の授業ではインターネットを利用して調べるのではなく実際に現地に行くことが非常に重要であると感じた。

今回向かった十日町はインフラがあまり整っていない中で少子高齢化の進む土地であり、特に温泉より進んだ辺りなどは明日からここで暮らしてみろと言われてたら正直戸惑うだろうという第一印象を受けた。しかし十日町で一日過ごした結果、自分の中での感じ方が少し変化したように思う。確かに今住んでいる新潟市内と比べればバスもあまり通っておらず日用品を買う店も少ないため客観的にみて不便ではある。だが集落に住む人々は自分たちの雪かきの技術を説明し、婿投げ・墨塗りといった土地特有のイベントを笑顔で語り、気候を生かした農産物のおいしさに誇りをもっておられた。集落での催事の最中に突然話しかけた私たちにも親切に対応してくださった。決して不便で毎日大変だという姿勢ではなかったことが非常に印象的で、これは事前の調べで無意識に不便な土地で暮らすのははかわりそうだという偏見を自分が抱いていたことによる感想であると気づいた。私は将来過疎化が進み病院に行くのが困難な地域に住む人を助けられる在宅診療医になりたいと思っているが、その土地がかわりそうだからではなく過疎化が進む中でなおその土地があたたかくて魅力的で、そんな土地に住む人々の手助けがしたいからという考え方がしっくりくるなと感じた。実際に行かなければ得られなかったこの感覚を大切にしたいと思う。

私はこの十日町のフィールドワークに行って、地域の人々の夏と冬の過ごし方、緊急の際の病院へのアクセス方法など地域の人々から多くのことを学ぶことが出来た。というのも、私たちが訪れた場所の方達は、夏にお金を稼ぎ、冬には厳しい雪と戦うらしい。そして緊急の事態が発生した場合は、病院が遠いのでドクターヘリを使うらしい。実習に今後行く際には今回学んだ知識も忘れずに、関わり方などを考えていこうと考えた。

十日町市に行く前にある程度調べて少子高齢化や豪雪地帯などは知っていたが、実際に地域を見て、その地域の人話を聞くとまた違った。改めて病院が少ないこと、バスが少ない、店が閉まっている、急病でも病院に間に合わない等、①実際に医療を含めたインフラが足りていないことの実感、ただ田舎というだけでなく、豪雪地帯で農作地帯であるという、「それぞれの地域の特色」が合わさって、②一般的な法則や経験が活かしづらいということの実感を得た。全人的医療の実現のために、その人の仕事や家庭環境、食生活を考えなければならないということを習っているが、今回のことを活かして、そこに『地域の特色』を考慮に入れて人々に貢献していきたいと思った。

医師として働くためには繋がりが非常に大事である。というのも、以前のEME実習であったり、医学入門の授業で患者と医師の関係について深く考えたことで、患者と医師の認識や感覚の差に大きな溝が生じていると感じた。その溝を埋める工夫がコミュニケーションそのもので繋がりとつながりというもののなごだ。繋がりのための相手の環境や考えに対する理解によって医療が非常に円滑に進められる一方でそれが欠けていけば強制された医療や人間味のない医療となってしまう。この実習では生活の形が人の数だけあることを知れた。わたしの訪れた十日町では新潟市内とも異なる生活を過ごしそして出身の神奈川県とは全く違う天気や人口を持ち合わせながら生活していた。積雪によって冬だけでなく夏でさえも雪に配慮したことをしなきゃいけない。夏にできるだけの米を生産し、お金を稼ぎ、冬は出稼ぎや家の中でできることをして稼ぐ。そうした人に例えば神奈川の都市に住んでいる人と同様の医療を提供しようとするのはアンプロフェッショナルであるだろう。その人を診ることを深く心がけようと思った貴重な体験になった。

上越市
2025.1.11



今回のフィールドワークではじめて上越市を訪れた。豪雪地帯ということで雁木など除雪対策が見られたまちだった。商店街を歩くとその町のあたたかさを感じられたが、現地の人とあまり交流できなかったのが少し残念だったと感じた。将来、どこで医師として働くかはまだ、深く考えていないが、患者さんと信頼関係を築いたり、地域の医療機関などと連携するためには、その土地や街のことについて知る、そして、自らがその町やその人の温かさを感じるということが重要だとも思った。さらに、その町について知るためには、インターネットなどでその町について調べるだけでは不十分であり、実際に自分自身が足を運んでその町の雰囲気を感じて体験的な経験が必要だと強く感じた。

私は今回、上越市にフィールドワークとして向かいました。私は上越市出身であり、故郷に戻るような形にはなりませんが、とても楽しく活動できたと思っています。市内の散策の時に、今まで何気なく通っていた道を意識して歩いてみると、様々な発見をすることができました。例えば高田のメインストリートにはヒートロードと呼ばれる、周りよりも少しだけ温度が高く、雪を溶かすことができる歩道が整備されていました。他にも飛び出し注意の標識であったり雁木通りなど、雪国である上越市での暮らしを快適にする工夫が各所に見られました。また地域の人々との交流を通して、私たちとの考え方の違いやその地域の特色などを知ることができて、とても良い経験になったなと思っています。

最初は上越市は特に楽しい場所や面白いものはないと思っていた。しかし、実際に行って見てその場所のいいところや面白いこと、楽しいことなどそのいい面をたくさん見れたのでいい実習になったと思う。また、事前学習で上越は人口が減少傾向であることがわかっていたので、それほど人に会えるとは思っていなかった。しかし、商店街やさまざまな場所に行って多くの人と出会えた。また、雪が多かったので歩いている人は少なかったが車はたくさん走っていて自分の予想を超えた活気があった。人口が減っていてもそこに住んでいる人たちは変わらず元気であることを再認識できたと思う。また、地域のコミュニティのつながりがとても強いと感じたのでそのつながりに上手いこと入れるように知識をつけていないと厳しいのではと感じた。

豪雪地帯での冬の暮らしを診るために1月にフィールドワークをしました。

新潟県の雪はとても湿っており、歩くことが難しいだろうと思っていました。ですが、商店街や駅の近くは雁木やロードヒーターがあり、地元の方が買い物や移動をしやすいように工夫されていました。

また、町家交流館高田小町を訪れた際は、雁木の写真展示がありました。地域の方が上越市の特徴を知り、その文化を学んでいるのだと知ることができました。

将来、医師として働くうえで、地域の構成年齢や多い病気などを把握することは大事だと考えます。そのためには、地域の特徴や地元の方と触れ合う機会を作ることが大切だと今回のフィールドワークを通して学びました。

妙高市

2024.12.7



妙高市の街は自分が思っているような医師が不足している地域を体現しているように思えた。車もそれなりに通っており、人もそれなりにいたので新潟県の中だと人口の度合いであったり医療の質は中間くらいであるように感じた。ただ周りの街に核となる大規模な病院や医療施設が存在していないように思えたので仮に重大な疾患にかかり治療が必要だというふうになった時に高齢者などは移動が大変であるという問題が発生しそうだと感じた。とても雪が降る地域であったのもう少し雪が降る地域に行きその場所ではどのような患者、どのような病気が起こりやすいのかを調べ統計をとればその病気や疾患への対策を考えることができるのではないかと考える。

事前にzoomで町の課題や特徴を知ってから現地に行ったことでいつもとは違う視点で町を見ることが出来ました。地域の人達の健康課題に合わせて、妙高市独自で取り組んでいる健康施策があって熱心に取り組んでいるんだと感じました。私は妙高市にしばしば行ったことがあってもともといい思い出があったり楽しい場所を知っていたりしたけれど、他県出身の人と一緒にいったことで妙高を知ってもらえて嬉しかったです。妙高の病院は曜日ごとに外来を受け付けている診療科が違うので、(ヘルプの医師が多いため)医師になって上越に帰った時、妙高のヘルプに行けたりするといったなと思いました。

妙高市をフィールドワークして思ったことは自然が豊かであるということである。自分は東京出身なので、一面雪景色というものを見たことがなかったが、妙高市に行ってそれを見ることができて感動した。将来医師になる身として感じたことは、妙高市でのフィールドワークを通じて、地域医療の重要性である。妙高市のような地方では、高齢化が進み、医療へのアクセスが都市部と比べると限られている。医師不足や交通の不便さから、定期的な通院が難しい現状も見えてきた。この経験を将来の医師として活かすために、地域に根ざした医療のあり方を考えていきたいと思う。例えば、訪問診療やオンライン診療を活用し、患者が無理なく治療を継続できる仕組みを作ることが大切である。また、住民とのコミュニケーションを大切に、生活環境や価値観を理解した上で最適な医療を提供する力を身につけたいと考えた。

新潟県妙高市を訪れ、自然の豊かさと地域医療の重要性を強く実感しました。妙高市は四季折々の美しい景観に恵まれ、特に冬には豪雪地帯として知られています。そのため、日常生活や医療にも雪が大きな影響を与えることを学びました。例えば、積雪によって移動が制限されることで、患者が病院に行くことが難しくなる場合があると知りました。また、救急搬送が困難になるケースもあり、こうした環境では地域に根ざした医療体制の確立が不可欠だと感じました。

また、妙高市では高齢化が進んでおり、慢性疾患を抱える患者が多いことも印象的でした。地域医療を支える医師は、単に病気を診るだけでなく、患者の生活環境や社会的背景を考慮しながら治療を行う必要があることを実感しました。訪問診療や地域包括ケアの重要性を改めて認識し、将来医師として地域医療に貢献するためには、専門知識だけでなく、患者や家族との信頼関係を築くスキルも求められると感じました。

この経験を医師としてどう生かせるかを考えたとき、まずは地域の特性を理解し、それに応じた医療を提供する力を身につけることが重要だと感じました。妙高市のような豪雪地帯では、交通手段が限られることを前提に、遠隔診療の活用や地域医療ネットワークの強化が求められます。また、高齢者の多い地域では、疾患の治療だけでなく、予防医療やリハビリテーションの充実も必要です。将来、医師として地域に貢献する際には、その土地ならではの課題を理解し、患者一人ひとりに寄り添った医療を提供できるようになりたいと強く思いました。

妙高市での体験は、医療の在り方を考える上で非常に貴重なものでした。都市部とは異なる地域医療の現実を知り、自分が目指す医師像について改めて考える機会になりました。この経験を生かし、どのような環境でも柔軟に対応できる医師を目指していきたいと思えます。

糸魚川市

2024.12.1



交通があまり発達していなくて、山が多くあるような地形を持っている地域では、移動手段として車が必要不可欠だと思った。運転ができなくなった一人暮らしのおじいさんおばあさんが病院に行くのは大変だと思った。糸魚川はものすごく田舎だと思っていたが、駅の周辺はお店も多くあった。昔からやっている飲み屋や飲食店が多くあった。今回の演習で大きな病院に気軽に行くことのできない人の暮らしを見ることができた。病院に来るのが大変であるということを理解して、出来るだけ何回も通院しなくてもいいように一回の診察で可能な限り対処する必要があると思った。このように体力的、物理的に病院に来るのが大変な人もいれば、精神的な理由で外出しにくい人や、忙しくて通院しにくい人もいるので、毎回の診察を一所懸命に行う必要があると思った。

今回糸魚川で行ったフィールドワークを通して、主に二点のことを感じ、学びを得た。

一点目は、公共交通機関の本数が少なかったことである。実習中の移動は徒歩とバスであったが、バスの時刻表を見ると都市部に比べてかなり本数が少ないと感じた。そのため、車を持っていない方は不便なのではないかと考えた。

二点目は、地域の魅力を発信しようとしている点である。糸魚川駅の近くに「糸魚川市駅北広場キターレ」という施設があった。中に入るとカフェ、糸魚川市駅北大火の歴史を伝えるスペース、子供が遊ぶスペース、地域の人々が交流するためのスペースがあった。さらにそのカフェは、「みんなで作る」というコンセプトのもと、地域の人々とともにメニューの開発を行っていた。地域住民の交流を活性化するとともに、糸魚川のことを発信しようとしているように感じた。

今回の体験を活かして、将来は地域の活性化にも携わっていくべきだと考えた。医師としてAEDの講習などを開いて医療知識を学ぶ機会を提供するとともに、地域交流を行う場を設けたいと感じた。また、その地域に住む一市民としてその地域特有のイベントに参加し、その土地ならではの魅力を発信したいと感じた。

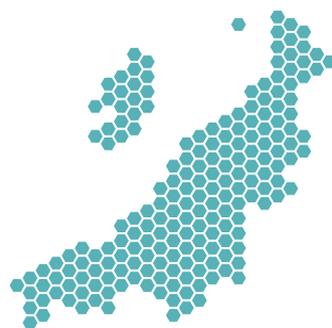
糸魚川市のフィールドワークを通じて、まず感じたのは移動の大変さでした。フィールドワークを行うにあたってグループのメンバーとどこに行きたいかを話し合ったり、事前のインタビューで糸魚川市の名所を聞いたりしたが、糸魚川駅から行ける範囲を考えると行けるところは日帰りであることもあってかなり限られていました。当日は徒歩とバスでの移動でしたが、新潟市や私の出身である東京と比べると糸魚川市内の移動は大変で、医療の提供するスピードや病院に行く難しさについて体感できたのではないかと思います。また、訪れた店の中には地域の方々が集まっているところもあり、地元のつながりを感じることもできました。今回のフィールドワークの経験の中で、今まで自分が生活してきた環境との違いを大きく感じました。医療を提供するにあたって患者の文化的背景や生活の背景を考えるうえでの理解が深まったと思います。糸魚川で得た学びを糧に、患者に寄り添った医療を実践していくことを目指したいと思います。

自分たちは糸魚川市の中でも栄えている方である糸魚川駅周辺を訪れた。街を歩いてみると、人の数は少なく、店も賑わってはいなかったのが、少し寂しい感じの雰囲気だった。また、会う人はほとんど年配の方だった。病院は糸魚川駅周辺には歩いていける距離にあるのだが、駅から少し離れてしまうと車やバスでないと行けない距離になってしまうことが分かった。また、糸魚川市は上越の病院だけでなく富山県の病院とも協力していることを知り、過疎地域における医療は県内だけでなく県外の協力も必要不可欠だと感じた。このフィールドワークを通して過疎地域のリアルな様子を知ることができたので、将来医師になってこのような地域で働く時には、この体験を生かして患者の生活などについてもしっかり聞き出して患者に寄り添える医者になりたいと思う。

ご協力いただきました皆様

フィールドワーク前の事前インタビューでご協力いただきました皆様方、誠にありがとうございました。

新潟市東区	新潟市東区役所 健康福祉課
新潟市江南区	新潟市江南区役所 健康福祉課
新潟市北区	新潟市北区役所 健康福祉課
新潟市西蒲区	新潟市西蒲区役所 健康福祉課 巻地域保健福祉センター
新潟市南区	新潟市南区役所 健康福祉課
新潟市秋葉区	新潟市秋葉区役所 健康福祉課
五泉市	医療法人社団真仁会 南部厚生病院
阿賀野市	あがの市民病院
阿賀町	阿賀町役場 こども・健康推進課
佐渡市	佐渡市役所 市民生活部 健康医療対策課
村上市	村上市役所 保健医療課
新発田市	医療法人社団松城会 松沢医院
関川村	関川村役場 健康福祉課
胎内市	胎内市役所 健康づくり課
聖籠町	聖籠町役場 保健福祉課
弥彦村	三条地域振興局 健康福祉環境部
三条市	//
燕市	//
加茂市	//
田上町	//
長岡市	長岡市役所 福祉保健部 健康増進課
小千谷市	小千谷市役所 健康・子育て応援課
柏崎市	柏崎市役所 福祉保健部 国保医療課
見附市	見附市役所 健康福祉医療部 健康福祉課
出雲崎町	出雲崎町役場 保健福祉課
刈羽村	刈羽村役場 福祉保健課
魚沼市	一般財団法人魚沼市医療公社 魚沼市立小出病院
南魚沼市	南魚沼市役所 福祉保健部 保健課
湯沢町	湯沢町役場 健康福祉部 健康増進課
津南町	津南町立 津南病院
十日町市	新潟県立十日町病院
上越市	上越市役所 健康福祉部 地域医療推進課
妙高市	妙高市役所 健康保険課
糸魚川市	糸魚川市役所 市民部 健康増進課



Niigata



新潟大学医学部医学科医学教育センター

〒951-8510 新潟県新潟市中央区旭町通1番町757

TEL 025-227-0425 **FAX** 025-227-2061

MAIL: cmec@med.niigata-u.ac.jp